
魔法戦記リリカル00 - ジェネレーション・ワールド -

かねごん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカル00 - ジェネレーション・ワールド -

【Nコード】

N4409U

【作者名】

かねごん

【あらすじ】

《注意！この作品は前作、魔法少女リリカルなのは - 世界を越えた超兵の戦い - からの続きです》

――アレルヤとロックオンがなのは達と別れ、過去の世界から帰還した二年後、人類と地球外変異性金属体：通称「ELS」との戦いが起こった。だが、刹那・F・セイエイがELSと対話に成功。彼等の母星へと旅立って30年の月日が流れた。

人々がイノベーターへと変革していく世界で、ロックオン・ストラ

トスとアレルヤ・ハプティズムにリジェネ・レジェッタからある任務を任される。

その任務とは…？ 二次創作です。嫌いな方は回れ右してお帰り下さいね？

第00話 始まり（前書き）

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

かねごんです。

第二段、始めました。

よろしく願います！

第00話 始まり

? side

?
へシステム……修復終了、テスト……クリア、ナノマシン……クリア、
電圧……クリア、製造ライン……クリア、全ての行程を終了、全システ
ム再起動開始

暗い闇の中で、チカチカと光が明滅する。

?
へ再起動確認中……誤作動無し。完全な再起動を確認

次の瞬間、全ての電気が灯り、その部屋を明るく照らす。

?
へあまりに長く、あまりに無駄な、あまりに嫌な、そんな時を過
ごしました……

その部屋に声が響く。だが、その声は人間の声ではなく、機械音声の声。

？
へされど…全てはより良き世界の為に…

部屋の中には大きな青い球体があり、その球体に大小様々なケールブルが繋がっていた。

？
へ始めましょう…美しい世界を作るために…

また部屋が暗くなり、ソコに続く全ての通路が封鎖された。

何人たりとも通しはしないと、主張するように……

魔法少女リリカルなのは

「ワールド・ブレイク」

始まります。

第00話 始まり（後書き）

最初はこんな感じで…

明らかに文章少ないな。

こんな調子ですが、頑張っていきますので、よろしくです！

第01話 30年後…（前書き）

さっそく感想が来ました。

楽しみにしていると書かれていて、とても嬉しかったです。

では、始まるよ！

第01話 30年後…

リジエネ side

リジエネ「うーん、どうしたもんかなー…」

ヴェーダのターミナルが置かれている部屋で、僕は考え事をしていた。最近は戦争が少なくなってきた。暇を持て余す事が多かったのに…。

リジエネ「なんでこんなのが出てくるのやら…」

僕の手には一枚の写真がある。この写真に写るコレが何なのか、ヴェーダに問いかけたところ…

【ELSと同じ、異種知性体の可能性大】

と、返ってきた。

リジエネ「ELSのような存在ねー……………」

ただ、ELSと違うのはコイツが初めて確認出来たのは一月前くらいだけど、何をする訳でもなく、地球から一定の距離を保って衛星軌道で地球の周辺をぐるぐるとまわっていること、そして不定期ながら謎のシグナルを発信していることだ。

リジェネ「うーん…助けを求める訳でもないし、何かの調査か、あるいは侵略の為の準備か…」

どちらにせよ、ほっとく訳にはいかない。ティエリアにも留守を頼まれてるし。

リジェネ「そうだ、彼等に頼もう」

こういう荒事になりそうな事は僕より彼等の方が断然上だし。

リジェネ「そうと決まれば、善は急げだね」

ヴェーダのターミナルがある部屋から出て、秘密格納庫に向かう。人間がこのソレスタルビーニングに入るようになって30年になるけど、彼等には未だに見つかっていない部屋や製造ラインがこの外宇宙航行艦ソレスタルビーニングには沢山あるのだ。

リジェネ「それじゃ、行きますか」

ティエリアのパイロットスーツを着た後、秘密格納庫に保管してあるジnkス4に乗り込んで宇宙に出る。

リジェネ「さて、彼等は元気かな？」

会うのは久しぶりだ。手土産でも持って来ればよかったかな？
そんな事を考えながら僕は彼等の元へ向かった。

ライル side

ライル「正体不明のシグナルを調べろ、だど？」

リジェネ「そ。謎のシグナルを調べて欲しいんだよね」

久方ぶりの客人を迎える為にパイロットの待機場所にいた俺に、来客はいかにも怪しい仕事を持ってきやがった。

ライル「おいおい…そんな仕事は若手にやらせろよ。俺はもう60代のおっさんなんだぜ？」

自分で言っというて悲しくなるが、事実なんだからどうしようもない。

リジェネ「そんな事を言って…身体はあの決戦からあまり変わってないじゃないか」

そう…リジェネの言う通り俺は、あのELSとの最終決戦後、月ぐらい経った時に自分がイノベーターになっているのを鏡を見た時に気づいた。

イノベーターになったおかげで歳をとっても外見も能力もほとんど変わらず、顔に多少シワがあるくらいですんでいる。

ライル「気分の問題だ」

リジェネ「あっそ。でも若手は他の事で忙しいから暇な君達に行ってもらおうから」

チッ！めんどくさい…

ライル「わかったよ、やりやあいんだろ、やりやあ…」

リジェネ「そうでなくちゃ」

ライル「んで？そのシグナルを調べりゃいいのか？」

リジエネ「そうだよ。だけど気は抜かない方がいい。その発生源は、こんなモノなんだからね」

リジエネが一枚の写真を見せてきた。ソコに写っていたのは…

ライル「ガンダムか」

リジエネ「そうだね。頭の形状はガンダムに似てる。けれどね、ヴェーダに聞いたんだけど、こんなガンダムは作ってないんだってさ。おまけにコイツ、ELSと同じで外宇宙から来た可能性があるらしいよ」

刹那がエルスと対話して彼等の母星へ旅立ち、30年が経っているが…さらに別の種族が来た可能性があるとは…。

アレルヤ「ロックオン、コーヒー入れて来たよ」

ロックオン「お、サンキュー。アレルヤ」

さっき、じゃんけんで負けたアレルヤがコーヒーを持って部屋に入ってきた。

アレルヤ「あれ？リジエネ、久しぶりだね」

リジエネ「こんにちは、アレルヤ」

お互いに挨拶をかわす二人。アレルヤも30年前から姿が変わっていない。どうやら最終決戦の最中にイノベーター化したらしい…と、本人から聞いた。

アレルヤ「ん？コレは…ガンダム？」

アレルヤがリジエネの持っていた写真を見ていた。

リジエネ「そうなんだ。彼には話したけど、よかったら君も行ってくれるかい？」

アレルヤ「？、どういことだい？」

リジエネが再び説明し始める。俺はソレをコーヒーを飲みながら見ていた。

人々が真のイノベーターへと変革していくこの世界で…このガンダムもどきは何を求めて地球に来て、シグナルを発信しているのだろうか…。

アレルヤ「なるほど、わかった」

思考を現実に戻すとアレルヤが何か納得していた。

リジェネ「理解が早くて助かるよ。コイツ、見た目はガンダムだからさ、僕らソレスタルビーイングのモノと勘違いされちゃまずいしさ。今はヴェーダが誤魔化してるけど、永遠には誤魔化せないからね」

アレルヤ「なら急いだ方がいいか。行こう、ロックオン」

ライル「了解」

さてさて…何も起きなきゃいいがな…。

アレルヤside

リジェネに頼まれ、僕はジンクス4、ロックオンはサバーニヤに乗って調査に向かった。

僕とロックオンはあのガンダムもどきが最後に確認されたポイントまで来て辺りを調べてみる。

アレルヤ「……何もないね」

ライル『つたく……リジェネの奴、本当にここかよ？何もないへピピ
ピ』……なんだ？』

通信越しにロックオンが文句を言っていたその時、レーダーに何か
が反応した。

アレルヤ「……ロックオン、1時の方向……」

ロックオン『あ？何かいるの……か？』

僕とロックオンが見たのは、大きな青と黒色の鳥だった。その鳥は
こちらに急速接近してくるといきなり変形して人型になってビーム
を撃ってきた！

ライル『チィ……やっぱそうなんのかよ！』

アレルヤ「な！？やられるもんか！！」

いきなりの事でびっくりしたけど、僕達は冷静に対処する。サバー
ニヤのホルスタービットでビームを防ぐと僕はビームサーベルを構
えてガンダムに攻撃する。

？
へ………へ

しかし、相手も両手にビームサーベルを持つとクロスさせて振り落とすとした僕のビームサーベルを防ぐ。

よし、かかった！

アレルヤ「君がナニかは知らないけれど！」

ロックオン『イノベーターをなめんな！！』

全方位に急速展開されていたライフフルビットの一斉射撃を受けてガンダムもどきは沈黙した。

アレルヤ「終わった…？」

ロックオン『一応、後の事も考えて手加減はしたが…喧嘩をふっかけておいて負けるのか、ありかよ？』

僕達は一安心する。

けど…事態は急変した。

アレルヤ「ん？反応がもう一機…？」

ライル『早えな…来るぞ!!』『ガゴン!!』っな!?!』

レーダーに反応した新たなアンノウンに気をとられた瞬間、機能停止させたガンダムもどきが再起動して、サバーニヤにしがみついた!

アレルヤ「ロックオン!!」

ロックオン『チィ!?!…っアレルヤ!来るぞ!!』

アレルヤ「!、しまっ「ガゴン!!」ぐああ!?!」

ロックオンに気をとられた隙に接近してきたアンノウンは、僕の機体にしがみつくとリジェネの言っていた謎のシグナルを発信し始めた!

アレルヤ「コイツもシグナルを出してる!?!」

ロックオン『こっちの機体もだ!くそっ!離せ!』

何とか引き剥がそうとするけど機体が上手く動かない。まさか…シグナルの影響か!?!

アレルヤ「くっ!このままじゃ…「ピピピ!」今度はなに!?!」

センサーが何かに反応してそちらを見ると、ソコにはあり得ないモノがあった。

アレルヤ「なんで…ゲートが!？」

30年前、時を越えて過去の世界に行き、帰る時にも使ったゲートがソコにはあった。

ロックオン『くそつたれ! 吸い込まれる…!?!? う、おあああああ
……………!』

アレルヤ「制御出来ない…! うわあああああ………!」

アレルヤとロックオン、謎のガンダムとアンノウンを飲み込んだ後、ゲートは何も無かったかのように消えた。

30年の時を経て、再び世界を、時空を越える超兵と狙撃手。

彼等が行き着く先は、果たしてどんな世界だろうか…？

第01話 30年後…（後書き）

リジェネ、少しだけしか出てません。

察しのいい方は分かるかもしれませんがね、青と黒の鳥が…

第02話 未知との遭遇・アレルヤ編・（前書き）

すでに予測されてる方もいますが…このワールド・ブレイクはGジェネレーション・ワールドをもとに、僕がかなりオリジナル化しますので…そのあたりはご了承下さい。

では、始まります。

第02話 未知との遭遇・アレルヤ編・

アレルヤside

アレルヤ「……う……」

風が頬を撫でる感覚に僕は意識が覚醒し始める。…風？

アレルヤ「なんで風が!？」

驚いて身体をおこし、辺りを見回す。
僕が寝ていたのは青い空の下で、地平線まで続く草原の真ん中だった。

アレルヤ「なんか…こんな事が前にもあったような…」

ハレルヤ（なのはとフェイトに会った時だ、相棒）

アレルヤ（ハレルヤ？随分と久しぶりだね）

随分前から起きなかったハレルヤが話しかけてきた。最後に話したのは…何年前だったかな…？

レント（しかし…また世界を越えるとは、君はつくづく何かに巻き込まれ体質だな、兄弟）

アレルヤ（レントまで…というか、やっぱりまた世界を飛んだんだね）

あのアンノウンが発生させたモノは、以前に僕が過去から未来へ戻る為に使ったゲートによく似ていた。

アレルヤ（はあ…ちなみにこの場所が何処か分かる？）

レント（今回は私の意志が反映されてないからな…検討もつかん）

ハレルヤ（ま、ソレは後ろにいる奴に聞こうじゃねえか）

後ろ？

ハレルヤの言葉を聞いて後ろを見ると…ソコには僕に突撃してきた赤と白のカラーリングが施されたアンノウン…ガンダムが立っていた。

アレルヤ「!?!、コイツも…ガンダムだったのか…」

? 〈目を覚ましたか、アレルヤ・ハプティズム〉

アレルヤ「しゃべった…!?!」

思わず警戒する。武器はない…どうする?

? 〈警戒しないで欲しい。手荒な真似だったが、ああでもしなければ君達に接触出来なかったのだ〉

膝をつき、僕を見下ろすガンダム。

…僕達に接触するため?

アレルヤ「…なら僕の質問に答えてくれ」

? 〈もちろん〉

アレルヤ「まずは、君の名前と…僕に接触した目的を聞かせてくれ」

? 〈了解した。私の名前はフェニックス…フェニックスガンダムという。そして、君に接触した理由は…数多の世界を助けるのに協力して欲しいからだ〉

アレルヤ「…助けて欲しい?」

フェニックスへそうだ。今、世界は危機に晒されている…。詳しくはコレを見た方が早いだろう」

フェニックスのガンダムアイから光が照らされ、スクリーンのように映し出した。

アレルヤ「……そんな、コレは……」

スクリーンが見せる光景が、僕には信じられなかった。その光景とは…

フェニックスへコレが…世界が晒されている危機だ」

従来のモビルスーツや人間サイズのモビルスーツ、果てにはかなり大型のモビルアーマーが人々を虐殺、殲滅し、その世界を終わらせる光景だった。

アレルヤ「なんであんな事に…！」

フェニックスへ……ジェネレーションシステムの暴走だ」

アレルヤ「ジェネレーションシステム…？」

フェニックスへそう、古の時代、あらゆる世界の管理と調整をしていたシステム：ソレがジェネレーションシステムだ」

1つだったスクリーンが幾つも現れ、そのスクリーン1つ1つが様々な世界やモバイルスーツを映し出す。

フェニックスへだが：ジェネレーションシステムは悪く言えば世界を好きなように出来る危険なシステムでもあった。それに異世界間の戦争勃発も危惧され：古の人々はジェネレーションシステムを完全破壊し、数多の世界に干渉出来ないようにした………筈だった」

アレルヤ「……………」

フェニックスへだが、そのジェネレーションシステムは再び起動した。己のもつナノマシンで自己を修復し、世界を調整し始めた。壊れたAIが導き出したのはより良き世界調整の為の不確定要素の排除……つまり知恵を持ち、成長、進化する人間という種族の排除だった」

スクリーンが消え、僕はフェニックスを見る。コイツは機械だけど……悲しげな雰囲気を出していた。

アレルヤ「どうして、僕なんだ？」

フェニックスへ………悪いとは思ったが、君の経歴を調べた。君は……いや、君の中にいる二人も含め、無限とも言えるパラレルワールド

ドの中で、君は私を扱うことの出来る人間だった。だから君に接触し、この話をした」

僕にしか出来ないこと、か…。

アレルヤ「……………わかった。協力するよ」

フェニックス「いいのか？」

アレルヤ「良いも悪いもないよ。僕しか出来ないなら、僕がやらなきゃ」

30年前、世界の存亡をかけたELSとの決戦の際に、対話を終え、ELSの母星へと向かう前に刹那が言っていた。

【良いも悪いもない。ただ、俺には存在する意味があった】

なら…僕という存在の意味は、この時の為にあっただのかもしれない。

フェニックスへならば行こう。アレルヤ・ハプティズム…いや、我がマスター」

フェニックスの手が僕の前に降ろされる。僕がその手に触れた次の

瞬間、風景が一転して僕は透明な球体の中にいた。そこから見えるのは、さっきまで僕が立っていた草原だ。

アレルヤ「フェニックス、コレは？」

フェニックス「コレが私のコックピットだ」

背中からの声に振り返ると、ソコには女の子がいた。

アレルヤ「君は？」

フェニックス「私がフェニックスだ：と言っても、この姿は君の知識で言うならば、デバイスがガンダムで、私は管制人格というモノだ」

彼女は騎士のような服装にフェニックスの装甲をあしらえた格好をしていた。

特に特長的なのは脚のふくらはぎまである長い純白の髪、その髪先が燃えるような鮮やかな赤い色をしていて、瞳はフェニックスガンダムのガンダムアイのような透き通るような翡翠色だった。

アレルヤ「綺麗だね、君は」

フェニックス「うぐ：初めてだな、そんな事を言われたのは：／／

／

頬をピンク色に染めるフェニックス。…微笑ましい姿だが、あまり刺激しすぎるのも良くないし、本題に入ろう。

アレルヤ「このガンダムはどうやって動かすんだい？操縦席やグリップとか無いんだけど…？」

フェニックス「ああ…このフェニックスは特殊なタイプでな、操縦者の意志と行動をトレースして機体を動かすのだ。そのトレースの接続や武装のサポートをすることが私の役割だ」

アレルヤ「そうなんだ…。動力はなんだい？」

フェニックス「……」

アレルヤ「フェニックス？」

フェニックス「！、…すまない。動力はオリジナル太陽炉を二基、胸部と股関節部に積んでいる」

……今の間はなんだろう？

アレルヤ「わかった。ならさっそく動かしてもいいかい？」

フェニックス「了解した、マスター。では…接続開始」

フェニックスが言葉を発すると同時に幾つもの透明なプレートが僕のまわりに集まり、身体に触れるか触れない程度の所で止まる。

アレルヤ「コレは…フェニックスかい？」

プレートが型どったのはフェニックスガンダムの姿だった。

フェニックス「そうだ。この状態で腕を動かしたり、歩いたりしたらフェニックスガンダムがその通りの動きをする」

そう言われて試しに腕を前に出すと景色の中にフェニックスガンダムの腕がうつる。…本当に動いてるよ、コレ。

アレルヤ「飛行に関しては？」

フェニックス「操縦者の意志…つまり考えだな。フェニックスはその通りの動きをしてくれる。その辺りはデバイスを使っていた君ならよく分かるのではないか？」

なるほど…あの感覚か。

アレルヤ「わかった。やってみるよ」

昔、リースやハルトと一緒に飛んでいた感じを思い出す。フェニックスガンダムはそれに応えるように、空中へと浮かんだ。

フェニックス「そうだ。言い忘れていたが、このガンダムは今はず常のモビルスーツと同じ大きさだが、私たちがこれから向かう世界に合わせて性能や大きさを変える事が出来るし、デバイスのような待機状態にも出来る。覚えておいてくれ」

アレルヤ「了解だよ。…ところで、ロックオン…僕と一緒にいた人は何処に行ったんだい？」

フェニックス「それが…すまない。実は私の姉妹機であるハルファスが連れていったのだが…途中ではぐれてしまってな、何処にいるのか分からないのだ」

申し訳ない、とフェニックスは頭を下げた。そうか…まあ、ロックオンなら大丈夫だとは思うけど…

アレルヤ「けど、君の姉妹機のハルファスも君と同じ考えと気持ちを持って行動しているんだよね？」

フェニックス「ああ、その通りだ」

アレルヤ「なら、いつかは会えるさ。目的が同じなら必ずね」

フェニックス「そうか…そうだな」

フェニックスは多少は不安が残ってるかもしれないけど顔を上げて前を見る。

フェニックス「よし…行こう、マスター！」

アレルヤ「了解、アレルヤ・ハプティズム、フェニックス、飛翔する！！」

機体がさらに上昇し始める。地上がどんどん遠くなるが何処までも草原が続いていた。
ある程度の高度に達したので機体をその場に静止させる。

フェニックス「アレルヤ、ゲートを展開、転移するから操縦を頼む」

アレルヤ「了解」

僕の背後でキーン…と音がなると目の前にゲートが展開された。

フェニックス「ゲート展開完了…今だ、アレルヤ」

僕はフェニックスガンダムを動かしてゲートをくぐる。

：もしかしたら：彼女達に会えるかもしれないと、少しだけ期待しながら：

第02話 未知との遭遇・アレルヤ編・（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回はロックオン編です。

第03話 未知との遭遇・ロックオン編・（前書き）

今回はライル視点です。

第03話 未知との遭遇・ロックオン編・

ライル side

ライル（……………んう…俺は何をしてたんだ…？）

頭にふにゅ…と、柔らかい感触がある。どうやら俺は寝ているみたいだ…

ライル（しかし、この柔らかい枕はなんだ？とても心地良いな…）

それに…良い香りがする。柔らかな、心が落ち着く香りだ。

？「そろそろ…起きて下さいませんか…？」

ライル「…ん…誰だ…？」

閉じていた目を開くと、ソコには…

？「あ…やつと起きていただけました…」

黒い髪と、深い青の瞳をした女の子の顔が目の前にあった。

…というか、この態勢はもしかして…

ライル「（膝枕されてんな、俺）…君は？」

年の功か、俺は動揺することなく身体を起こす。俺と女の子は向かい合った状態でその場に座る。

？「…私は、ハルフアス…」

夕暮れの草原で、女の子はそれだけを言うど黙りこんだ。
…ただし、俺を見つめたままだが。

ライル「あゝ、そのゝ、なんだ？俺に何か用なのか？」

ハルフアス「…助けて、欲しいんです…」

おいおい…初対面の女の子から何やら物騒な事を頼まれたんだが…。いや、まだ物騒な事を頼まれた訳じゃないな。詳しく話を聞いてみるか…嫌な予感しかないがな。

ライル「何から助けて欲しいんだ？」

そう聞くと、彼女は首をフルフル…と振る。

綺麗な黒いロングヘアーがふわり、と揺れる。

ハルファス「…違う…助けて欲しいのは世界です…」

ライル「世界…だと？」

コクリ、と頷くハルファス。彼女が両手を合わせてゆっくりとひらくと、手のひらの上に随分と懐かしいモノが現れた。

ライル「魔法だと…？まさか、君は…うおっ！？」

過去の人間…とは言えなかった。俺の目の前が真っ白になって目を閉じたからだ。

ライル「コレは…」

次に目を開けたら、ソコは赤茶けた大地が広がり…

『総員、撃てえー!!』

様々な魔力弾や砲撃が空を飛んでいく…

ライル「マジかよ…」

戦場だった。俺の背後から放たれた攻撃は空を突き進み、何かにぶつかって爆発する。

爆発の煙が晴れていくと、ソコには…

ライル「なんだよ…アレは…」

人間サイズのモビルスーツが浮いていた…。しかも同じ系統のヤツが何体もいやがる。

?
^……………^

大量のモビルスーツは地上に着陸するとビームライフルを撃ちながら此方側に近づいてきた!

『総員、対モビルスーツ戦、開始!!』

『『『おおおおー！！！』』』

背後からの大声に振り返るとソコには大勢の人がいてそれぞれが武器を持ち、その武器についているGNドライブから各々の魔力光と同じ色の粒子が舞い散る。

そして、戦いが始まった。圧倒的な物量に怯む事もなく戦う人々…。仲間が傷付き、倒れてしまっても、彼等は止まらなかった。

ライル「…やめろ…。」

俺の目の前でビームに貫かれて倒れた人…その顔は志半ばで倒れる無念で、悲しく歪んだ顔をしていた。

ライル「やめろ…！」

戦いは続く。撃っては撃たれ、撃たれたら撃ち返す。攻撃が収まる事はなく、その激しさはさらに加速する。

…此処は、地獄か？

ライル「やめろおおー！ー！！」

腹の底から叫びをあげる。すると全てが消えて、元の夕暮れの草原へと戻っていた。

ライル「はあ、はあ…」

ハルフアス「…大丈夫ですか…？」

ライル「！、…っ！！あ、ああ…大丈夫だ…」

ハルフアスが俺の目の前にいた。俺は怒りに任せて思わず怒鳴ってしまいそうになるが、何とか耐えた。
何故なら、彼女の瞳からは涙が溢れていたから…

ライル「なんで、泣いてるんだ？」

ハルフアス「…貴方に…ひどい事をしたから…ごめんなさい…」

うつむいて、謝罪するハルフアス。涙がぽろぽろと地面に落ちる。
…女の子は悲しませるな…て、親父によく言われたっけな…

ライル「…助けるよ、ハルフアス」

ハルフアス「……？」

顔を上げたハルフアスは涙も拭かずに、不思議そうな顔をして俺を見る。

……とにかく、帰ったらリジェネに文句を言ってやる。

ライル「世界を救うんだろ、やってやるよ」

ハルフアス「……いいの？」

ライル「いいに決まってるだろ。世界の危機ぐらい、俺が救ってやるよ」

ハルフアス「！……ありがとう……」

潤んだ瞳で微笑むハルフアス。う……、かわいいじゃねえか。

ロックオン「そうと決まればさっさと行動するか。俺のサバーニヤは何処だ？」

ハルフアス「アレ……？」

ハルフアスが指をさしている方向を見ると、ソコには……

ライル「……そ、そんな馬鹿な……」

ズタボロになったサバーニヤが膝をついていた。確かに古い機体ではあったが…

ライル「済まねえ…力になれそうにない…」

頭を掻きながら俺はハルファスに謝罪する…が、彼女は首を横に振る。

ハルファス「…大丈夫、私が貴方の力になる…」

どうやって…と言う前に、ハルファスが光に包まれる。その光はだんだんと大きくなり、光が弾け飛ぶとソコには…

ライル「マジかよ………」

俺たちに襲いかかってきたガンダムが立っていた。しかも、襲われた時にはなかったGNドライヴがダブルオーガンダムのように、両肩についていた。

ハルファスへ私の、もう一つの姿です…

ハルファスはその場に膝をつくと手を差し出してきた。

…乗れってことか、コレは…。

そして、俺がハルファスの手に乗ろうとした次の瞬間、俺はコックピットに座っていた。

ライル「……は？」

ハルファス「…ようこそ…マスター」

後ろを向くとハルファスが座席に座っていた。何が起こったかよく分からないんだが…とりあえず今分かる事はガンダムハルトと同じ複座式コックピットだな、こりゃ。

ライル「ふむ…原理云々は魔法で説明がついちまうが…なんで君は俺たちを攻撃した？」

ハルファス「…お姉ちゃんが、自分で見つけたマスターは自分で力を試せ、て言ったから…」

…はた迷惑な姉さんだな、おい。

ライル「はあ……。ちなみにアレルヤ…俺と一緒に居た奴は何処にいるんだ？」

ハルファス「…分からない…」

…前途多難な予感がプンプンしやがるな…

ライル「まあ…仕方ないか。とりあえず、世界を救いにいきますか…」

ハルファス「…了解、ゲート、展開……完了」

ハルファスがボソボソ…と何かを呟くと、目の前にあの白いゲートが出現する。

ライル「（サバーニヤと同じコックピットだし、何時もの感じで行くか…）ロックオン・ストラトス、ハルファス、狙い撃つぜ！」

機体を浮かばせて前に進み、ゲートをくぐる。

もしかしたら、彼女に会えるかもしれないという、希望を胸に…

第03話 未知との遭遇・ロックオン編・（後書き）

ハルファス擬人化WWW。

フェニックスとハルファスの設定は次回に。

第X話 設定（前書き）

設定だよ。

ハルファス「…エッチ／／／／」

何故に！？

第X話 設定

アレルヤ・ハプティズム

年齢…56歳

容姿…ELSとの最終決戦以降、あまり容姿が変わっていない。髪が背中の中辺りまで伸びていてソレを首の辺りで髪をゴムでまとめている。

備考…最終決戦最中に真のイノベイターへと変革した。ただハレルヤも変革していて反射はハレルヤの方が上だが、思考はアレルヤが上である。（ようは二人とも以前より強くなっている）
十数年前からほとんどソレスタルビーイングの秘密基地にいて年に1、2回ほど何処かに出かけていく日がある。

ライル・ディランディ

年齢…61歳

容姿…アレルヤと同様に最終決戦からあまり容姿は変わっていない。

備考…最終決戦から一月経ったくらいに真のイノベイターになった事が発覚した。今は秘密基地にいて若手に現場を任せて裏方に徹している。

年に何回か出かけているがだいたいは両親と妹の墓参りである。

フェニックス

年齢…不明（推定18～20歳）

容姿…身長160センチ。スリーサイズは上から89／58／84。髪はふくらはぎの辺りまであるロングヘアで白髪、毛先15センチが鮮やかな赤色をしている。瞳が澄んだ翡翠色をした美少女である。

備考…アレルヤをマスターと呼ぶ女の子。本人はフェニックスガンダムの管制人格のようなモノと言うが細部は不明。

はつきりとした口調をしていて、妹機のハルファスを気にかけている。

ただ不測の事態が起きると若干パニックになりがち。

ハルファス

年齢…不明（推定14～16歳）

容姿…身長は140センチ。スリーサイズは上から70／50／6

8。

髪は腰の辺りまである黒髪のロングヘア。瞳は吸い込まれるような深い青色で美少女（美幼女かもしれない）である。

備考…ライルをマスターと呼ぶ少女。ハルファスガンダムになる？事が出来る女の子ではあるが本人もガンダムの中にいるので細部は不明。

あまり喋る事は得意ではないが自分の意志はしっかりと伝えようと努力している。感情は豊かだが喋り下手の為に上手く表せていない。姉機であるフェニックスの言う事は何でも信じてしまう、素直な娘である。

姉とは違い、不測の事態が起きても冷静に対応する。

フェニックス、ハルファスについて

人間形態

容姿で説明した姿。普段はこの姿で生活している。

ガンダムモード

文字通り、通常のモビルスーツサイズの形態。ただし一定時間経たないと人間形態に戻れないし、一度なると一定時間経たないとモビ

ルスーツ形態にはならない。フェニックスとハルファスでコックピットの形式が違うが細部は不明。（フェニックスのコックピットはモビルトレースシステムのようなモノと考えて下さい）

デバイスモード

前回のアリオス（デバイス）と同じようにガンダムになれる。違うのはアレルや達がデバイスを装着したあと、ハルファスやフェニックスの20センチくらいのホログラフィーが現れること。一定の距離ならアレルや達から離れ、ホログラフィーだけでの偵察も可能。

こちらは人間形態にすぐに戻れるしデバイスモードにもなれる。

フェニックス（モビルスーツ形態、デバイス形態）

武装

ビームサーベル×2、メガビームキャノン×4、ビームライフル×2、フェザーファンネル×8

動力

オリジナル太陽炉×2（胸部、股関節部）、?????×1

ハルファス（モビルスーツ形態、デバイス形態）

武装

ビームサーベル×2、クロスメガビームキャノン×4、フエザーフ
アンネル×8

動力

オリジナル太陽炉×2（両肩）、???×1

第X話 設定（後書き）

まだ知りたいとか不明な事がありましたら感想よりお知らせ下さい。
ネタバレしないくらいには設定を追加します。

第04話 青き不死鳥（前書き）

リリカルなのは、にもかかわらずもうしばらくなのは達が出ない小説……いいだろうか？

第04話 青き不死鳥

ライル side

ゲートをくぐり抜けた俺たちは、うつそうとした森に着陸した。

ライル「しかし…不思議なもんだ…」

ハルフアス「……？」

ハルフアスガンダムはまた少女の姿に戻り、俺の目の前に立つ。
…モビルスーツから少女になり、少女からモビルスーツになるハルフアス。原理はどうなってるんだ…？

ライル「（まあ、深く考えたらキリがないしな…）とりあえず…ハルフアス、此処は何処だ？」

ハルフアス「……森だよ？」

…マジか……？

……ヤバイ、彼女が見た目同様に子供だったとは…

ガクリ…と膝をつくとハルフアスがポンポン、と肩を叩いてきた。

ハルフアス「…元気、出して？」

首をかしげて俺を見るハルフアス。なんというか…怒る気も失せちゃう。

ライル「はあ…ま、のんびり行くか」

立ち上がってハルフアスの頭をくしゃ、と撫でてやると彼女は気持ち良さげに目を閉じる。

ライル（なんか…父親になった気分だな）

そんな事を思いながら、俺はとりあえず歩くことにした。

…そういえば、俺はハルフアスに世界を救うと約束したが、何からどう救えばいいのか聞いてなかったな。

ライル「（ちょうどいい、聞いてみるか）ハルフアス、聞きたいんだけどいいか？」

ハルフアス「…なに？」

ライル「ハルフアスは俺に世界を救ってくれと頼んだが…俺は何をどうすれば世界を救えるんだ？」

歩きながら横にいるハルフアスに聞く。…手を繋いで歩くのは、まあ…ご愛嬌だ。

ハルフアス「…マスターには、ジェネレーションシステムを破壊して欲しい…」

ライル「ジェネレーションシステム？何だ、それは？」

ハルフアス「…世界を調整するシステム…今は壊れていて、人類の抹消を行ってる…」

おいおい…世界の調整とか人類の抹消とか物騒なシステムだな…

ライル「つまり、俺がジェネレーションシステムをぶっ壊せば世界が救われるんだな？」

前を向いたままコクリ、と頷くハルフアス。

…やるべき事はわかった。次は武器に関してだな。

ライル「俺はハルファスガンダムに乗って戦えばいいんだよね？」

今度は首を横に振った。

ハルファス「…モビルスーツモードはそんなになれない…あの姿は一度なると戻るのに時間がかかるし…なるべくゲートを通る時かモビルスーツ戦の時にしか使わないで欲しい…」

ライル「なるほどな…なら俺はどうやって戦うんだ？」

ハルファス「…私はデバイスにもなれるから…それで戦って欲しい…」

ライル「本当になんでもアリだな…オーケー、ならいざというときは頼むぜ？」

ハルファス「…うん」

ハルファスは力強く頷いた。その後は特に会話をすることもなく、歩いていく。

ライル「んゝっ…！はぁ…さすがに疲れるな…」

歩くこと二時間、やっとひらけた場所に出た俺は背伸びをする。

ライル「ハルフアス、大丈夫か？」

ハルフアス「……うん、大丈夫」

……俺でも多少疲れたのに、息切れすらしてないとは…

ライル（俺も歳をとったもんだ…いや。それとも、最近の若い奴はみんなこんな感じなのか？）

いや、そもそも彼女は人間じゃないから考える方が間違いないのか？
そんな事を考えてると風がふいた。

……嫌な、匂いも一緒だが。

ライル「ハルフアス、近くに町や村…人の集落はあるか？」

ハルフアス「……ある。けど…コレは…!？」

ハルフアスの目が見開かれる。……非常事態だな。

ライル「ハルフアス！」

ハルフアス「イエス、マスター」

ハルフアスが示す方向へ俺達は走る。

風が運んできた…肉が焦げたような匂いが、俺の嫌な予感を加速させる。

ライル「ちくしょう…嫌な予感に限ってビンゴかよ!!」

進む先に煙が見える。焚き火をやっているとカレベルじゃねえ…黒々とした太い煙だ。

急がねえと…!

ライル「アレか！」

ようやく町の家が見えてきた。人の悲鳴も聞こえてきたがな。

ライル「ハルフアス!俺に何か武器を!!」

ハルフアス「…私を使って」

ハルフアスが手を差し出してくる。その手を、俺は迷うことなく握り返す。

ハルファス「…マスター、ライル・ディランディを認証…デバイスモード、起動…」

ハルファスが一瞬光ったと思ったら、彼女は俺の前からいなくなっていた。

ライル「ハルファス？何処だ？」

ハルファスへ…ここです

ハルファスの声が聞こえた方を見ると…ソコには俺の肩に座る身長20センチくらいのハルファスがいた。

ハルファスへ…デバイスモード、正常起動しました…

ライル「コレがデバイスモード…」

以前使っていたデバイスのケルディムと同じで俺の全身は青と黒の装甲で覆われていた。

ライル「上空から町の状況を確認する。行くぞ！」

ハルフアスへ…了解

その場から俺たちは町の上空まで飛翔する。眼下の町は、悲惨な光景がひろがっていた。

焼け崩れる家、逃げ惑う人々、ソレを追いかける人間サイズのモビルスーツ、老若男女関係無しに奴らは人の命を奪っていく…

ライル「コレが…こんな、事が…!!」

ハルフアスへ…襲撃している機体からジェネレーションシステムのコードを確認。機体はザク2…マスター…

ライル「ハルフアス、敵を殲滅する！」

ハルフアスへ…了解、クロスメガビームキャノン、展開

肩にある4つのキャノン…1つにつき2門、計8門が敵に向けられる。

ライル「エネルギー配分は装甲を貫く程度でいい！連射して敵を減らす！」

ハルフアスへ…了解、調整終了。いけます…

ライル「了解！ロックオン・ストラトス！目標を…狙い撃つぜ！」

四機を同時にロックオンしてキャノン撃つ。出力を調整してあるから敵を頭から貫くぐらいですんでいる。

ハルファスへ：敵、コチラに気づきました◇

ライル「回避運動をしつつ射撃する！他に武器はあるか！？」

ハルファスへ：ビームサーベル、フェザーファンネルがあります：フェザーファンネルはマスターの世界のファンングやビットのようなモノです：◇

ファンングやビットと同じ：遠隔操作兵器か！

ライル「よし、フェザーファンネルを射出！操作はハルファスに任せる！：！」

ハルファスへ：了解。フェザーファンネル、射出◇

ひし形に近い形をしたファンネルが射出され、キャノンと一緒に敵を撃ち抜いていく。

ライル「許さねえ：、テメエらは絶対に許さねえぞ！：！」

殲滅には10分もかからなかった。

ライル「…くそつたれ…！」

街に降りた俺は辺りを見回し手に力を入れた。

焼け落ちた家、倒れた人々…32年前のアロウズがカタロンのアジトをオートマトンで襲撃してきた時の事を思い出した。

「父さん！父さん！」

「そんな…なぜ、なぜ妻が死ななければならないのだ！？」

「お兄ちゃん！何処〜！」

「うわああああ！母さーん！」

「ちくしょう…ちくしょう…！」

沢山の人の声が耳に入る。悲しみや怒り、憎しみの叫びをあげる。

「助けて下さったのは貴殿たちですか？」

後ろからの声に振り返るとソコにはスーツを着た初老の男性が立っていた。

ライル「…あんたは？」

ハルファスが俺の手を握りしめる。…どうやらハルファスは他人とのコミュニケーションが苦手みたいだな。

「ああ、すみません。私は名はアルガ。この町の代表です…この町の人々を助けていただきありがとうございます…」

アルガさんは深々とお辞儀をしてきた。…名乗られたんだ、なら、こちらにも名乗らないとな。

ライル「代表の人だったのか…俺はロックオン、こっちはハルファスだ。すまない、もう少し早く助けに来る事が出来れば…」

俺はつい、うつむいてしまう。そんな俺を見たアルガスさんはゆっくりと首を横に振った。

アルガ「貴殿方が気に病む事はない…むしろ貴殿方が私たちを助けてくれた事を感謝します…」

その後、俺は犠牲になった人たちの簡易的な埋葬を手伝い、その日はアルガスさんの家に泊めてもらうことにした。

ライル「なあ、ハルファス…」

ハルファス「…なに…？」

俺たちにあてがわれた部屋で俺は椅子に、ハルファスはベッドに座ってお互いに向かい合う。

ライル「今日のアレは何だ？俺たちの世界じゃあんなモビルスーツは存在しない」

ハルファスは足をパタパタとさせながら何か考えこむ。

……数秒たって、彼女はおもむろにベッドから降りると俺の方に歩いてきて…

ライル「ちょ、おいおい!?!」

俺の顔を両手で挟むと自分の顔を近づけてきた!

ライル「何をするつもりだ!?!」

ハルフアス「…マスターに、私の記録を見せるから、おでこをだして…?」

ソレを聞いた瞬間、ガクリと力が抜けた。何だ、そういう事だったのか…

ライル「そういう事は先に言いなさい…」

ハルフアス「…?、わかった…」

ふう…ともかく、ハルフアスの言う記録とやらを見せてもらいますか。

キイイイン……………

おでこを合わせた瞬間、俺の意識は遠くへ飛んでいく感じに襲われ、そのまま目の前が真っ暗になった。

第04話 青き不死鳥（後書き）

ハルファスの武装は少しだけ増えます。

今のままだとライルの狙撃が生かせないので。

第05話 赤き不死鳥（前書き）

今回はアレルやsideです

第05話 赤き不死鳥

アレルヤside

今回はゲートをくぐっても意識を失う事はなく、僕はコックピットから周りを見ていた。

アレルヤ（コレが…ゲート）

ゲートの中は明るく、海のような澄んだ青の空間が広がっていた。その中を、無重力なのに落ちていくという感覚が襲い、何だか矛盾した空間だった。

フェニックス「マスター、あと10分でゲートの出口に到着する」

アレルヤ「了解」

後ろにいるフェニックスが絶えずパネルをタッチして何かの情報を整理している。

…少しだけ見せて貰ったけど、僕には理解出来なかった。

フェニックス「あと5分くらいか…」

アレルヤ「……………?」

……何だろう、とても嫌な感じがする。頭にチリチリと、電気が走る感じだ…

フェニックス「あと3分…」

アレルヤ「……………来る!」

嫌な感じが頂点になった時、僕はフェニックスガンダムに急制動をかけた!

フェニックス「きゃあ!?! な、何を「来るよ!」 えっ!?!」

フェニックスが動揺していたけど、今の僕と敵はそんなのお構い無しだ。

僕達の進行方向から青い空間を突き進むようにミサイルが飛んできた!

アレルヤ「ビームライフ!」

僕の声に反応してフェニックスガンダムの手にはビームライフルが握られる。

アレルヤ「このお!!」

ビームライフルの引き金を引いて目の前から来るミサイルを撃ち落とす!

フェニックス「そんな…ゲート内で攻撃…!?まさか、ジェネレーションシステムが介入してくるなんて?!」

後退しながらミサイルを回避、当たりそうなモノだけ撃ち落とす。

アレルヤ「…く! いったい何処から!？」

フェニックス「っ…!! 駄目、ゲートの中では発射地点が分からない!」

アレルヤ「なら、じり貧になる前に!」
ハレルヤ「一気に行くぜえ!!」

後退を止めてハレルヤと意識を共有、共に前に進む。ミサイルはい

まだにコチラに向かってくるけど、機体に当たるか当たらないかのスレスレを僕達は飛んでいく。

フェニックス「す、すごい…！」

ハレルヤ「感心してる暇があんのか！？女あ…！」

アレルヤ「フェニックス！出口は！？」

今は全て避けきれているけれど、長引けば長引くほどに状況は悪くなる。

その前に敵を倒すかゲートから脱出しないと！

フェニックス「え！？えっと…そのまま、そのまま前へ…！」

慌てながらも自分のやるべき事を思い出したフェニックスは進行方向をモニターに映す。その先は…

アレルヤ「この方向、弾幕の中心！？ハレルヤ！」

ハレルヤ「あいよ！」

さらに激しさを増す攻撃。ミサイルの他にマシンガンみたいな実弾攻撃まで混ざり始める。

ハレルヤ「当たらねえなあ!？」

アレルヤ「当たったら、それも問題だよ」

軽口を叩きながらも微妙かつ、絶妙な動きで全てよける。

ハレルヤ「それもそうか。なんせ今の俺らは…」

アレルヤ「真のイノベーターなんだから」

両の瞳に金色の光が走る。僕の思考は澄み渡り、俺の反射は冴え渡る。

アレルヤ・ハレルヤ「「そんじゃさ…押し通るよ!」」

機体を縦横無尽に回転させて両手に持つビームライフルの引き金を引く。

アレルヤ「上35度、左48度、右55度、下82度左13度、上64度…」

ハレルヤ「ハハハハハはあ!！」

ビームが放たれ、その先にある敵を撃ち抜く。
爆発の花が咲き、攻撃が緩くなっていった。

フェニックス「敵は…サーペントだったのか」

アレルヤ「サーペント？」

フェニックス「重火力を主に置いた量産機だ。パックの交換で様々な武器を使い、量産機にしては高い防御力と機動性を有する機体だ」

アレルヤ「そう…」

空間に浮かぶサーペントの残骸を見る。

あの形状…僕らの世界にはないモノだ。

フェニックス「しかし…マスターは凄いな」

アレルヤ「?、そうかい？」

フェニックス「ああ!だってアレだけの数の攻撃を難なくかわして、敵を全滅させたんだからな!」

フェニックスを見ると彼女はとても嬉しそうに笑っていた。

…うん、普通に可愛いね。

フェニックス「やはり私の目に狂いはなかったな！」

アレルヤ「ははは…期待に応えられてなにより、かな？」

僕はゲートの空間を再び前に進む。

鉄屑の残骸となったサーペント達の中を通過していく。

アレルヤ「このままゲートに〔ドカアアン！〕ぐああ！？」
フェニックス「きゃあああ！？」

その時だった。背後からの衝撃にコックピットが揺れる。
いったい何が起こきたんだ！？

アレルヤ「ぐうう！？」

しかも体制が立て直せない！？

アレルヤ「駄目だ！制御出来ない！？フェニックス！！」

フェニックス「……………」

返事がない彼女を見ると力なく空中に浮いていた。
衝撃で気を失ったみたいだ。

アレルヤ「くう…！うああああああ！！」

重力に引っ張られて、僕達は何処かへ落ちていった。

? side

?へふむ…ハルフアスは無事に着いてしまったが、君は行かせはせんよ。フェニックス

遠距離からの攻撃だから相手は何が起きたか分かるまい。

だが…

?へまさか私以外にもゲートが形成出来るようにしていたとは…人間どもめ

まったく、忌々しい。

しかも彼女らにソレを施すとは、人間とは悪魔の種族だな。

？
〈滅ぼさねばならんな、確実に〉

人間には有限の時しか生きられぬが、私たちにはソレはない。

？
〈じっくりやるとするか。私の悲願の為にも〉

フェニックスが何処かの別世界に落ちたのを確認して、私はその場から離脱した。

第05話 赤き不死鳥（後書き）

フェニックスは別の世界へ…さて、どんな世界へ飛ばしましょうか？

第06話 死神と剣士（前書き）

現段階でアレルヤ、フェニックスSide、ライル、ハルファスSide、リリカルSideで話しは進めます。

三つが一つの話になるのはもう少し後です。

第06話 死神と剣士

ティアナ side

ティアナ「ふう…これで今日の仕事も終わりね」

自分の机の上を片付ける。最近はコレといった大きな事件も起きないので書類仕事ばかりだ。

ティアナ「…さて、帰るとしますか」

鞆を肩にかけて仕事で来ていた地上本部が出る。間借りしている近くのアパートに向けて歩を進める。

ティアナ「〜♪」

鼻歌を歌いながら歩く。最近、事件が少なくなっているのはひとえにカイゼルさんが管理局のトップになったからだ。

彼はリクとソラのわだかまりを無くす為に双方の管理局の3分の1を解体、再編したのだ。

これによりソラの人間がリクに、リクの人間がソラになり、お互いの苦勞を知る事で協力しあう事の大切さを知った。

それに今の管理局は不必要に各次元世界の干渉はせず、内部改革を優勢している。管理外世界については危険性がないと判断したら管理局の完全撤退もされていて今の管理局は強靱になりつつある。

ティアナ（おかげで大きな事件が起きてもすぐに対応がとれるようになってるし…さすが、カイゼルさんよね…）

そのぶん仕事が二倍三倍と増えたけど…。

そんな事を考えながら人通りの無い道を歩いていると…後ろから誰かにつけられている感覚に襲われる。

ガシャン…

ティアナ「誰!？」

意を決して後ろから聞こえた音に振り返ると、ソコには…

?
〈…〉

全身を覆う黒いフードをかぶり、緑色に光る鎌を持った…まさに死

神と呼ぶにふさわしい何かがあった。

私はすぐさまクロスミラージュを展開して銃口を何かに向ける。

ティアナ「武器を捨てて、頭の後ろに手をまわしなさい！」

？
〈……〉

死神は私の言葉を聞きもせず、その場に立ち尽くす。…脅しをかけてみるか。

ティアナ「あと3つ数えるうちに武器を捨てなければ撃ちます！」

〈……〉

ティアナ「ひとつ！」

奴は動かない。

ティアナ「ふたつ！」

まだ、動かない。

ティアナ「みっつ！」

私はトリガーを引いた。だが…

ガギイイン！

ティアナ「!?、直撃なのに…弾いた？」

?
〈…〉

肩の辺りに当たった魔力弾を無視して死神は無言のまま上空に飛び上がり、鎌を振り上げ、落下と共に振り落としてきた!!

ティアナ「チッ!? クロスミラージュ！」

クロスミラージュへダガーモード

ギキイイイン…!

マシンガン形態からダガー形態に変更して鎌を受け止める！
飛び上がった時にフードが吹き飛び、その顔があらわになる。

ティアナ「なっ!？」

?
^………v

死神の特長的な顔には見覚えがあった。ゆりかご事件を通して、幾度となく私たちを助けてくれた存在と、同じような顔だったから…

ティアナ「なんで…!? こんのおお!!」

ダガーを握る手に力を入れて、相手を弾き飛ばしてつばぜり合いから距離を取る。

相手は悪魔の翼のような機械翼を広げて空中にとどまった。

?
^………v

私がクロスミラージュを構えるとあちらも鎌を構えた。

さあ…行くわよ…!

ティアナ「何処のどいつか知らないけれど…。アナタを取り押さえさせてもらうわ…ガンダム!!」

星光side

今現在、私は1人で管理世界の1つにある広大な実験場に戦技教導官（なのはの色違いで私は黒い制服ですが：フェイトではありません）の服を来て立っていた。

星光「こちらスター・ワン、配置につきました」

オペレーター『了解しました。それではこれより、新型デバイス：“GNデバイス”最終試験、及び調整を開始します。起動して下さい』

通信を繋ぎ、こちらの準備完了を報告。仕事を始めます。

星光「了解しました：来たれ、ルシフェリオン」

腕輪タイプのGNデバイス、ルシフェリオンは光を放つとその真の姿を現す。

なのはのバリアジャケットを基準に、肩、胸、腰、脚のふくらはぎに黒の装甲が展開され、背中にGNドライヴ2と折り畳み式のビームランチャーが二門、後ろ腰にビームピストル2が二丁、装備される。

星光「ルシフェリオンの展開完了、問題無し。次の指示をお願いします」
オペレーター『了解しました。では今からターゲットを出すので制限時間内に全て撃ち落として下さい』

星光「了解。いきます」

その場から飛び立つと近くにあった標的をビームピストルで撃ち抜く。

私がここで何故、試験官のようなことをしているのかと言うと…まあいろいろ割愛しますが、なのはに勧められた…と言うのが妥当でしょう。

アレルヤが帰って一年が経った頃にはなのはのリンカーコアの治療は完治し、私は自由に動けるようになりました。

ですが…自由はいいのですがソレが暇でしようがない。
なので、なのはに紹介された新型武装のテストパイロットを今やっているわけです。

星光「目標を撃破」

ビームランチャーで遠方に現れた移動式標的を破壊する。

ああ、そういえばGNデバイスについて説明していませんでした。

GNデバイスとは、その名が示す通りGNドライブ搭載型のデバイ

スです。

ガンダム、ジnkスの強さを目の当たりにした管理局はゆりかご事件後に残っていたジnkスやガガを回収、GNドライブを抜き取りデバイスに組み込んだのです。

ただ：概存のデバイスでは仕組みが違いすぎる為に新たなデバイスを製作しなければならなかった。

その為に作られたデバイスがGNドライブ積載型デバイス：通称、GNデバイス。

そのテスト機は三機作られ、私が使っているルシフェリオンがそのうちの一機と言う訳です。

星光「…全ての目標を撃破しました」

最後の標的をビームピストルの刃の部分で叩き割る。

と、説明している間に終わってしまいましたね。

まあ、コレで読者の方々がGNデバイスについて理解していただけたら何よりです。

ちなみにGNデバイスには二種類があり、ひとつは：

管理局で改造して使用している太陽炉・2を積載、自身の魔力を粒子に変換して戦うモノ、

ふたつめは：

スカリエッティが製作した擬人太陽炉・改をそのまま積載、魔力が
少ない人でも使用できるようにしたモノ、

このふたつですね。

ちなみにルシフェリオンは前者、太陽炉・2積載型です。

オリジナル太陽炉の製作は行われてはいません。リースがアレルヤ
と約束したからとデータを公開しなかったからです。

ソレが正しいでしょう。疑似太陽炉・改や太陽炉・2だけでも、今
の時代の人間には手に余るモノだ、と私は思います。

オペレーター『ご苦勞様でした。試験は終了です、帰投し……………ザ、
ザザー…』

星光「…もしもし？…通信が途絶えた？」

地上に降りて砂嵐しか聞こえない通信を切る。

…嫌な予感がしますね。

そういえば、嫌な予感が当たりやすいのは世界共通なのでしょうか？

星光「ああ…やはり当たりましたか」

目の前に予定にない目標が降り立った。

ほう…そう来ましたか。

この方があの方と同じかは知りませんが、挨拶くらいはしておきま
しょうか。

星光「はじめまして…いや、お久しぶりといったところでしょうか
……。私を覚えていますか？」

？
／＼…………／＼

……返事は無しですか、悲しいですね……………なんて微塵も思いませ
んけど。

星光「ふう…お互いに本質は同じような存在ですし、やるべき事は
1つですか」

ビームピストル2を両手に持ち、腕の力を抜いてダラリ…とさせる。

相手は右腕についた大剣をコチラに向ける。

そう、姿形が違えども…相手も私も戦うことしか出来ない。その為
だけに産まれてきたから。

星光「では、参ります」

目の前にいる予定に無い目標… “ガンダムエクシア” との戦いが此処に始まった。

ティアナ side

キン！ガキン！キキキン！！

夜の闇に金属がぶつかり合う音が響き、私の魔力光…オレンジと相手の緑色の鎌が光の軌跡を描く。

ティアナ「しぶといのよ！ったく！」

？
^……^

一度距離を取る。相手は追撃もせずにその場に立ち尽くす。

ティアナ（何度か相手の肩とか切ったけど…傷が少しついたくらいね）

とんでもない固さね。さすがはガンダム…といったところかしら。

ティアナ（通信はジャミングされてるのか通じないし、此処で引いたら民間人に被害が出る可能性が高い…結局、倒すしかないのよね）

クロスミラージュを握りしめる。…人間と同じ構造をしているのなら、装甲が弱い箇所を狙うしかない。
つまりは…

ティアナ（腕や脚…上手くいけたら首の関節ね）

右手をダガーモード、左手をマシンガンモードにして相手を見据える。

策はある。なら後は実行するだけだ！

ティアナ「…ふっ!!」

その場から一気に駆け出す。相手は右半歩ほど足を後ろに動かし、腰を低くして抜刀の姿勢をとると鎌を後ろにやる。

マシンガンを乱射するがいくら当たろうとも相手は動かない。

そして距離が縮まり…

ティアナ「勝負！！！」

私が相手の間合いに入った瞬間、鎌が一閃を描いた。

? side

俺のビームサイズがターゲットの胴を切り裂いた。
これでいい、やっと終わった…。

ティアナ「はああ！！」

?
〈!〉?

馬鹿な！？何故生きている！？

殺した筈のターゲットが目の前に迫る。振り抜いたビームサイズを再び振ろうとしたが相手の剣に止められた！

ティアナ「もらったああ！！」

相手の銃口が俺の首にぶつけられ、次の瞬間には凄まじい衝撃が俺を襲った！

ガンガンガンガン！……！！

？
／＼？！……！！

ダメージがデカイ……！離れなければ……！！

？
／＼？！……！！

ティアナ「きゃあああ……！！」

強引にサイズを振り抜いて相手を吹き飛ばす！相手は地面を転がって離れた場所に膝をついた。

距離は取れた……だが、遅かったようだ。

？<……ダメージレベル……D……戦闘継続は不可能……>

ティアナ「はあ……！はあ……！！」

立ち上がるターゲット。彼女の戦い方は見事、としか言いようがない。

俺はその場に膝をつき、動けなくなる。

頭は体の全てを司る精密機械だ、そこに繋がる首をやられたのだから、体が動かなくなった。

ティアナ「はあ…アナタを、逮捕します！」

ティアナside

幻術で相手の裏をかき、鎌をダガーで受け止めて懐に入り、マシンガンを乱射。

ティアナ（賭けだったけど…上手くいったわね）

相手は膝をついたまま動かない。いや、動けないが正しいかしら…

？<…見事だった…人間よ…>

喋った！？突然の言葉にクロスミラージュを相手に向ける。

？＜…警戒するな…もはや俺の体は動かない＞

バチバチッ！と火花と電流が彼？の体を走る。

ティアナ「！、手当てをしなく来るな！！＞…！どうして！」

怪我の手当てをしようと近付こうとしたら彼？に止められる。

ティアナ「もしかして…アナタ…人間じゃなくて、ロボット？」

？＜フツ…察しがいいな。そうだ、私は君達の知識で言えばロボットだよ＞

ティアナ「何故、私を襲ったの？」

？＜命令だから、としか言えんな＞

ティアナ「誰の命令…て、聞いても答えないでしょうね」

？＜聡いな…その通りだ＞

だけど、回収すればデータをとることが出来る筈よね。

？<ちなみに、データはとれんぞ>

読まれてる…。AIはインテリジェントデバイス並かそれ以上ね。

ティアナ「…どうしてよ」

？<後3分で俺が自爆するからだ>

ティアナ「なっ!？」

人通りが無いが街中にはかわりない。被害が少なからず出てしまう!

？<…あんた、名前は?>

ティアナ「は!?!なに呑気な事を言ってるの!?!」

？<最後に聞かせてくれてもいいだろう?>

ティアナ「……!!ティアナ…ティアナ・ランスターよ!てか、名前も知らずに襲って来たの!?!」

？<そうだな…なにぶんやれと言われた命令はやるしかないからな…名前など知らなくてもよかった>

ティアナ「なら、なんで今更…」

？<さあ？なんでだろうな…ああ、自爆に関しては心配するな。その池に俺を落とせば被害は少なくて済むだろ？>

ハッ…と私は今いる場所を確認した。戦闘が激しかったせいで周りをよく見ていなかったがいつの間にか私達は近くにあった公園で戦っていたようだ。

ティアナ「あんた…どうして？」

私を殺すつもりなら自爆して私を巻き込めばいいのに…

？<…君は俺に勝った。それだけだ>

ギギ…ギ…と異音をたてながら彼？は立ち上がり、池の柵に寄り掛かる。

？<では…さよならだ>

ティアナ「最後に聞かせて…あんた、名前は？」

今にも落ちそうな体勢で、私は彼の名を聞いた。

？＜俺の名は…デスサイズだ…。縁があればまた戦いたいものだな
…ティアナ・ランスター＞

その言葉を最後にデスサイズは池に落ちた。その10秒後、地鳴りとともに大きな水柱が上がった。

ティアナ「…縁があれば、ね……………クロスミラージュ」

クロスミラージュ＜何ですか、マスター＞

ティアナ「フェイトさんとシャーリーに通信を開いて」

クロスミラージュ＜了解……………繋がりました＞

シャーリー『あれ？ティアナ、こんな時間にどうかした？』

フェイト『…………ティアナ、どうしてバリアジャケット姿なの？』

空間モニターが二つ展開され、私の上司であるフェイトさんと仲間のシャーリーが画面にうつる。

それにしても…さすがフェイトさん、察しがいい。

ティアナ「二人とも、非常事態です」

ここから事件は大きくなっていく。そう…ガンダム襲撃事件は私だ

けに留まらなかったから。

星光 side

エクシアと交戦を開始して30分：

星光「…チツ、コレは厄介ですね」

現在、私は鬱蒼と緑が生い茂る森の中に入り込み、木に背を預けていた。

星光「（追っては来てるみたいですが…見つかったはいませんね）
ふう…」

私は苦戦していた。エクシアの戦い方は近接戦闘が主体、こちらは遠、中距離を主体としている。

そう、私にとってエクシアは相性があまり良くありません。

今だってそうです。私の近接戦闘武器はビームピストル2の刃の部分だけ。

相手の懐に潜り込む、あるいは中距離からの砲撃ならば勝機があるかもしれませんが…

星光「それは無理みたいですしね…」

懷に潜り込もうとすればエクシアの剣の方がリーチが長いので潜り込めず、中距離まで離れようにも相手はつかず離れずの距離で追ってくる。

何度か試みるも全て失敗、今はお互いに距離をとって様子を見ている状態です。

星光（通信が途絶えて30分、部隊の方でも異常事態を察知している筈…）

齒痒くはありますが、このまま持ちこたえて援軍に期待しましょうか。

星光（…守りに徹すれば勝機は無くとも…）

ドゴオオオオオン！！

大きな爆発音と共に私から100メートルくらい離れた場所が燃え上がった！

星光「…クッ！あんなモノまで…！」

空を見上げた私は齒噛みをした。エクシアはGNアームズを装備して空中に浮いていたのです。

星光（このままでは援軍が来る前に私が死にますね）

エクシアは辺り一帯をキャノンで爆撃してまわっている。…此処が焼かれるのも時間の問題ですね。

…やるしかないか
星光

あれだけ大きいなら狙いには困らないですし。私は低空飛行で木々の間を縫うように飛んでその場を離れる。

星光（遠距離からの一撃に賭けるとしましょう）

爆撃しているエクシアから離れ、近くの市街地戦闘訓練場に到着。私はその訓練場の一番高い建物に降り立ち、遠距離砲撃の準備をする。

星光「ルシフェリオン、遠距離砲撃戦、用意」

ルシフェリオン＜了解＞

折り畳み式ビームランチャーがその砲身をスライドさせて更に伸ばす。

脚の装甲が床に杭を打ち込み、私の身体が吹き飛ばないように固定し、各装甲が身体に負荷がかからないように動きを制限する。

ルシフェリオン＜各システムチェック……オールグリーン、GN粒子圧縮を開始＞

キィイン…と金物が鳴るような音が聞こえてくる。

星光「時間との戦いですね…」

私の砲撃が先か、エクシアが私を見つけるのが先か…

ルシフェリオン＜…GN粒子圧縮完了、バイザー展開＞

カシユン、と背中から私の目の前にバイザーがおりてくる。ケルデイムが精密射撃に使っていたのと同じ物です。

ピ…ピ…ピ…ピ…

遠方にあるエクシアに照準が動いて狙いを定める。バイザーにはGNアームズの背部がうつっている。

星光（…あと少し）

照準がエクシアに重なりそうになった時、GNアームズが180度回転してコチラを向きました。

ルシフェリオン＜警告、敵兵器がコチラに気づきました＞

星光「チツ…現状維持、敵を引き付けます」

気づかれた以上、精密な砲撃をしてもかわされる可能性が高い。なら、引き付けるだけ引き付けて近い距離で砲撃を叩き込むべきですね。

バイザー越しにエクシアがコチラに向かってくるのが見えます。照準は重ねたまま、私は機会をうかがう。

ルシフェリオン＜警告、敵兵器に高エネルギー反応を確認。粒子をチャージしている模様＞

星光「（GNキャノンを撃つつもりですね）：現状維持を継続」

ルシフェリオン＜…了解＞

コチラも相手も射程内なのに撃てない。先に撃った方が負けるから…。

私とエクシアの距離だけが縮まっていく。

星光（クツ…近距離に持ち込まれる前に始末しなければ…！）

はやる気持ちを抑え、私は覚悟を決めた。

星光「……発射」

ルシフェリオン＜了解＞

ランチャーから圧縮された粒子が開放され、ビームがエクシアに向かう！

エクシア＜…！＞

だが、やはり機動性が違う。GNアームズは軽々とビームをかわして私に再接近する！

エクシア<…!>

ついに後300メートルの位置にまできたエクシア。しかしキャノンを撃つ気配がない。…接近戦で仕留めるつもりですか。

星光「…詰めが甘いですね」

ルシフェリオン<第二射、発射>

ランチャーから第二射が発射される。さすがにこの距離では避ける事は出来なかったらしく、ビームはGNアームズのキャノンに命中し爆発させた。

エクシア<!?!>

そして制御が出来なくなったのか、そのままの勢いで私の上空を通り過ぎて訓練場の建物にぶつかり、さらに爆発した。

星光「……ふう」

ルシフェリオン<…冷却システム起動、遠距離砲撃戦、解除>

砲身の装甲がスライドしてバシュウ！、と熱を蒸気とともに排出する。砲撃戦が解除された事により私はその場に座り、疲れた身体を少し休める事にした。

星光「さすがに、疲れますね…」

だが、これで終わりのはず…

ルシフェリオン＜警告、敵兵器の反応を確認＞

星光「…まだ終わってませんでしたか」

だったのですが、そうはいきませんでした。

私は立ち上がると煙りが上がる方へ向かい、見下ろしました。

GNアームズの残骸の近くにエクシアが倒れています。…仕留めなければ危険ですね。

そう思い、ビームピストル2を握り近くまで降り、空中に静止してエクシアの頭に狙いをつける。

あとは引き金を引くだけ…その瞬間でした。

エクシアが赤く発光し、私の目の前に現れたのは…。

星光「しまっ!？」

私は咄嗟に防御するもエクシアの剣によりビームピストルが弾き飛ばされ、腹に蹴りを叩き込まれた!

星光「ぐふっ…!」

そのまま地面に落ちた私は立ち上がるうとして、またエクシアに蹴り飛ばされ、地面をごろごろと転がりました。

星光「おえ…ゲホッ…!」

四つん這いになって口の中の血を吐く。これは…まずいですね。手足が震え、力が入らない。私は崩れ落ちるように仰向けに倒れる。

星光「…詰めが甘かったのは私でしたか…」

トランザムを失念していた私の敗北…ですね。

そして、トランザムを解除してコチラに歩いて来たエクシアの剣が私の首筋にあてられる。

星光「ああ…願わくば、もう一度…」

振り上げられた剣が落ちてくる。死の間際だからか…それがとてもゆっくりと見える。

星光（アレルヤに、逢いたかった…）

そして、この気持ちを確認めたかった。私は目を閉じて来るべき痛みに覚悟を決める。

？「お前ええええ！！」

ザグシュ！！

聞き慣れた声と共に、何かが刺さるような音が聞こえ、私は目を開けると…

エクシア＜…ガ！？＞

雷刃「僕の仲間に何してくれてんだよ!!」

雷刃がバスターソードでエクシアをGNドライブごと突き刺しているのが目に入りました。

星光「らい…じん…」

雷刃「ふんにゃあああ!!」

バスターソードを突き刺したまま雷刃がエクシアをバスターソードで投げ飛ばすと、

ドゴォン!!

エクシアが空中で爆散しました。

雷刃「大丈夫!? 星光!」

星光「…ええ…」

雷刃の肩を借りて立ち上がり、彼女によりかかる。

雷刃「なんとか間に合ってよかった〜！」

星光「…はぁ…ありがとうございます、雷刃。助かりました…」

雷刃「いいってことだよ！星光が無事ならね！」

彼女の明るい笑みに私は自然に頬がゆるみます。全く…彼女の明るさには救われますね。

その後、私たち救援に来てくれた部隊に合流。今回の襲撃事件の調査を任せて、私は怪我人なので担架に乗せられ、その上で安心と疲労から眠りにつきました。

ですが…

この襲撃事件は…

これから始まる戦いの…

序章にすぎなかったのです…

第06話 死神と剣士（後書き）

一応、モビルスーツはWikipediaとゲームで調べた資料をもとに書いてますが、間違いがあれば指摘をお願いします。

第07話 弟の非日常 兄の日常（前書き）

ディランディ兄弟の話。

モテる男がうらやましい…と思える話。

第07話 弟の非日常 兄の日常

ライル side

意識が闇に落ちたと思ったら、俺は見知らぬ場所に立っていた。

ライル 「此処は…」

ハルフアス 「…此処は、私の記録がある場所…」

此処がハルフアスの記録か…。何と云うか、殺風景な研究室みたいな場所だな。

ライル 「それで？俺に何を見せてくれるんだ？」

ハルフアス 「…これ」

ハルフアスはとてとて、と歩いて近くにあったパネルに触れると空間にかなりの数のモニターが展開された。

ライル 「うお！？」

ハルファス「…これは、ジェネレーションシステムのデータの一部…」

これだけの数のデータがほんの一部かよ…

ハルファス「…マスターの世界も含めて、地球の平行世界は沢山ある…。その中には、マスターの使っていたサバーニヤとは違うガンダムやモビルスーツも沢山ある…」

ハルファスがモニターの一つをタッチするとそれが拡大される。

ハルファス「…例えば…これは、宇宙世紀と呼ばれる世界の地球で開発されたもので、…RX-78-2…名前はガンダム」

ライル「…0ガンダム？」

ガンダムと呼ばれたソレは俺達の世界にあった0ガンダム実戦配備型とよく似ていた。

ハルファス「…似てるけど、違うよ…？」

ライル「わかってるよ…で、今回の襲撃者の…ザクだったか？あれはなんなんだ？」

ハルファスはガンダムのモニターを閉じると別のモニターを大きくした。

ハルファス「…今回の襲撃者は、これ。…MS-06、ザク2…宇宙世紀の世界でジオン軍が作った量産型モビルスーツ…」

そこに映る姿は俺達が破壊したモビルスーツと同じ物だった。

ライル「別世界のモビルスーツね…なら俺が分かる筈もないか。ならジェネレーションシステムのコード、てのは何だ？」

ハルファス「…ジェネレーションシステムが作り出したモビルスーツに全てにあるモノ。…例えると製造番号みたいなモノ…」

なるほどね、だいたいわかった。しかし…奴らは何故、人間を抹消すると言いだしたかがわからないな。

ライル「なあ、ハルファス。ジェネレーションシステムはどうして人間を抹消すると言ってるんだ？」

ハルファス「…私も、よくは知らない。けど、お姉ちゃんは、ジェネレーションシステムは世界を平和に作る為には人間が邪魔だから、人間を殺してるんだ、て言ってた…」

ある意味では正論だな。人間がいるから争いが起きて、人間がいるから環境が破壊されて、人間がいるから地球がボロボロになっちゃう。だが…

ライル「その人間も、その世界の星に住む命だ。その命は尊いものだろうし、ソレを奪う権利は誰にも無い筈だ」

まあ、ソレスタルビーイングで戦ってきた俺が言えた事じゃ無いんだがな。

ハルファス「……そうだね、マスター…」

ハルファスが少しだけ微笑むと、目の前が真っ白になり、次の瞬間には元のアルガさんの家の部屋に戻っていた。

ハルファス「…マスター」

ライル「なんだ？ハルファス」

いつの間にか、ハルファスは俺の膝の上に座っていた。

ハルファス「…マスターはいい人、だね…」

ライル「そうか？」

ハルファス「…うん、いい人………」

ライル「…？ハルファス？」

ハルファス「……ZZZ…」

俺に背を預けているハルファスの顔を見ると、彼女は見事に寝ていた。

ライル「やれやれ…お疲れさん、ハルファス」

彼女を起こさないように慎重に体を動かしてハルファスを抱き抱え、ベッドに寝かせる。

眠る彼女は見た目相応の子供のようにスヤスヤと眠っている。

ハルファス「…ZZZ」

ライル「ふう…少し夜風にでもあたるか」

部屋の明かりを消して、俺は静かに部屋を出た。

ニール Side

ニール「はあ…」

ドゥーエ「あら、ため息なんて珍しいわね」

ニール「つきたくなくても出ちまうさ。コレを見たらな」

俺は自分の執務室で椅子に座って書類を読む。

馬鹿みたいにある報告書や事件のデータ、どれも重要な案件だから俺の所に集まる訳だが…

ニール「尋常じゃねえぞ、この数は…」

とてもじゃないが一週間徹夜しても終わらんぞ、これ。

ウーノ「だから私が呼ばれたのね」

ドゥーエ「ごめんなさい、姉さん」

ウーノ「いいわよ、別に。貴女が頼むくらいですし、しばらく休みも無しに働いていたんでしょう？」

ドゥーエ「まあね……」

ニール「すまない……今度何かお礼をさせてくれ」

ウーノ「貸し1ですよ、ニール」

ウーノの目がギラリと光る。……とんでもない事を要求されそうだ。

ちなみに……なんで俺の執務室でウーノとドゥーエが仕事をしているかと言うと、二人とも本来なら刑務所行きが確定だったのだがゆりかご事件で管理局に協力し、局員の危機に際し局員を守ってくれた事である程度罪が軽くなり、さらに裁判は不正や差別などをしていた裁判官などを一掃した、まさに公平な裁判が行われた。

その結果、下された判決は更正プログラムを受け、その後は管理局に従事し、罪を償えというものだった。

しかも管理局の現在のトップはカイゼルだ。カイゼルは彼女達姉妹に望む場所で働けるように手配した。

その結果、二人が望んだのが俺の下で働く事だった。

ドゥーエは俺の秘書みたいな感じで、ウーノは別のチームを任せている。

ニール（しかし、二人が来てくれて助かった……）

カイゼルがトップになったもんだからその下で働いてた俺もカイゼルの補佐をするために階級が上がり、仕事も増えた。

：一人でやっていた頃はほんと、過労死するかと思ったもんだ。

ニール「二人とも、コレが終わったら昼食を食べに行くか」

ドゥーエ「いいわね」

ウーノ「いいですよ」

さーて、頑張るか。と気合いを入れたところで秘匿回線から通信が入る。

ニール「…俺だ」

カイゼル『私だ』

回線を開くとカイゼルから音声のみの通信が繋がる。

ニール「どうしたんだ、隊長どの？」

カイゼル『直に会って話しがしたい。時間を作ってくれ』

ニール「…今からウーノとドゥーエを連れて昼食に行くんだが、一

緒にどうだ？」

カイゼル『彼女達もいたのか。調度よかった、一緒に行かせてもらう』

ニール「オーライ、了解だ。メールで場所を送っておく」

カイゼル『頼む』

プツン！、と通信が切れる。：やれやれ、厄介ごとかね？

ニール「：楽しい食事とはいかないもんかね？」

ドゥーエ「私は貴方がいれば何処でもいいわ」

ウーノ「私も同じです」

んゝ…ほんと、よくできた女性達だ。

ニール「それじゃ、行くとしますか」

メールを送り、空間モニターを全て消して席を立ち上がり、上着を羽織る。

ドゥーエ「ちょっと待って。ほら、ネクタイが曲がってる」

ニール「マジか、悪いな」

部屋を出る時にはドゥーエが必ず俺の身なりをチェックする。

ウーノ「…そうですね、それでお願いします。…はい、失礼します。
ニール、お店の予約は出来ましたよ」

その間にウーノが店の予約を終了していた。

ニール「サンキュー、ウーノ」

ドゥーエ「…うん、コレでよし。それじゃ行きましょ」

ウーノ「ええ」

部屋を出て三人並んで誰もいない廊下を歩く。

俺を中心に右にドゥーエ、左にウーノだ。

ニール「…いやいや、いくら人がいないからといって腕を組むのは
どうかと思うぞ、俺は」

ドゥーエ「ふふ…大の大人が何言ってるのやら」

ウーノ「たまにはいいじゃないですか、こういうのも」

両腕に美女二人か…。いや、確かに腕に当たる柔らかな感触は気持ちいいが…

ニール（つて！それじゃただのエロ親父じゃねえか！）

俺もいい歳だ。幸いにも女性のエスコートに関しては自信がある。ここは紳士に行くとしよう。

ニール「オーライ、俺の負けだ。エスコートさせていただきますよ、お嬢さん方」

ドゥーエ「よろしく、ジェントルマン♪」

ウーノ「お願いします、ミスター・ディランディ」

さらに腕に力が入れられ、女性特有の柔らかさが感じられる。俺はなるべく平静を保ちながら目的地に向けて歩く事にした。

カイゼルSide

カイゼル「ここか…」

ニールからのメール通り、クラナガンでも人通りが少ないこの場所に
来た私は一軒のこじんまりとした喫茶店の前に立つ。

カイゼル「喫茶・サムライか…店主、いいセンスだ」

店の名前が気に入ったところで店に入る。

カランカラン…

「いらっしゃいませ、カイゼル部隊長。いや、今はデュナス閣下と
呼びました方がよろしいですか？」

ドアをくぐり抜けた私にかけられた店のマスターとおぼしき人物の
声に私は驚いた。

カイゼル「貴方は…ゼン殿ではないか！」

ゼン「お久しぶりです」

ゼン・アクト：かつて私の部隊にいた近接戦闘主体の魔導師で、彼に刀剣を使わせたなら右にでる者はいないとまで言われた人物だった。だがある戦闘で負傷、それを期に管理局を退職、私達の部隊を離れ行方知れずとなっていた。

ちなみに、私自身も彼に刀の扱いを習った。

歳は40後半だが詳しくは彼が教えてくれないので知らない。

カイゼル「随分と久しぶりだ：元気だったか？」

ゼン「ええ。今はのんびりとこの喫茶店のマスターをやっています。立ち話もなんですし、どうぞ、奥でディランディ副隊長がお待ちですよ」

彼に案内されて店の奥に入ると簡単な個室があり、そこに入る。

ニール「お、やっと来たか」

ドゥーエ「待ちくたびれたわよ」

ウーノ「お久しぶりです、カイゼル」

中ではニールを挟む形でウーノとドゥーエが座っており、コーヒーを飲んでいた。

カイゼル「待たせてすまなかった。会議が長引いてな…」

私も席に着く。

ニール「そんなの今に始まった事じゃないだろ。…で？何の用件なんだ？しかも直に話したいなんて…」

カイゼル「……まずは君達に見てもらいたいモノがある。…これだ」

私はスーツの内ポケットから二枚の写真を取り出し三人に見せる。

ウーノ「…これ、エクシアですね」

ニール「コッチは…よく分かんねえがガンダムタイプだな」

ドゥーエ「それで？この写真はなんなの？」

私に視線が集まる。

カイゼル「……わからない。ただわかっているのはこの二機が帰宅途中のティアナ・ランスター、新型デバイス試験中の星光の殲滅者を襲撃してきた…ということだ」

ニール「…状況は？」

私は一連の事件の状況、結末を話す。ニール達は黙ってそれを聞く。

カイゼル「……以上だ。質問はあるか？」

ドゥーエ「質問も何も…話を聞く限りじゃコッチは襲撃してきた奴らの事が何もわからない状況じゃない」

ウーノ「もっと情報を集めないと考えがまとまりませんね」

ウーノは難しい顔をし、ドゥーエは呆れた顔をした。ニールは口元に手をあて、何か考え込んでいる。

カイゼル「……ニール、お前の意見は？」

ニール「ん？そうだな…」

口元から手を離れたニールは写真の片方、エクシアの写真に指をあてる。

ニール「こっちの鎌を持ったガンダムはお手上げた。だがこっちのエクシア、写真では解りづらいが…このエクシア、トランザムを使

ったんだよな？」

カイゼル「そうだ」

ニール「ならGNドライブが動力な訳だ…こいつの戦闘記録の動画はあるか？」

カイゼル「一応あるが…画質が酷い場所が多くてまともには見れない」

ニール「…そうか。カイゼル、俺は憶測でモノを言うのはあまり好きじゃないからハッキリは言えないんだが…」

カイゼル「いや、何でも言ってくれ。どんな可能性でも今は調べる価値がある」

ニール「………わかった。なら言うぞ……このエクシアは…」

此処にいる全員が緊張した面持ちでニール顔を見る。

ニール「このエクシアは……オリジナル太陽炉を使用している可能性がある」

カイゼル「…なんだと？」

ウーノ「どうしてですか？」

私達が疑問を投げかけるとニールは椅子に背を預け、腕を組み、天井を見上げる。

ニール「カイゼルの話だとエクシアはトランザムを使った。現在、確認がとれるトランザム使用可能なGNドライヴの種類は4つだ」

ドゥーエ「えっと…リースのもつオリジナル太陽炉、管理局が改造した太陽炉ー2、そしてリボンズののみが使っていた擬似太陽炉ー改…後は？」

ウーノ「管理局が改造した擬似太陽炉ー改ですね。ゆりかご戦ではキュリオスとエクシアが使っていました」

ニール「正解だ。この四つのうち、三つは人がいないと動かない」

オリジナル太陽炉、リボンズの擬似太陽炉ー改、太陽炉ー2、この三つは人間がトランザムを起動させない事には自ら起動する事はない。

ウーノ「管理局から技術が漏れたのでは？」

ニール「その可能性も考えた。だが…この写真がソレを否定させる」

ニールがエクシアの写真をトントン、と叩く。そこを見るとぼやけた感じになっているが何か写っている。

ドゥーエ「んゝ…何か写っているけど…ピンク色の何かが…なにこれ？」

ニール「エクシアの動きからみてビームサーベルだと思う」

ウーノ「…ああ、そういうことですか」

ウーノは何か納得したようだ。ピンク色のビームサーベル…。

カイゼル「そうか！擬似太陽炉ならビームサーベルの色が赤色か！」

ニール「そうだ。だがこの写真はピンク色、コレを考えると技術が漏れているうんぬんの前の話だ。襲撃にあった星光は何か言っていなかったのか？」

カイゼル「話しを聞く前に回復の為になのはの中で深い眠りに入っていたからな…この写真も新型デバイスに残っていたモノを現像しただけだ」

ニール「なるべく早く本人から話を聞いた方がいい。事態が悪くならないうちに」

話しが終わり、私達はゼン殿に礼を言って店をあとにする。

カイゼル「それでは、失礼する」

ニール「またな」

ゼン「またのお越しを」

店の外は既に暗く、普段は見えない星も今はよく見える。

カイゼル「いい夜だ」

ニール「そうだな、こんな夜は…」

ビシュン！

？＜…ギギ…！＞

ニール「ゆっくりさせてほしいもんだ」

ガシャン！、と何かが闇の中に落ちる。ニールのビームピストルが見事になにかに当たったようだ。

ニール「…なんだ、これ？」

私は刀を、ニールはビームピストルを構えながら落ちたモノを確認

する。

パツと見た感じは黒いボールだが中心に丸い水晶、そして左右に二本のアームがついていた。

カイゼル「…誰かは解らないが、どうやら私達を探っているようだな」

落ちた時に割れたのか、割れた水晶の隙間からカメラのレンズが見える。

カイゼル（…何が始まる。この世界で…）

空を見上げる。先ほどまで光り輝いていた星は、今は見えなくなっていた。

ハルファスSide

真夜中…私は目が覚めた。

ハルフアス「……………んにゅ…」

少しだけ、ぼんやりする頭を軽く振る。

ハルフアス「…………マスター？」

月明かりが照らす部屋の中に、マスターはいなかった。

ハルフアス「…よいしょ…」

ベッドから下りて部屋を出る。そのまま外へ出ると少し先にある芝生の上で座っているマスターの背中が見えた。
私はマスターに近づいて背中から抱き着いた。

ライル「…どうした、怖い夢でも見たか？」

ハルフアス「…違う…マスター、いなかったから………」

ライル「ふ…悪かった」

マスターは空を見上げていたから、私も見上げる。

ハルフアス「…綺麗」

ライル「ああ…そうだな」

…何か、懐かしい感じがする。私は…いや、ワタシは…こんなふう
に…ダレカと…星を眺めた…？

古ぼけた映像みたいに、記憶が横切る。

望遠鏡で星を見る私、その横で笑ってるお姉ちゃん…と白衣を着た
…誰だ？

ハルファス（…眠い…）

けれど、私は眠たくて、懐かしさを感じながら、マスターに抱き着
いたまま寝てしまった。

第07話 弟の非日常 兄の日常（後書き）

最後に出てきたのは宇宙世紀では有名なボールです。
この小説ではもっぱらやられ役ですけどね！

第08話 落とされた世界は…（前書き）

次はアレルヤ、フェニックスSideです。

彼等は意外な世界に落ちています。

第08話 落とされた世界は…

フェニックスSide

フェニックス「…うう…いたい…」

ズキズキと痛む背中。その痛みで目が覚めた私は俯せの状態からその場に座り直す。

フェニックス「…ここは…」

洞窟だろうか。いや、横穴といったほうがいいか。出入口からは外の風景が見える。

フェニックス「私は…どうして…」

確か…攻撃を受けて、その後は…

フェニックス「!、マスター!? 何処ですか、マスター!?」

なんて事だ！マスターを残して気を失うとは…！

フェニックス「うぐ…！…傷の手当がされている…？」

マスターがやってくれたのか…。情けないな、自分から協力を申し出てこのザマとは…。

ガサガサ！

フェニックス「！？な、なに…？」

外の茂みから何かが動く音と気配に私は驚く。

アレルヤ？「ん？なんだ、起きてたのか」

茂みから出て来たのは手に魚を持ったマスターだった。

フェニックス「マスター、ご無事…ううつ！」

アレルヤ？「ああ、寝ていていい。しばらくは休め」

マスターは痛む体で立とうとした私を止め、洞窟に入ってきて火を起こし、手に持っていた魚を串刺しにして焼きはじめた。

アレルヤ? 「どうだ、怪我の調子は?」

フェニックス「あ、はい。まだ痛みますけど…行動には差し支え無いと思います」

アレルヤ? 「そうか…お、これは頃合いか。ほら、食べるといい」

マスターから焼き魚を渡された私は少し戸惑ったが食べる事にした。

フェニックス「!、おいしい…」

アレルヤ? 「そうか。よし、私も食べるとするか」

マスターも別の焼き魚を手にとって食べはじめた。

…ん? 何か違和感があったような…

アレルヤ? 「…ん? 私の顔に何かついてるのか?」

フェニックス「いえ! なんでもありません!」

アレルヤ? 「?、ならいいが…」

…違和感がわかった。マスターが自分の事を“僕”じゃなくて“私”、と呼んでいる。

フェニックス（しかし…マスターの身体には間違いない。先ほど手を触った時にバイオメトリクスを確認したが問題無かった…）

いったいどうなってるのか…マスター・ハレルヤと同じように多重人格の一人か？

アレルヤ？「さて…食事もすんだ。私の事を話そうか」

壁ぎわに背を預け、彼が私を見る。その目は赤く濁った瞳をしていた。

レントSide

フェニックス「な…!？」

彼女の顔が驚愕にそまる。やれやれ…それだからバレるのだよ。

レント「…君はもう少しポーカーフェイスを学んだ方がいい。先程からずっと私を疑いの目で見ていたぞ？」

フェニックス「うう…そんなに顔に出てますか？」

レント「ああ、わかりやすい程にな」

顔を赤くして恥ずかしがるフェニックス。見た目相応の女の子の仕草だ。

レント「くくく…まあ、アレルヤの過去は多少は知っているみたいだが、私の事は知らなかったのか？」

フェニックス「…私が調べたのはマスターの過去とマスターが世界と時間を越えたことぐらいです」

レント「何故、アレルヤが過去へ飛んだ事を知っている？」

フェニックス「それは私達が使うゲート…シグナル・ゲートと同じ反応が感知された時に、そこにいたのがマスターだったからです」

なるほどな…

レント「ちなみに…君は何時の何処から来た？」

フェニックス「そ、それは…その…すみません。今は…」

…話したくないのか、話せないのか…

レント「…ふう…まあ、今は聞かないでおこう。それより、現状の確認がしたい。此処が何処かわからないか？」

フェニックス「はい。此処は…オーブ？何故？」

フェニックスも困惑している。…オーブ？なんだそれは？

レント「…！、フェニックス、此処を出るぞ」

フェニックス「どうしたんですか？」

彼女の手を握り外に出て、辺りを見回し気配を探る。……空気が張り詰めて肌がチリチリとする。

レント「……戦争か」

フェニックス「え…きゃ!？」

彼女をお姫様抱っこで抱きかかえて走る。並ぶ木々の隙間からは幾つもの煙が昇る街が見えた。

レント「モビルスーツだと？」

街のあちこちにモビルスーツが見える。

アレルヤの記憶には無い機体だ。

…そもそも、私はモビルスーツに詳しくない。

レント「フェニックス、あれは…あのモビルスーツはなんだ？」

フェニックス「は、はい！あれはM1アストレイです！」

アストレイ？…やはりアレルヤの記憶には無いか。

レント「巻き込まれるのはゴメンだ。逃げる「ああ！？マユの携帯が！」…人か」

私は足を止める。見ると少し先に家族だろうか、四人の人間が見える。

その中の一人、少年が道を外れて林の中に入っていた。残った三人は前に走るが、女の子がコケた。

その時だ、背中にゾクリと寒気が走った。

レント「……！チィ！？間に合え！！」

私の足元から闇が女の子に向かって駆ける！

ドガアアアアン！！

すると私達が行こうとした先が爆発を起こす。……くっ！？戦闘の流れ弾か！

フェニックス「けほっ！けほっ！」

レント「間に合ったか……？」

辺りが煙りで覆われる中、私は先ほどの女の子の所へ走る。防御はギリギリだった、果たして助かったかどうか……

レント「……やはり、二人は間に合わなかったか……」

クレーターに近づくと、手足がありえない方向に曲がった死体と、岩に叩き付けられた死体が見えた。おそらく女の子の両親だろう。クレーターの手前にある私が展開したドーム状の結界に近づく。

レント「無事でいてくれ…」

フェニックスをおろして結界を解くと、そこには…

？「んん…」

多少の擦り傷を負ってはいたが気絶した女の子がいた。よかった、護れたか。

レント「先ほどの男の子は…」

フェニックス「姿が見えません。先ほどの爆発で飛ばされた可能性が高いです」

レント「…そうか」

さて、どうするべきか…

アレルヤ（僕は連れていくべきだと思う）

ハレルヤ（ほってけよ、こんなガキ。居るだけ邪魔だ）

レント（しかし…）

フェニックス「マスター・レント、私はこの子をあの男の子の所へ連れていく事を提案します」

レント「理由を聞かせてくれないか？」

フェニックス「……私的な事ですが、この女の子とあの男の子は兄妹だと思います。ですから…」

そうか、フェニックスも妹がいるから感情移入している訳か。

レント「わかった。なら走るぞ、フェニックス」

フェニックス「！、はい！マスター！」

私が女の子をおんぶし、フェニックスが後ろからついて来る。

レント「飛ぶぞ、フェニックス」

フェニックス「了解！」

1、2、3、と大きく走り、4でしゃがみ込み、5で私とフェニックスは空へと舞い上がる。

レント「…よく見える」

空から見下ろすと海が見え、港に船を確認する。

フェニックス「マスター、発見しました！船の近くに先ほどの男子がいます！」

レント「了解。着地する」

慣性と重力に任せて落下する。

タ、タン！！

浮遊魔法を使い、落下の衝撃を無くして着地する。

？「え…？」

男の子が私を見上げる。まあ、驚くだろうな。何の装備も無しに人間が落ちてきたら。

？「あ、アンタは…」

レント「少年、この子を返すぞ」

？「マユ！！」

おんぶしていた女の子を少年に預ける。
少年は泣きながら女の子を抱きしめた。

レント「すまない、両親は助けられなかった」

？「うう…」

フェニックス「マスター、誰か来ます」

あまり人には見付かりたくはないし、早々に離脱するか。

アレルヤ「君、その子の手を離さないようにね。もし一度でも離してしまったら、もう二度と握れなくなるかもしれないから」

レント「その子を護る為に強くなれ。親御さん亡き今、その子はお前が護らないといけないのだから」

少年は私を見る。涙を流したその顔には、決意が宿っていた。

ハレルヤ「ガキのくせにいい顔をしやがる。その調子なら大丈夫だろ」

フェニックス「ほら涙を拭いて。君はお兄さんだから妹を護らなきゃ」

？「あ、ありがとう…／＼」

フェニックスが少年の涙を拭くと少年恥ずかしそうに頬を赤く染めていた。

レント「行くぞ」

フェニックス「はい、マスター」

？「あ、あの！」

去ろうとする私達に少年が待ったをかける。

レント「何かな？」

？「マユを…妹を助けてくれてありがとう！」

レント「…じゃあな」

転移魔法を展開し、私はその場を去った。

アレルヤSide

アレルヤ「……………」

夜が支配する街を見下ろせる小高い丘に、僕は立っている。

フェニックス「…マスター」

アレルヤ「ん…どうかしたかい？フェニックス」

近くで休んでいたフェニックスがその体を起こす。ダメージが完全には抜けていないのか、少し苦しそうだ。

フェニックス「実はマスターにお話ししなければならぬ事があります」

す」

僕はフェニックスの方を向く。彼女は少し顔色が悪かった。

アレルヤ「聞こうか」

フェニックス「はい…実は、私が再び世界を越える為には時期を待たなければならぬのだ」

アレルヤ「そうなのかい？」

フェニックス「はい。あと、私がわかるのはその世界のモビルスーツや兵器なら解るのだがその世界の常識は解らない。だから…」

アレルヤ「何かあった際にいろいろ困るんだね」

コクリ、と頷くフェニックス。まあ、仕方ないかな。

アレルヤ「ま、しょうがないよ。急ぐ用事はあるけれど、今はどうしようもないんだから」

フェニックスの隣に座り、胸の内ポケットからアリオスを出して眺める。

リースやハルートは元気かな？

フェニックス「……すまない、マスター」

突然、フェニックスが謝ってきた。…なぜ？

アレルヤ「どうして謝るんだい？」

フェニックス「私から手伝ってほしいと言っておきながら、早々に迷惑をかけてしまった…情けない限りだ…」

彼女は膝を抱えて顔をうめる。…何だか、懐かしいな。昔のハル―トもこんな感じだった。

アレルヤ「…大丈夫だよ。誰だって情けない時があるさ。僕だってよくハレルヤに言われてたからね」

フェニックスの背中をさする。彼女は顔を上げ、僕を見つめる。

フェニックス「マスター…」

アレルヤ「今は眠って、明日に備えよう。明日は明日でやることもあるから…ね？」

フェニックス「…はい、マスター」

フェニックスは僕の肩に頭をのせると、再び眠りについた。

アレルヤ「…さて、これからどうしようかな？」

その夜、僕はこれからの事を考えながら、フェニックスの頭を優しく撫で続けた。

第08話 落とされた世界は…（後書き）

はい、SEEDDestinyの世界でした。ただし深くは関わりません。

今のところはですがね？

X01X リジェネの決意（前書き）

番外編で有りながら本編にいつか絡ませようと思うリジェネ・レジエッタのお話……

X01X リジェネの決意

リジェネSide

リジェネ「やっぱいよね…この事態は」

外宇宙航行艦ソレスタルビーイングの秘密格納庫で僕は椅子に座りながら頭を抱えた。

リジェネ「なんで調査に行った二人が二人とも消えちゃったんだよ…」

ロックオンのサバーニヤ、アレルヤのジnkス4の反応が消えて早くも一週間が経っている。
ヴェーダを使っているにも関わらず、彼等を発見出来ない。

リジェネ「もしこれがティエリアにばれたら…」

仲間思いのティエリアの事だ。絶対に殺される…!

リジェネ「どうしたらいいんだよ〜!？」

頭を掻きむしる。駄目だ〜! 何も良い策が思いつかない! 解決策なんてあるのか!？

リジェネ「……あ、そういえば……」

フと思い出した。今日は秘密裏に木星で作った新しい太陽炉が届く日だったわけ。
今回の太陽炉もクアンタと同様にツインドライブの同調を目的に作り上げたからダブルオークアンタと同じ性能を使えるはずだ。

リジェネ（トランザムバースト…粒子テレポート…）

ん? まてよ…確か…30年くらい前にもアレルや達は一度、しかもリボンズとの決戦の後に失踪してたような…?
僕は近くにあった端末を開き、データを表示、検索する。

リジェネ「コレじゃない…コレも違う……あった! コレだ!」

当時の報告データを表示する。アレルや本人の報告データだ。

リジェネ「……………」

一心不乱にソレを読む。アレルヤがどんな事に巻き込まれたり、どんな状況になったり、とにかく全ての情報を収集する。

リジェネ「：ヴェーダ、新たな検索を開始。デバイス、アリオス、アレルヤ、太陽炉、トランザムバースト……過去。検索を開始」

全てを読み終えた僕はヴェーダに新たな指示を出す。答えをすぐに弾き出された。表示されたのはアレルヤが20年前からあるモノを作っていて、ソレがつい最近になって完成したと。

リジェネ「コレは…」

アレルヤは製造過程や集めた資料をヴェーダに残していたので僕は画面に表示したモノを見つめる。もし、コレが本当に起動できるなら……でもコレって、けっこうヤバイ賭けだよね。

リジェネ「でも、やるしかないよね。僕が彼等に頼んだから彼等が消えたんだし…」

ティエリアに殺されたくないし。完成したモノは秘密基地か…アレルヤには悪いけど使わせてもらおうよ。

リジェネ「んゝ。今回は小型艇で行こう」

ジックスでもいいけど、あまり無駄遣いしたくないし。またまたテイエリアのパイロットスーツを借りて秘密基地に向かう。

リジェネ「…しかし、20年前かあ…」

アレルヤは、まだ引きずっているのかな…彼女の事を。

リジェネ「…僕には、人間はよくわからないよ、テイエリア」

僕は向かう。彼等が消えた…いや、向かった世界へ行くために。

リジェネ「………これか」

アレルヤが作っていたモノ、この世界には本来ないモノ…。

リジェネ「デバイス…」

金庫は嚴重なロックがかかってたけど、こんなの僕の前には無意味だよ。

僕の手の中には金色の三角形とその中心には赤いビー玉みたいなのがはまっているデバイスがある。
さて、ここで問題です。

リジェネ「……………どうやって使うのさ、コレ？」

そう、僕はデバイスの使い方なんて知らないんだよ！どうすんのさ！？

リジェネ「全然ダメじゃん！ちくしょうめ！！」

？<うるさいですよ、あんた>

リジェネ「うお！？誰だ！？」

僕の独り言に誰かが答える。この部屋には誰もいないのに！？

？<此処ですよ、ココ、あんたの手の中>

リジエネ「手の中?…お前か?」

?<そうだよ、泥棒>

リジエネ「な!?!僕は泥棒じゃない!」

?<人様が作ったモノを金庫から持ち出したあんたはどこをどう見ても泥棒でしょうが>

リジエネ「うぐう!痛いところを…!」

反論出来ない…くそ!嫌な奴だな、こいつ!

?<ま、今はあんたが泥棒かどうかはどうでもいいです>

リジエネ「だから…<俺を作った奴は何処にいったんです?>!…
そ、それは…」

?<はあ…やっぱりですか。俺を作った奴に何かあったか、俺を作った奴があんたに俺の事を話したか…ま、どれにせよ、あんたは俺に用があるんでしょう?>

リジエネ「…機械の癖によく分かっているじゃないか」

?<機械の癖には余計です。まあ長話もなんだし、サッさと俺をセツトアップして下さい>

リジェネ「セットアップ？」

？＜そっからですか。しゃあないですね…面倒臭えくですけど、教えてあげますよ＞

そこから僕はデバイスの機能や魔法を教わる。本当に魔法がある事には驚きを隠せなかった。

…1時間後…

リジェネ「よし！理解出来た！」

？＜ホントですか…？ま、いいでしょう。ならさっさと俺の名前を呼んでセットアップしてみてください＞

リジェネ「言われなくてもやるさ。…あ、そう言えば」

？＜何です、何か問題でも？＞

リジェネ「お前の名前、聞いてないんだけど？」

？＜あ…忘れてた＞

リジェネ「おいおい…」

？＜ま、いいじゃねえですか。そうじゃ、改めて名乗るとしましうか。俺の名前は…＞

ここから、リジエネとデバイスの物語が始まる。彼等の物語は、どんな物語になるのやら…

？<…あれ？俺の名前、なんだっけ？>

リジエネ「僕が知るかよ!!！」

………本当に始まるのだろうか？

X01X リジェネの決意（後書き）

リジェネは本来なら本編には最初の時しか出ない予定でしたが感想の中に、リジェネをちょいキャラにするのは勿体ないと書いて下さった方がいたので急遽、参戦しました。

皆様、どうか生暖かい目で見守って下さい。

第09話 敵地へ向かう（前書き）

ハルファスSideです。

第09話 敵地へ向かう

ライル Side

アルガさんの家で一泊したあと、アルガさんの家の倉庫で俺とハルフアスは撃破したザク2の残骸を調べていた。だが：

ライル「ハルフアス、何か分かったか？」

ハルフアス「……」

かれこれ10分は経つがハルフアスはザクに触れたまま動こうとしないし、話し掛けても口も開かない。

ライル「ふう…やれやれ…」

ハロくフラレタ！フラレタ！>

ライル「フラれてねえよ！」

ハロが俺の隣でピョンピョン跳ねる。

このハロはサバーニヤに置いて来たと思っていたのだがハルフアス

が粒子変換して持って来ていたのだ。ちなみにサバーニヤ本体は無理だったがサバーニヤに積載していたオリジナル太陽炉は粒子変換して持ってきているとの事。子供みたいなハルファスだが意外と抜目ないところがあることに少し驚いた。

ちなみに俺と兄さんの相棒のオレンジハロが俺の隣にいて、青ハロはハルファスのサポートをしていた。

ライル「しかし…サバーニヤか…」

ケルデイルやサバーニヤは俺や兄さん向けに作られた機体だったからな…ハルファスのデバイスモードもなかなかのモノだが、やはりサバーニヤのライフルビットやホルスタービット、ピストルビットが欲しいと思っちゃおう。

ライル「兄さん達と合流したらサバーニヤのデバイスでも作るか」

ハルファス「…私じゃ、不満…？」

いつのまにか、ハルファスが俺の方を向いていた。その表情は悲しげだ。

ライル「いや！そうじゃなくてだな？」

ハロくウワキ？ウワキ！>

ライル「違う！」

ハルフアス「…ウワキ…？」

ライル「いや！だから違うって！」

ハロくチガウクナイ！チガウクナイ！>

ライル「黙ってろ！」

ハルフアス「…ごめんなさい…」

ライル「いや、ハルフアスに言ったんじゃないかな？」

ハロ×2<<ナカセタ！ナカシタ！>>

ライル「お前ら、黙ってろ！」

ハルフアス「…ぐす…」

ライル「やっべえ！？ハルフアス、泣くな。お前に対して言っ
てないから！な！？」

こうして、ハルフアスが泣きそうになるのを何とか宥めるのに10
分かった。

ライル「ふうー…疲れた…」

ハルフアス「…大丈夫？」

椅子に座り、うなだれているとハルフアスが俺の頭を撫でてきた。
…素直ない子なんだがな、素直すぎるところもある。

ライル「大丈夫だ。それより、ザクからは何か情報を手に入れる事が出来たか？」

ハルフアス「…うん、少しだけ…」

ハルフアスは青ハロを抱き上げると壁に向けた。すると青ハロの目から壁に映像が映しだされた。

ハルフアス「…コレは、この世界の地図…赤い点が、今いる場所」

マップの中でチカチカと赤い点が明滅する。

ハルフアス「…そして、青い点の場所が敵の基地」

ライル「基地？」

コクリ、と頷くハルフアス。青い点が明滅する場所はマップで見ると現在地から地球の反対側と言ってもいいほどの場所にある。

ライル「そこにジェネレーションシステムがあるのか？」

フルフル、と首を振る。

ハルフアス「…この基地は末端…ジェネレーションシステムはない…」

やっぱ、事はそう簡単にはいかないか。

ライル「んじゃ、さっさとその基地を潰しに行くか」

ハルフアス「……………」

俺の言葉に無反応なハルフアス。調べ物があるならともかく、いつもなら何かしら反応があるはずなんだが…

ライル「ハルフアス？」

ハルフアス「…マスターは、欲しいの？」

……はい？

ライル「欲しいの…て、何の事だ？」

ハルフアス「…サバーニャの武器…」

ライル「作れるのか？」

ハルフアスはフルフル、とまた首を振る。…まずったな…さっきの事をハルフアスが気にしているのかもしれない。

俺はハルフアスの目の前に行き、彼女の目線に合わせて膝をつく。

ライル「まあ…無いものねだつてもしょうがない。それにハルフアスは充分に強いし、俺は今のままで問題ない。だから、あんまり気にするな」

そう言ってハルフアスの頭を優しく撫でる。少し落ち込み気味だった彼女の雰囲気緩和だ。

ハルフアス「…頑張る」

ライル「おう、あてにしてるぜ」

その後、ザクの残骸を片付けてアルガさんに礼を言い、俺達は町を後にした。

ライル「さあて、行くとしますか」

ハルファス「…了解、マスター」

デバイスモードでハルファスになってその場から飛び立つ。向かう先は敵基地…だが俺達は二人で一人の状態だし、大丈夫なのかねえ…

ライル「ハルファス、時空管理局…て、知ってるか？」

軽い気持ちでハルファスに問い掛ける。連絡が出来たらなあ、と思ったからなんだが…

ハルファス<…知ってる>

ライル「そうか。ならその管理局と連絡はとれそうか？」

ハルファス<…出来る、と思う>

ライル「なに！？だったら試してみてくれ！可能だったら管理局に応援を頼みたい」

肩にいるハルフアスはコクリ、と頷くと目を閉じた。これで連絡がとれれば戦況がこちらに有利になるかもしれない。

ハルフアス<……通信、繋がった>

ライル「でかした！」

俺はその場に止まる。俺の右横に空間モニターが現れた。…そういや、誰に繋がったんだ？

？『はい、こちらハルートです。……どちらさまです？』

ライル「は、ハルートか！？」

ハルート『ええ、そうですけど…て言うか、私にアナタみたいなガンダムの知り合いはいないですよ？』

モニターには訝しい目で俺を見つめてくるハルートの姿。…俺は本当に過去に飛べたのか！

ライル「俺だ、ライル・ディランディだ！」

ハルート『……はい？』

ライル「だから、ライル・ディランディだ！アレルヤ・ハプティズムと一緒に未来に帰った、ライルだ！」

ハルト『え…？ほ、本当に…ライルさんなんですか？』

ライル「ああ！」

ハルフアスに頼んで顔の装甲を解除するとハルトは驚きの表情をしていた。それもそうだ…本来なら俺やアレルヤはこの世界には来れないし、来る筈もなかったしな…

ハルト『ライルさん！今どこにいるんですか！？いや、それより皆に知らせなきゃ！いや、先にアニューさんに知らせますか！？ニールさんにも連絡しないと！』

ライル「ちょ…まってまって！落ち着け！先に俺の話を先に聞いてくれ！」

ハルト『あ、し、失礼しました。コホン…それで、ライルさんはどうしてまたこの世界に？』

そして俺は簡単に説明をした。ハルフアスの事、ジェネレーションシステムの事、今から敵基地に向かう事を話した。…俺自身のイノベーター化や別れてから30年経っている事はあえて伏せた。後にも話せる事だからな。

ハルート『だいたい分かりました。すぐにニールさんに連絡をとってみます』

ライル「助かる。なるべく早く頼むぜ？」

ハルート『任せて下さい。……あの、聞いてもいいですか?』

ライル「なんだ？」

ハルート『その、アレルヤは…いないんですか?』

ハルートの期待に満ちた目を見て、心が痛む。アレルヤは…この場にいないのだから。

ライル「…すまん」

ハルート『そう…ですか』

みるからにしょんぼりとしたハルート。

ハルファス<…アレルヤは、お姉ちゃんと一緒にだから心配ないよ>

ライル「なに？」

ハルート『…どういう事ですか?』

ハルフアス<…お姉ちゃんが今は何処にいるかはわからないけど、お姉ちゃんのマスターはアレヤだと思うから…この世界に向かって来てる筈だよ…?>

俺の肩の後ろに隠れながら話すハルフアス。今の状態でも小さいのにさらに小さくなってる。

ハルト『…そっか、教えてくれてありがとう、えっと…ハルフアス』

ハルフアス「…ん／＼」

頬を朱色にするハルフアス。…実に和む風景だ。

ライル「それじゃ至急、兄さんに連絡を頼む。こっちじゃ人的被害も出ているからな」

ハルト『了解です。それでは…』

通信を切り、顔の装甲を展開して再び前進を開始する。

ハルフアス<…マスター、嬉しいの?>

ライル「なにがだ?」

ハルフアス<…マスター、さっきからずっと笑顔だから…>

俺の顔はハルフアスの装甲に覆われているから見えないはずなんだが。

ライル「…不謹慎かもしれないけどな、仲間に会えるのが嬉しいのさ。それに仲間はみんないいヤツばかりだし、ハルフアスも気に入ると思うぞ」

ハルフアス<…マスターとお姉ちゃんがいれば、私は何もいらな…>

ハルフアスは他人と関わるのが怖いのか、少し怯えているみたいだ。

ライル「…大丈夫だ。ハルフアスは俺の娘みたいなもんだ。俺がハルフアスを護ってやる、安心しろ」

ハルフアス<…マスター…>

会って数日の俺達…。だが俺はハルフアスがこの先、俺達と共にずっといてくれる…そう感じていた。直感、てやつだな。

ライル「だからさ、みんなと仲良くなれないか？」

ハルファスく……頑張る………>

ライル「そうか。ありがとう」

今は怖がりなハルファスだが、将来的にはみんなと笑顔でいてくれればいいな……そう思いながら目的地へと向かった。

第09話 敵地へ向かう（後書き）

ハルファスは人気上々です。

よかよかW（。O。）W

第10話 行動開始（前書き）

前半アレルやSide、後半カイゼルSideです。

第10話 行動開始

フェニックスSide

夜が明けて、私とマスターは戦闘が終了した都市へ向かった。都市に残されたデータからこの世界に関する情報を手に入れる為だ。

アレルヤ「そういえば、昨日聞きそびれた事があるんだけどさ」

フェニックス「はい、なんですか？」

破壊された都市の中でも人気がない場所を歩く。この国の軍人に見つかって厄介な事に巻き込まれないようにする為だ。

アレルヤ「昨日、時期が来ないと転移出来ない、と言ってたよね？他に転移する方法はないのかい？」

フェニックス「あるにはあります。ですが…ソレは今使えません」

アレルヤ「…？…どうしてだい？」

フェニックス「その方法には私の妹…ハルファスがいなければなら
ないからです」

アレルヤ「どうということかな？」

フェニックス「私たちが使うシグナル・ゲートはシグナル同士を干渉させて強制的にゲートを開くのです。だから…」

アレルヤ「君の妹がいない今は不可能な訳なんだね」

フェニックス「はい」

瓦礫を踏み分け、私たちは広い場所に出た。破壊されたリフトやクレーンが辺りに転がっているところを見ると工場跡地だろうか。

アレルヤ「さて…時期が来ない以上、僕らはこの世界で暮らさなくちゃいけない訳だけど…」

フェニックス「あ、お金とかなら心配はありません。私が持っているこのカードはどんな世界でも使えますから」

粒子変換していたカードを手に出すとマスターは驚いた顔をした。た。

アレルヤ「凄いね。いろいろと…」

フェニックス「他にもいろいろ機能がありますけど…見ますか？」

アレルヤ「そうだね、あとで見せてもらおうよ」

そう言うマスターは辺りを見回し、瓦礫を退けたりし始めた。

フェニックス「マスター、何を探してるんですか？」

アレルヤ「電子端末：パソコンの本体とかないか探してるんだよ。アリオスを使えば端末から情報収集ができるしね」

フェニックス「その機能でしたら私も使えますよ？」

アリオス「そうなの？それはありがたいな。……ん、コレはよさ気だね」

ガラーン！と瓦礫を退けるマスターが何かを拾い上げた。
アタッシュケースにも見えるけど、側面にはモニターがついていて、チカチカと点滅している。

フェニックス「？、壊れているの？」

アレルヤ「どうだろう？使えるかな？」

マスターからケースを受け取る。重さはそこそこ、揺らしてみるのが中に何か入ってるような気配がない。

私は画面に手のひらをペタリ、とつける。

ピピピ！

フェニックス「…？今の音は…」

不思議に思い、画面から手を離すとそこには…

「おお！運よく見つけてもらえたか！」

と、文面が表示されていた。

フェニックス「起動した？………AIかしら？」

「そうだ。量子演算コンピューターをモルゲンレーテで改造しAIを付け足したモノ、と言えはわかるかな？」

フェニックス「へえ…」

「軽いな、君」

フェニックス「それは失礼。私たち、この世界についてあまり知らないから」

「………知らないとは？」

フェニックス「私たち、異世界からきたから」

「非現実的な言葉だな」

フェニックス「……」

「だが、面白い。興味がある。君達がよければ異世界について聞かせてくれないか？」

フェニックス「なら、アナタはこの世界の事を教えて」

「交換条件というわけか、その条件に従おう」

そして私と、このコンピューター（名前をセブンというらしい）は
お互いの情報を交換しあう事にした。

アレルヤSide

なんだかフェニックスがコンピューターと会話をし始めたので邪魔
をしないように僕は周囲の探索に戻る事にした。

アレルヤ「しかし…何も無いなあ…」

辺りには瓦礫しかなくて、人の気配もない。ただ、不思議に思った事がある。

いま僕が立っているこの場所、何故か破壊されてる具合が市街地に比べて大きい。瓦礫を見た感じでは軍の施設でもなさそうだし…

アレルヤ「むしろコレは…」

爆発の中心が大きなクレーターになってるところから考えると、ここにあった建物が中心から自爆した感じだ。

アレルヤ「……………」

ハレルヤ「なに無駄な事を考えてんだ、相棒」

アレルヤ「ハレルヤ…」

レント「そうだな、現場を検証するより情報を探すべきだ。兄弟」

アレルヤ「……分かってるよ」

……二人の言う通りだ。過ぎた事を考えても仕方ないじゃないか。それよりも、この世界の事を調べないと…

再び周囲の探索を開始しようとした時、僕の目にあるものが見えた。

アレルヤ「これが…僕たちの世界とは異なるモビルスーツか…」

近くのビルに背を預けるように倒れていたモビルスーツに近づき、見上げる。

僕たちの世界のガンダムと同じような頭部…か。

近寄ってわかったけど、このモビルスーツのコックピットのハッチが開いていた。

アレルヤ「もしかしたら動かせるかも…」

モビルスーツの突起を足場に利用してジャンプしながらコックピットにたどり着く。

アレルヤ「…片腕が無いけど、コックピットは無事そうだね」

コックピットの中は得に破損したような場所はない。中に乗り込んでスイッチを押す。

アレルヤ「……ん、読めるね」

表示された英文をみて少し安心する。全く知らない言語だったところ

の世界で暮らしていく自信が無かったからだ。

アレルヤ「この機体の名前は……M1アストレイ……動力は……バッテリーなんだ。メインカメラ損傷、左腕損失、各間接……多少の損傷はあれど使用可能。武装、頭部イーゲルシュテルン使用不可、ビームサーベル使用可」

表示されるデータを確認。バッテリーは半分以上も余っていた。

アレルヤ「周囲に人影は無かったし、動かしてみようか……。アストレイ、起動」

ペダルを踏み込み、グリップをスライドさせると機体がゆっくりと動き出し、立ち上がった。

アレルヤ「片腕分のバランスがとりにくいな……おまけに動きも鈍い」

システムをザッと見たけどこの機体、片腕が無い以前の問題だ。こんなOSじゃまともな戦闘なんて出来やしない。
こんな機体でよく戦えたなあ……

アレルヤ「乗ってはみたけど……こんな状態じゃ、必要ないかな」

アストレイの膝をつかせてコックピットから下りる。

「おゝい！その兄ちゃん！」

アレルヤ「ん？」

降りたところで声をかけられた。声のする方向を見ると、そこには歳が40くらいのおじさんがいる。…ま、中身がそれより年上の僕が言うのも変だけどね。

？「兄ちゃん、オーブの軍人さんかい？」

アレルヤ「…いえ、違いますよ」

？「またまた！今、このモビルスーツを動かしていたじゃないか！あ、もしかしてモルゲンレーテの関係者とか？」

見られてたのか…。この世界の情報が無い状態で迂闊な行動はしない方がいいね。

アレルヤ「いえ…違います」

？「なら民間人か！モビルスーツを動かせるなら、兄ちゃんはコーディネーターなのかい？」

コーディネーター？なんの事だろう？この世界のモビルスーツのパイロットの呼び方かな？

アレルヤ「：そんなところです」

？「そうか！なら、ちつとばかり手伝ってくんねえかな？」

アレルヤ「手伝い：？」

？「おう！俺はジャンク屋ギルドの者でな、あっちの市街地で復興支援をしてんのよ。でも戦闘があつて昨日今日なもんだから人手が全然足りなくてなあ、そんな時にモビルスーツを動かす兄ちゃんを見つけたのさ。それで、よかったら俺達の手伝いをしてくれねえかな？もちろん、報酬は出すぜ。そのモビルスーツもジャンク品を使えば修理できるしな」

アレルヤ「復興支援：」

僕は少し考える。この話は今の僕には魅力的だ。後ろのアストレイが使えるようになるし、報酬も貰える、この世界の情勢を知るにもいい。

：フェニックスにも相談しよう。彼女の行動次第で僕の行動も変わるし。

アレルヤ「事情は分かりました。ただ僕の連れと相談したいんです

が、少し時間をもらっても？」

？「おう、かまわねえぜ！」

よし、なら早速フェニックスにこの事を話そう。

ジャンク屋のおじさんにはアストレイを見てもらい、僕はフェニックスの元へ戻る事にした。

カイゼル Side

カイゼル「ふう……今、戻った」

ニールと別れ、回収した監視装置（ボールと名付けた）をマリエル女史に渡し、自分の執務室に戻る。

セツテ「お疲れ様です。元帥」

黒のスーツを着こなすセツテが私を出迎える。彼女に上着を渡し、私は応接用のソファアに深く腰掛ける。

セツテ「…どうかなされましたか？」

カイゼル「なに…厄介な事態が起きたからな、頭痛がしているだけだ…」

セツテが差し出してきた水を受け取り、一気に飲み干す。

セツテ「体調が優れないなら、今日はもう休まれた方がいいかと」

カイゼル「ああ、そうしよう」

壁にかけてある時計の針は既に0時を過ぎていた。
そこで気付いた。セツテともう一人、私の補佐をしている人がいない事に。

カイゼル「セツテ、ハルートは何処に行った？」

セツテ「ハルートは先に帰りました」

カイゼル「そうか…」

セツテとハルート…彼女達は私の補佐、護衛をしてくれている。
ハルートの事はアレルヤが自身の世界に帰る前日に、彼自身から頼

まれた。

「彼女が幸せに生きていけるようにして上げてくれ」

二度と会えぬ親友の頼みでもあるし、彼女の生まれもあるからな：どうしても後ろ盾と保護が必要だった。ハルートも自分の境遇は分かっている。だからつねに私の傍にるように言っている。

セツテはゆりかご戦の後、治療と更正プログラム、裁判を受けた。そして何故か私のもとに訪れ力になりたいと言ってきた。

始めはスパイか暗殺を疑ったのだが、すぐにソレは覆された。

セツテが私の部下として働き出した頃だ。管理局の膿とも言うべき者達と私たち改革派との大規模な戦闘が起きた。

いつかは起きると予測されていた事だったし、準備もしていた。だが：戦場は生き物のように気まぐれだった事を、その時の私は失念していた。

カイゼル「：左翼後退、右翼前進！」

管理局改革派の指揮官として、私は最前線の少し後ろで指揮をとっていた。あらかじめ準備していたし、私自身も戦闘に参加していたので士気もかなりのモノだった。

順調に行けば一日で制圧可能だった。

…味方に、裏切り者がいなければ…

ドスン、と私の背中に衝撃がきて、腹に激痛が走った。視線を下ろすと、自分の腹から刃が突き出ていた。

「死ね！逆賊め！！」

カイゼル「…ぐはっ！貴様ああ！」

「がはっ！」

後ろにいた敵を、私は刀を逆手に持って突き刺し切り捨てるが、そこで気付いた。私が今いる場所がいつの間にか最前線で、弱った私に敵が群がり始めていたことを。

「今だ！逆賊カイゼルを討ち取れ！！」

「「「「おおおおおおお！！！！」」」」

カイゼル「ぐう！？」

「まずい！全軍、元帥を守れ！！」

「「「「「おおおおおおお！！！！」」」」」

仲間は何人か周りにいるが、敵を包囲殲滅する予定の布陣だったせいで仲間が広く散開していた。なので救援は間に合いそうに無かった。

カイゼル「っごは！」

「元帥!？」

「今だ！覚悟おおお!!！」

吐血で隙が出来た私に、突撃してきた相手の槍が私の目前に迫る。ここまでか…と諦めた時だ。

「させない!!！」

女の声と同時に、私の前に迫っていた槍がなにかに弾かれた。それと同時に私の前に誰かがおりてきた。

「な、誰だ!!？」

「貴様に名乗る名は無い」

槍を弾いたナニか…ソレは細い三日月型のブーメランだったのだが、

ソレが私の前にいる声の主へと戻ってきた。

セツテ「ご無事ですか、元帥」

カイゼル「セツテ：！？何故ここに：？」

セツテ「ご迷惑とも思いましたが、私には戦う事しか出来ません」

セツテはこちらを見ずに自分の武装：ブーメラングレードを相手に向けて構える。

セツテ「だから私は貴方のそばにいる事を望んだのです。貴方が進む道は：争いを回避する為に、戦いをせねばならない道と知ったから」

戦う事しか出来ない：か。しかも、私が歩む茨の道すら理解しての言葉に、私は彼女を信頼した。

カイゼル「：ならば、セツテよ。私と共に、争いのない道の：世界の礎となってくれるか？」

セツテ「無論」

カイゼル「己の幸福を棄てるか？」

セツテ「貴方の背を護る事こそ、私の運命であり幸福」

カイゼル「…よろしい。ならば…我が背中、汝に預けるぞ！セツテ
！！」

セツテ「承知！！」

セツテが敵を相手に奮闘する中、すぐに駆け付けてくれた仲間に治療を受けて私はすぐに戦線に復帰。反乱分子を鎮圧した。

カイゼル「……なあ、セツテ」

セツテ「なんですか？元帥」

セツテは自分のデスクに座ったまま、返事をする。

カイゼル「近い将来だが、おそらく…いや、必ず大きな戦いが起こる」

セツテ「はい」

カイゼル「私の背中を頼むぞ」

セツテ「おおせのままに、元帥」

全く…頼りになる。さて、そろそろ休もうか…。そう思ってソファ
ーから立ち上がった瞬間、

ピリリリリ！！

通信のコールが鳴り響く。しかもこの音は…緊急連絡用の音！

セツテ「緊急通信を受信しました。送信者は…ハルートです」

カイゼル「ハルートが！？繋いでくれ！」

緊急通信にも驚いたがハルートが通信してきたのも驚いた。
アレルヤから彼女を頼まれた者として、焦ってしまう。

ハルート『みんな！緊急連絡、ごめんなさい！』

モニターに映ったハルートの無事な姿を見てとりあえず安堵する。

カイゼル「ほっ…無事だったか…」

ニール『秘匿の次は緊急かよ…何なんだ、今日は』

なのは『ふぁ…一体何事なの？』

フェイト『状況の報告をお願い』

はやて『誰や…？夜中に緊急連絡してきたんは……？』

ヨハン『騒々しいな、何か起きたのか？』

画面には私以外にも通信が通じた相手が映る。メンバーはかつての機動六課隊長クラスと私の直属の部下のニールとヨハンだ。

ハルート『休んでる所をごめんね！けど、本当に一大事なんだよ！』

ハルートにしては随分と興奮しているし、慌てているな。

カイゼル「なら、報告してくれ」

ハルート『う、うん！みんな、よく聞いてね！』

スーハー…と深呼吸するハルート。そして彼女の報告してきた内容は…

ハルート『コチラの世界に、ライル・ディランディを確認！そして未知の勢力が管理世界に進行してきました！』

今から休もうとしていた私の眠気を一気に吹き飛ばす内容だった。

第10話 行動開始（後書き）

前回、感想にてこんなモビルスーツを出して欲しい、誰かこんなモビルスーツが戦って欲しい、と意見をくれた方がいました。

よろしい、ならば採用だ（笑）

なんでもかんでも採用する訳ではないのですが、もしこんなバトルがあれば…こんなモビルスーツが出れば…があれば感想でもなんでもいいので言ってください。

善処します！

第11話　そして合流へ（前書き）

はやてSideとライルSideの話

第11話　そして合流へ

はやてSide

はやて「ふう…おまちど〜さん」

プシュー、と扉が閉まる。ハルトからの緊急連絡を受けて6時間、連絡を受けたメンバーがプトレマイオスアルターに集まった。

どうやらうちが最後だったらしく、なのはちゃん、フェイトちゃん、カイゼル、ニールさん、ヨハンさんは席についていた。

カイゼル「さて…みな、急な招集に応えてくれて感謝する。早速だが状況を説明する」

壁に設置してあるモニターに世界地図が表示され、幾つかの光の点が明滅している。

カイゼル「みなに連絡があった通り…この世界でかつての仲間、ライル・ディランディが私たちに対して救援を要請してきた」

カイゼル「救援の内容については管理局に敵対する勢力がこの地図の管理世界において基地を作り、この管理世界を破壊しようとして

いるらしい」

フェイト「敵対勢力の情報は？」

カイゼル「相手はかつて、我々が対峙したスカリエッティ、リボンズと同様に人間サイズのモビルスーツだと聞いている」

なのは「基地の規模や兵力は？」

カイゼル「現段階では不明だ。全ての管理世界に共通して配置された観測装置も調べたが外敵や災害が起きたなどの情報はきていない」

ニール「ライルとの連絡は？」

カイゼル「コチラから呼び出しをしているが応答無し。アチラに何か不備がある…あるいは通信が出来ない状況の可能性がある」

はやて「コチラの戦力は？」

カイゼル「緊急事態もそうだが、あまりにも情報、状況が理解出来ない状態だ…なので大部隊は動かせない。私の直属部隊と今、ここにいるメンバーのみだ」

質問と応答が一段落し、みんなが黙って考える。

ヨハン「質問をいいか？」

カイゼル「なんだ？」

ヨハン「このあいだ報告にあった管理局員襲撃事件と同一犯の可能性はあるのか？」

カイゼル「……私見だが、可能性は高いと思う」

ヨハン「…わかった。それともう一つ、本局の技術部からコレを預かってきた」

ヨハンさんが机に黒の腕輪と金色の腕輪を置いた。…うちは見たことが無いモノやな。腕輪タイプのデバイスだとはわかるけど。

ヨハン「金色がGN-D-0002、黒色がGN-T-D-0003だ」

はやて「なんですの、ソレ？」

ヨハン「太陽炉掲載型デバイス…その試作二号機と三号機だ」

ニール「俺の方も…修理が終った試作一号機をマリエル女史から預かって来てる」

そう言ってニールさんも机の上に白い腕輪を置く。

星光「つまり、私たちも戦ってくれ…というわけですか」

なのはちゃんの雰囲気ガラリと変わった。星光の殲滅者が表に出てきたからだ。

雷刃「僕は構わないよ。面白そうだしね！」

フェイトちゃんと変わって頭の後ろで手を組んで椅子の背もたれをギシギシといわす雷刃。

王「クッククク…久々の実戦か…腕になる！」

うちと変わって表に出た王は楽しそうに笑う。

カイゼル「決まりだな。君達三人…いや、六人か。君達六人の戦果に期待する」

はやて・なのは・フェイト「「了解」」

星光「引き受けましょう」

雷刃「ホイホイ」

王「フン！」

ニール「俺とヨハンはどうすんだ？戦闘に参加するのか？」

カイゼル「いや…二人は戻って管理局全体に警戒体制レベル2を発令してくれ」

ニール「あいよ」

ヨハン「了解した」

この警戒体制はレベルによって区分され平時はレベル1で、危険になるほど数字が上がっていく。レベル2は管理局内部だけで警戒、最高のレベル5は戦争でも起きないかぎり出る事がないくらいの数
字や。

はやて（レベル2か…）

管理局の観測装置に引っ掛からない連中やし、今回の出撃だけじゃ終わらん気がするな…

カイゼル「会議は以上だ。質問は？」

おっと、考え込んでたら会議が終わりそうになつとるし。

はやて「最後に一つええか？」

カイゼル「……なんとなく、質問したい内容がわかるぞ」

はやて「え！？なんでや？まさか…カイゼルはエスパーなんか！？」

カイゼル「どうしてそうなる……。君の顔にありありと聞きたい事が出ている」

ありゃ、それは失策！

カイゼル「アレルヤの事なんだろう？」

はやて「はは…当たりや。それでどうなん？」

ハルート「アレルヤは、まだいないんだって」

カイゼルの後ろに控えていたハルートが前に出てきて、そう告げた。

はやて「そうか…なら、楽しみにしとこうか」

なのは「？、どういうこと？」

ハルートの意味深な言葉を理解できてなかったなのはちゃんが首を傾げる。

星光「…まだいない、ということはいずれはある、会えるということなのでしょう」

なのは「あ！なるほど！」

雷刃「さすが星光だね！」

どうやら雷刃も分かっていたようやな。

カイゼル「そういう事だ。質問は以上だな？…では、会議を終了する」

会議を終え、会議室を出たうちは現地に向かう迄の間に用意された部屋で着替え、ベッドに横になる。

王「…あの方も帰って来られるのだな」

はやて「嬉しそうやな、王」

王が喜んでいるのがよくわかる。

王「ああ…そうだな、嬉しいな。二度と手の届かぬ場所に行った人が帰って来るというのだから。お前も嬉しいのだろう？はやて」

はやて「せやな。うちも嬉しいわ」

また手料理でも振る舞ったろうかな…会える日を楽しみにしながら、
うちは眠りについた。

この数時間後にライルさんと連絡が取れ、私たちは敵の基地に行く
前に合流することになった。

ライル Side

ライル「ハルファス、敵の基地までの距離はどれくらいだ？」

ハルファス「…あと、100キロくらい」

そうか、と返事をして俺は木影に座り背を木に預ける。敵の基地に
向かう為に休憩をしながら、やっと後半分といった所まで来れた。

ハルファス「…マスター、お水」

ライル「お！ありがとうな、ハルファス」

ハルフアスから手渡された水筒の蓋を開け、水を飲む。

ライル「んぐ…ふう。ほら、ハルフアス」

ハルフアス「…ん」

俺の脚の間にハルフアスは座って、俺の身体を背もたれにして水筒の水をちまちまと飲む。…ソコに座るのが気に入っているのか？

ライル「…いい場所だ」

今いる場所は草原で、青い空に心地好い風がサラサラと草を鳴らしている。

ハルフアス「……………」

ライル「………？」

何も喋らないハルフアス。不思議に思い、そっと顔を覗いて見ると…

ハルフアス「…ZZZ…」

寝ていた。ただし水筒はちゃんとしまっただけ、手には何も持っていないかった。

ライル「よく眠る子だ……」

その小さな手を俺は優しく握る。……こんなに小さい手で、世界を救う為に、戦う道を選んだハルファス。

この子がどうしてデバイス化したり、モビルスーツになったりするかは分からない。未知のテクノロジーが作り出した人間かもしれないし、デバイスかもしれないし、ロボットなのかもしれない。

だが……この子が戦うために存在しているのはわかる。デバイスやモビルスーツ時のハルファスは強力な武装を装備しているしな。

ライル「……なら、なんで幼い女の子なんだよ……」

兵器なんて強ければ姿形は関係ないだろ。性能を満たせばいいんだからな。

しかし、ハルファスは歳こそ分らないが見た目も行動も子どもに近い。俺がハルファスの姿形に惑わされてるだけなのかもしれないけど、人見知りで感情も上手く表現できない……なのに、それでも世界の為に、頑張ってる女の子だ。

ライル「……………」

ハルフアスには、覚悟とかは聞かないし、言わない。そんなモノはとっくに決めているだろうからな。

ライル「俺には、何ができるんだろうな？」

この子に対して、俺は何が出来るだろう？戦うのは今だけで、ハルフアスの未来は…

ライル「ふ…：俺が決める事じゃないか…」

ハルフアスが望む事をしてやろう。彼女が俺に何かを頼むのなら、応えてやればいいだけだ。

ライル「ま、今はゆっくり寝かせてあげるか」

ハルフアスを胸にかかえ、彼女が起きるまでゆっくりとした時間を過ごした。

ハルフアスが起きた数分後にカイゼル達と連絡がとれ、合流する事が決まった。

雷刃Side

雷刃「そんなじゃ、やるよん！」

王「では、ゆくぞ！」

雷刃・王「セット…アップ！！」

僕の身体に光が纏わり付き、装甲と武装を展開していく。腰には長剣と短剣、左肩の装甲にはセブンスードで使っていたバスターソード2が装備された。

雷刃「展開完了…その名は、バルニフィカス！」

王「展開終了…汝が名は、エルシニアクロイツ！」

王はまさに重武装、腰とふくらはぎにキャノンを、両腕にはシールド、背中にはコンテナを二つ装備している。

はやて「無事に起動したな」

フェイト「雷刃、デバイスの調子はどう？」

雷刃「バッチオッケー！！」

王「悪くない…まさに我の為の武装と言える」

手を握ったりひらいたり、剣を簡単に振ってみる。ダブルオーの時
には出来なかった奇抜な動きもこれなら出来そう。

星光「ふむ…どこか私のルシフェリオンと似ていますね」

なのは「たぶんだけど…試作機だからじゃないかな？それにGNデ
バイスは量産を考えて作られてるから規格が似ていた方がコストを
抑えられるしね」

雷刃「そうなの？」

はやて「せやで。オーダーメイドは手間も時間もお金もかかるから
なあ…修理も馬鹿にならんし」

フェイト「規格が同じなら修理も簡単、パーツも共通だからお金と
手間も省ける」

雷刃「今のままじゃ駄目なの？」

なのは「今現在の管理局のデバイスは特別なデバイス以外は明らか
に型遅れで犯罪に対応ができなくなってきたからね。GNデバイ

スは画期的な発明だよ」

雷刃「ふうん」

王「…雷刃、理解できてないな？」

雷刃「まゝね」

全員が悲しそうな目で僕を見てくる。

雷刃「そんなに見つめないでよ！照れるじゃないか！」

星光「まあ…雷刃ですし」

王「そう…だな…」

カイゼル『全員、転送ポート前にいるな？』

談笑していると空間モニターが展開されてカイゼルが映る。彼は今回と一緒に来ないらしい。

カイゼル『今から6人ずつ転送する。現地にはライルがいるから作戦はそちらで決めてくれ』

全員「「「「「了解！」「」「」「」」」」」

カイゼル『では、健闘を祈る!』

通信が切れ、そして転送ポートが起動した。さあて、暴れるとしますかあ!!

第11話　そして合流へ（後書き）

あれ？アレルヤが主人公なのにだんだん影が……

次回はアレルヤSideです

第12話 偽りの赤、羞恥の青（前書き）

アレルやSideとライルSideです。

第12話 偽りの赤、羞恥の青

アレルヤSide

「オーライ！オーライ！よし、下ろせー！！」

ズズン！！、と砂埃を上げて倒壊したビルの瓦礫を下ろす。フェニックスにジャンク屋のおじさんとの話をしたあと、僕が拾ったコンピューター…セブンというらしいのだけど、ソレを僕に預けてフェニックスはジャンク品で何か出来るかも、と言って今はジャンクの山で奮闘中だ。

僕は左腕の無いM1アストレイを回収、おじさんに頼んでのアストレイの派生機であるレイスタの予備パーツをもらい、作業を始めた。

アレルヤ「ふう……」

セブン「なかなか操縦が上手いな」

アレルヤ「はは…ガンダムマイスターは伊達じゃないよ」

アストレイのコックピットの右側に置かれたコンピューター、セブンが僕の意見を取り入れて組んでくれたOSのおかげでM1アストレイをかなり動かしやすくなった。

セブン「ガンダムマイスターか：君はどのようなモビルスーツに乗っていたのだ？」

アレルヤ「可変機構を持った高機動重視のモビルスーツかな」

セブン「なるほど、この世界ではイージスみたいなやつか」

アレルヤ「イージス？」

セブン「ああ、地球連合が作った連合初のモビルスーツ：そのモビルスーツは5機あって、その内の1機：GAT-X303、イージスが君の言っていた可変機構で高機動タイプのモビルスーツだ」

セブンの画面に表示された機体は赤い色をしていたけど：スローネ・アインみたいな頭をしていた。可変した状態も見せてもらったけど：

アレルヤ「：趣味が悪いね」

セブン「言いたい事はよく分かる」

どうしてこんな可変機構を取り入れたんだろう？明らかに不便だと思ふよ。

セブン「しかし、話していて思ったが私と君の感性は近いモノがあ

るな。君の乗っていたモバイルスーツがどんな造形なのか非常に興味があるのだが…どうにか見れないだろうか？」

アレルヤ「コレを使えば見れるかも」

服の内ポケットからソレスタルビーイングで使っていた電子端末を取り出す。

セブン「おお！ありがたい」

アレルヤ「機体とその性能くらいしかないけどね」

セブン「かまわない」

セブンが端末を読み込んでいる間にアストレイを動かして次の現場へ向かうことにした。

フェニックスSide

ガチャガチャ…チュイーン！

ガチャガチャ…カチ！

フェニックス「ふう…こんなモノかな」

私は作業用モビルスーツ、レイスタを使って瓦礫やモビルスーツのパーツ、戦闘機のエンジンや翼を使ってあるモノを作り上げた。…さすがに人の目があるのでガンダムモードになるのはやめた。

フェニックス「これで完成…っ」と

私はジャンク品を使って大型のシャトルの残骸をもとにして作り上げた大気圏離脱用ブースターを作り上げた。

フェニックス「後はコレを私が装備すれば宇宙へ行けるはず…」

地上ではゲートを開くのは不可能に近い。この世界はNジャマーという装置が世界中にばらまかれたせいで核兵器や核エネルギーが使えないらしい。ゲートは爆発的なエネルギーや次元の歪みが起こりやすい場所でないとは出現しないし出来ない。

管理局でいう次元漂流者はこういった歪みが発生しやすい場所で爆発的なエネルギーを起こし、そのエネルギーで次元の歪みから出来たゲートに飲み込まれて別世界に飛ばされる。

私やハルファスはゲートの中に入れば自由に世界を移動出来るが人にはソレが不可能、だから意識を失っている間にわけの分からない

世界に辿り着いてしまう。

フェニックス「宇宙ならなんとかなるだろうし」

Nジャマーを実物で見たことはないが、人間が作ったモノなら、Nジャマーを無効化するモノがあるはず。

フェニックス「とりあえず、行き先はプラント…て場所ね」

そこにいるザフト、て軍がNジャマーを作ったらしいので探りを入れてみよう。最悪、ハッキングしてみても…

フェニックス「いや…もしかしたら、ツインドライブならゲートを開く事が出来るかしら…」

…駄目だ。私の太陽炉は本物に近い偽物だ。私の…フェニックスの力を隠す為のフェイク…。マスターにソレがばれる訳にはいかない。

フェニックス「マスターには…言えない。知られる訳にもいかない」

言えば、知られたら…私は…彼と…人間と、一緒にはいられなくなってしまうから…

フェニックス「フはは…なんとも滑稽な話…」

今さらだ……自分を偽り、真実を隠し、味方を欺く…こんな自分が人の側にいられるはずもない。未だに未練を残している自分がつくづく嫌になる。だけど全てはアイツを倒す為に…ハルファスの幸せの為に誓ったから…！

フェニックス「その為なら、何でも利用してやる、幾らでも泥にまみれてやる…血に汚れてやる。アイツを倒して、ハルファスさえ、あの子さえ幸せに生きていけるなら…！」

後の私がどうなろうと…不幸になっても構わない。その為には、マスターには悪いけど…

フェニックス「……少し、休もう」

暗く考えすぎだ…私はレイスタの中でうずくまる様にして眠る。暗い考えを追い払うように…

アレルヤSide

アストレイに膝をつかせて僕は外に出る。ザア…と海から少し冷たい風が吹いて気持ちいい。

…そういえば、こうやってゆっくりと風を受けるなんて何年ぶりだろう？

アレルヤ「…マリー…」

懐からデバイスのアリオスを取り出して、記録画像を見る。ソコには白いドレスを着た笑顔のマリーと白いタキシードを着た僕が写っていた。

アレルヤ「あれから20年も経ったんだね…」

そう、僕とマリーは結婚した。僕達はソレスタルビーイングだから、形だけの結婚だったけれどみんなが祝福してくれた。

本来なら、一緒にいるだけで僕らは幸せだったんだけど、フェルトやミレイナ、スメラギさんやリンダさんに勧められて…来賓はプロレマイオスクルーのみだけで僕とマリーの結婚式を挙げた。

アレルヤ「…僕なんかが幸せになってもいいのかな？、なんておもったけどね…」

そうは思っても、幸せだった。

あんな事になるまでは

一回想

アレルヤ「墓参り、かい？」

マリ「ええ…大佐に知らせたいの。私たちの結婚と、近況を」

当時、僕らは地球で聖地巡礼を続けていた。ELSとの戦いの後、変わっていく世界を見続ける為もあるんだけどね。

アレルヤ「わかった、行こう」

スミルノフ大佐は敵ではあったけど、マリー…ソーマを改造人間や兵器ではなく、ちゃんと人として見てくれて、僕にマリーを返してくれた人だしね。

マリー「ありがとう、アレルヤ」

そして、僕たちは墓の前に立つ。墓碑にはセルゲイ・スミルノフ、ホリー・スミルノフ、アンドレイ・スミルノフ、と彫られていた。

マリー「大佐、報告にきました」

花を手向けた後、マリーはお墓の前にしゃがみ、今までの事を語りはじめた。楽しかった事、辛かった事、いろんな話をした。僕はソレを黙って聞いていた。

アレルヤ「…もう、いいのかい？」

マリー「ええ、ありがとう。アレルヤ」

しばらくして話を終えたのか、マリーは立ち上がった。僕たちは帰る前に買い物をしていこうと思いデパートに立ち寄る。

アレルヤ「それじゃ、1時間後に出入口で」

マリー「わかったわ」

お互いの買い物をする為に僕たちはその場で別れた。

今でも後悔する。あの時、マリーと離れなければ…彼女を護れたはずだった…

—回想終了—

「おーい！兄ちゃん！仕事だ！！」

アレルヤ「！、はい！」

アリオスをポケットにしまい込み、再びアストレイに乗り込み。
さて、気持ちを切り替えてがんばらないとね。

ライル Side

ライル「此処だな、指定された場所は」

深い森の中でカイゼルに指定された場所に到着した。敵の基地からは10キロは離れているから見つからないとは思うが…

ライル「（警戒しといっても損はないか）ハルファス、索敵と警戒を

頼む」

ハルフアス「…了解」

さて、そろそろ時間だが…そう思っていたら地面が光り、魔法陣が出現した。

ライル「来たか」

魔法陣の上に現れたのは…俺にとっては、とても懐かしい仲間達の顔だった。

はやて「お久しぶりやな、ライルさん」

ライル「また君の世話になるとは思わなかったぜ？ 八神部隊長」

はやて「せやねー、うちも思わんかったよ。それに今は部隊長じゃあらへんよ。普通に八神、か、はやて、でええよ」

ライル「そうだったな、すっかり忘れていた。名前は…ま、八神さんでいくでしょう」

お互いに再会を祝いながら握手をする。

…やっぱり、時間差がついちまったな。俺は彼女達と別れて30年を過ごし、彼女達は俺と別れて何年経ったか分からないが外見を見

る限りあまり年月が経ってないように見える。

ライル「なあ、俺とアレルヤと別れて何年くらい経ったんだ？」

はやて「せやなあ…だいたい3年ちよいかな。こんなに早く会えるとは思わなかったよ」

コッチじゃ3年かよ…みんなとえらい歳の差がついちまったな。

フェイト「久しぶり、ライルさん」

なのは「変わらないようですねによりです」

八神さんに続いて魔法陣から出てきたのは白い隊長さんと、黒い隊長さんだった。

ライル「君達もあいも変わらず美少女でなによりだ」

フェイト「ふふ…おだてても何も出ませんよ？」

なのは「にやはは！私たちをナンパした、て、アニユーさんに言い付けちゃいますよ？」

ライル「!、…………アニユーは来てないのか？」

メンバーを見た瞬間、もしかしたらいるかもしれないと思ったが：

はやて「ゴメンな…急な連絡と事態やったからまだアニューさんには話してないんよ」

ライル「そうか…いや、いいんだ。ソレはソレで、アニューにいきなり会いに行って驚かすサプライズが出来るしな」

はやて「ははは！ライルさんらしい考えやな」

そうこうしている間に魔法陣から次々と人が現れる。黒いライダースーツのような服にコートを羽織った集団…たしか、カイゼル直属の特殊部隊の奴らか。

ライル「カイゼルはどうした？」

はやて「カイゼルは今は戦力の集結や他にも敵の基地がないか調べてる」

なのは「だから今回はカイゼルの部隊から30人と私たち3人、それと…」

フェイト「三姉妹だね」

ライル「三姉妹？だれだ？」

星光「私たちの事です」

なのは達の後ろから、なのは達とそっくりでありながら違う、闇のマテリアル達が現れた。

ライル「ああ、星光たちのことか。よろしくな」

雷刃「そゆことゝまあ、よろしく」

王「フン…まあ協力してやろう」

ライル「ならコッチも紹介しなくちゃな。ハルフアス、いいか？」

俺が長身な事もあり、みんなからは見えない位置、つまり俺の真後ろにハルフアスは隠れていた。

ハルフアス「……マスタあー……」

ライル「ふむ…しょうがないな、ほら」

泣きそうなハルフアスを抱き抱え、お姫様抱っこをしてやる。ハルフアスは恥ずかしいのか、俺に顔を押し付けてみんなを見ないようになっている。

ライル「頑張るんだろう？」

ハルフアス「…………ハルフアス、です…／／／」

小さな声で顔を真っ赤にしながらみんなを見て、自己紹介をしたあと、彼女はすぐに俺に抱き着いて顔を隠した。

ライル「頑張ったな、えらいぞ。ハルフアス」

ハルフアス「／／／」

ライル「この通り、人見知りが激しい子なんだがな、根は素直でいい子なんだ。みんな、よろしく頼むよ」

はやて「了解や」

フェイト「わかったよ」

なのは「よろしくね」

星光・雷刃・王「「……………」」」

なのは達3人とカイゼルの部下は頷いてくれたが三姉妹は沈黙したままハルフアスを見ている。

ライル「三人もいいか？」

星光「…了解しました」

雷刃「…わかったよん」

王「……心得た」

三人も納得してくれたか。ひとまず安心だな。

ライル「それじゃ、ハルファスの自己紹介も済んだし、作戦会議と
いきますか」

はやて「え？うちの自己紹介は？」

ライル「ハルファスが落ち着いてからにしてやってくれ。この状態
じゃ無理そうだからな」

なのは「あゝなるほど。了解だよ」

こうして、俺達は作戦会議を開始した。

第12話 偽りの赤、羞恥の青（後書き）

次回は設定をのせようと思います。

第13話 開戦（前書き）

タイトル通りです。

第13話 開戦

フェイトSide

フェイト「こちらライトニング1、内部に侵入完了」

なのは「こちらスターズ1、同じく完了です」

星光「こちらスターズ2、完了しました」

雷刃「こちらライトニング2、完了したよん！」

ライル「了解だ、なら手筈通りに頼む」

四人「「『了解』」」

ライル「そんじゃ…行くぞ！」

ライルの号令で基地に攻撃が開始された。私たち四人は私となのは、雷刃と星光の二チームに別れて敵の基地の内部に侵入、情報を集める役割だ。

雷刃『でも、なんで僕らがやるのさ？他の人の方がよくない？』

フェイト「顔が相手にばれてる可能性があるからね…いざという時は内部で暴れてこちらに注意を引き付けれる」

星光『なるほど…その為に私達四人が選ばれた訳ですか』

なのは「単独での戦闘力が突出してるからね…」

外部から敵の基地は私達の世界の空軍と同じような作りをしていて、私達が目指すのは敵のコンピューターにアクセス出来る場所だ。

ズドオオオオン！！

激しい揺れと同時に基地が揺れる。外でライルさん達が攻撃を開始したみたい。

なのは「時間は限られてるし、行動開始！」

なのはの言葉を合図に、私達は物陰に隠れながら行動を開始した。
…何か見つければいいけど…

ライルSide

高町隊長…いや高町さん達の潜入完了の報告を聞いた俺達は攻撃開始の準備をする。

ライル「そんじゃ…いくとしますか」

ハルファス<…クロス・メガ・ビームキャノン最大出力……チャージ完了>

王「GN粒子圧縮。GNキャノン、展開」

エルシニアクロイツ<GNキャノン展開。GN粒子圧縮…完了>

はやて「全部隊…攻撃用意！」

俺と王様は空戦、八神さんにはカイゼルの部隊の指揮を頼んだ。先行した星光達に攻撃しないように注意しないとな。

はやて「敵に動きあり！数は…て！？なんや、この数！？」

王「さすがに…多すぎるな」

ハルファスのレーダーにも数が表示されてはいるが…確かに、レーダーの四分の一が敵の反応とは…。

ライル「…サイズが小さい？」

レーダーに映るのは小さい人間サイズの反応ばかり。

…何故、奴らは人間サイズのモビルスーツで戦いを挑んでくるんだ？
でかい方が何かとやりやすいのに…

ライル「で、な〜んで俺は敵の心配なんかしてんだか…ライル・デ
イランディ、ハルファス！目標を狙い撃つ！」

ハルファス<…発射>

肩のキャノンから以前とは違う高威力の砲撃が撃たれ、回避行動を
とっていた敵でさえ飲み込んだ。

ライル「なあ、ハルファス」

ハルファス<…なに？>

ライル「今のキャノンの出力はどれくらいだ？」

ハルファス<…50パーセント>

まじかよ、今のだけで敵を60は落としたのか？

王「ほうけるな、来るぞ!!」

驚く俺を横目に見て、王様も砲撃を開始する。

はやて「全部隊員は地上施設の攻撃！ハルファス、王は地上部隊の援護及び空の敵の迎撃！」

隊員達「」「了解!!」「」

ハルファス<…敵データ確認…敵はエアリーズ、空戦特化機体…地上部隊はザク…各員にデータ、転送>

敵の詳細データがこの場にいる全員のデバイスに転送される。

ライル「よし、出力を落として連射に。それとフェザーファンネルを使う！」

ハルファス<…了解、射出>

カシュツカシュツ！とフェザーファンネルが飛び出し、俺のまわりで浮遊する。

ライル「ハルファス！ハロ！マルチロックシステム起動！」

ハロ<リヨウカイ!リヨウカイ!>

ハルフアス<…わかった>

ライル「王様!援護よろしく!!」

王「はよう行け!!」

その場から敵の中心に向かって飛び出す。そして俺の視界に見える敵、そしてハルフアスの射程に入っている敵にロックマークーが表示された。

ハルフアス<…ロック、完了>

ライル「乱れ撃つ!!」

ハロ<ミダレウツゼ!ミダレウツゼ!>

敵の前衛に到達した俺達はサバーニャでもやっていた前後上下左右に対しての射撃する!

ライル「数だけいてもなあ!」

宇宙にいるような感覚、周りは敵だらけ、味方は相棒とハルフアス。

ライル（懐かしいね、まったくよ…）

30年前を思い出す。あの時よりは随分と楽だが、四方八方敵だらけなんてあれ以来なかった気がするし。

ハルファス＜…マスター、敵の増援…＞

どうやら敵は数が少ない俺達の方に狙いをしぼってやがるな。

ライル「やれやれ…もう少し怠けてくれないと思うがね…。
い
くぞ、ハルファス」

ハルファス＜…了解＞

さあて、もう少し張り切りますか。
フェイトSide

カタカタ、カタタ、カタカタカタ…

なのは「フェイトちゃん、あとどれくらい？」

フェイト「もう少し…」

キーボードを懸命に叩いて情報を探す。私達は上手く潜入に成功した後、敵の目から隠れながら進み、ある部屋で空間モニターとキーボードを見つけ、そこからデータを奪う事にした。

フェイト「……出来た。行こう、なのは」

なのは「了解だよ」

辺りに敵がない事を確認して部屋を出る。後は星光たちと合流して、内部を破壊しつつ脱出。この基地を破壊すれば…

星光《なのは、フェイト。聞こえますか》

なのは《星光。調度よかった、データは手に入れたよ。今から合流しようか》

星光《……私と雷刃の魔力反応を辿ってコッチに来て下さい》

フェイト《何か問題が起きた？》

星光《見てもらいたいモノがあります。時間も無いので早く》

なのは《…わかった、すぐにいくね》

なのはと頷き合い星光達の元へ急ぐ。念話から緊急事態みたいな感じはしなかったけど…。

星光達のいる場所はそんなに遠くはなかった。

雷刃「二人とも、コッチだよ」

部屋の入り口で警戒していた雷刃が手招きで私達を呼ぶ。

フェイト「雷刃、何があったの？」

雷刃「…ん、見ればわかるよ」

雷刃の表情に曇りが見える。珍しい、と思った。雷刃は感情豊かで何時も…とはいかないけど、大抵は笑っているのに…

星光「案外と早かったですね、二人とも」

部屋の中にはもう一つ扉があって、その前に扉を背にして星光が立っていた。

なのは「星光、何があつたの？」

星光「この場に呼んだ理由は…この先にあります。正直、あまり見たくないモノがありましたかね」

うんざりとした様子で肩をすくめる星光。…いったい何があるんだろう？

星光「…見たほうが早いですね。開けますよ」

プシュー、と扉が開くと中は真っ暗で何も見えない。

フェイト（！、この臭いは…）

私が異臭に気付いたのと同時に、星光が壁にあつたスイッチを押してライトがつく。そこには、異様な光景が広がっていた。

なのは「…：な、に…：これ、は？」

部屋にあつたのは血まみれの手術台。その上にのせられていたのは…

フェイト「…うっ…ひどい…！」

血まみれの女性だった。歳は私達と同じくらいだろうか。ただし…
心臓の辺りに丸い水晶みたいなモノを埋め込まれていた。

なのは「…ごめん！」

なのはが壁際に走り、うずくまる。私は仕事柄、惨殺された遺体等
を見る事があるので耐性がある。

雷刃「大丈夫？」

なのは「…ごほっ！……ありがとうございます…」

なのはの背中を優しくさする雷刃。彼女も私と一緒にいるから耐性
があるみたいだ。

星光「私達がこの場に来たときには既に死んでいました。遺体を見
ての推測ですが…昨日は生きていたと思いますよ」

星光の話を聞きながら私は部屋に入り、辺りを調べる。

フェイト（相手は機械の軍団のはず、なのにこの所業は狂った人間

がする事だ)

部屋にはこの人に関する資料や何の実験をしていたかのレポートのようなモノは無く、私は近くにあったシーツを遺体に被せ、目を閉じ、黙祷をする。

ビー！ビー！ビー！ビー！

突然、壁に備え付けてあるランプが点滅し警報が鳴り出した。もしかしたら私達の存在がばれたのかもしれない。早く脱出しないと…！

フェイト「ちゃんと埋葬出来なくて……ゴメン」

私は彼女に謝った。家族の元へ帰して、埋葬してあげたかった。けど…運び出す時間がないし、この基地は最悪の場合、破壊しなくてはならない。

星光「脱出しましょう。そろそろ外も厳しいでしょうから」

雷刃「なのは、大丈夫？」

なのは「…うん、大丈夫。いこう」

フェイト「前は私と雷刃、中間なのは、後ろは星光。行くよ！」

部屋から出てフォーメーションを組み、前進する。曲がり角からモノアイのモビルスーツが出てくるのが見えた。先手必勝！！

フェイト「はあああ！！」

サイズモードのバルディッシュを右上から左下へと振り抜く。

なのは「デイベイン…」

刃がモビルスーツを切り裂くと同時になのはが後ろから前に出て…

なのは「バスター！！」

私の切り捨てた敵の後ろに来ていた敵を一掃する。

雷刃「そおい！！」

星光「遅いですよ」

私達の後ろでは別の通路から来ていた敵を星光と雷刃が撃破してい

く。

フェイト「駆け抜けるよ！三人とも！！」

なのは「了解！」

星光「分かりました」

雷刃「わかったよん！」

なのはがひらいた廊下を、出口に目掛けて飛んでいく。そして私達は外に脱出した。

? side

? <身体レベル…不良>

? <ナノマシン…不良>

?<ニューロレベル：良好>

?<起動シーケンスを開始>

?<全システム、オンライン>

?<起動完了：行動開始>

動かなかった身体を動かし、私は床に立つ。

?<目覚めたか。早速だが、君に仕事を命ずる。外にいる敵を排除したまえ>

空間モニターに現れた奴：システムから命令が下され、私は目標を探す。

?<目標：敵勢力ノ殲滅。行動ヲ開始>

?<頼むよ>

私はシステムに答える事も無く、外に向かった。

No side

ライル達が開戦した基地から離れた場所で、独特の形をした空母が浮いていた。

?<君達にも働いてもらおう。出撃だ>

??<わかりました>

システムからの通信を切り、彼等は命令通り、出撃準備をする。基地まではあと10分…と、いったところだ。

カタパルトに自身を固定した彼は出撃をまつ。

??<まったくとく…>

ナビゲーションが出撃地点についた事を知らせてきた。カタパルトハッチが開放され、外の光が彼の白い身体に反射した。

出撃ランプが赤から緑へと変わり、彼は姿勢を低くし態勢をとる。そして、彼は告げた。

??
<RX-78、ガンダム！行きまーす！！>

ここに、白き悪魔が降り立った。

第13話 開戦（後書き）

皆さんの意見はこの小説に生かして行きますので！

よろしくお願いします！（◡◡）／

***設定* GNデバイスについて(前書き)**

順番が前後してしまいました。

設定 GNデバイスについて

GN-D-0001…ルシフェリオン

装備者…星光の殲滅者

装備…ビームピストル2×2、折り畳み式ビームランチャー×2（折り畳んだ状態ならキャノン、展開した状態ならランチャー）

動力…太陽炉—2×1

備考…管理局で開発された太陽炉搭載型デバイス試作一号機。なのはのバリアジャケットを基準に肩、胸、腰、ふくらはぎ、足、手に装甲が付け足され、背中にGNドライブを装備している。ビームピストルは腰に、ビームランチャーはGNドライブを挟むように背中についている。装甲色は黒。

GN-D-0002…バルニフィカス

装備者…雷刃の襲撃者

装備…GNバスターソード2、GNソード2・シヨート、GNソード2・ロング

動力…太陽炉ー2×1

備考…太陽炉掲載型デバイス試作二号機。フェイトの真・ソニックフォームを基準に左肩、手、肘から先の腕、腰、ふくらはぎ、足、背中に装甲を追加。GNドライブは背中に装備。バスターソードは左肩の装甲に装着、GNソード2ロング、ショートは腰の左右に装着。装甲の色は水色。

GNーTーDー0003…エルシニアクロイツ

装備者…閻統べる王

装備…GNキャノン×4、GNフィールド発生機兼シールド×2、小型GNフィンファンング×8、ファンングコンテナ×2

動力…擬似太陽炉ー改×2

備考…太陽炉掲載型デバイス試作三号機。他の二機と違い擬似太陽炉ー改を二基使用。はやてのバリアジャケットを基準に胸、背中、肘から先の腕、手、腰、ふくらはぎ、足に装甲を追加。GNドライブは背中と腰に装備。GNキャノンは腰の左右とふくらはぎの左右に装着。GNフィールド発生機兼シールドは左右の腕に、小型GNフィンファンングはコンテナに格納して背中、左右に装着されている。

＊GN－D……太陽炉－2積載型デバイスの略称。

＊GN－T－D……擬似太陽炉－改積載デバイスの略称（Tはタウ、と読んでいただければ幸いです）

数字は開発番号。GN－T－D－0003《エルシニアクロイツ》は積載している太陽炉こそ違えどGNデバイスである事は変わらないため0003の開発番号を与えられた。

トランザムについて

現段階では使用可能。ただしリミッターを付けて粒子消費を抑えているので機能が3倍ではなく、2倍になるように設定されている。

GNデバイスとは：

JS事件において管理局は現状のデバイスではガジェット、シンクス等に対応が出来ず、対応が出来たのは極めてわずかの部隊だった。そこで管理局はJS事件にて回収、接収したシンクスやガガから太陽炉を取りだし、ソレをデバイスに組み込む事で魔力量が少ない者やランクが低い者でも一定の戦力になるのではと考えた結果、GNデバイスが作られる事が決定した。

その試作機は星光、雷刃、王に渡され現在は最終調整と実戦試験を行っている。

***設定* GNデバイスについて（後書き）**

これから出てくるガンダムやモビルスーツの詳細を載せるか、載せないか迷っています。

どちらがいいのでしょうか？

第14話 魔王降臨（前書き）

タイトルに伴う内容かは：わからないです。

あと、皆さんの意見をもとに後書きに設定を載せようと思います。

ご意見、ありがとうございます。

第14話 魔王降臨

NO side

アサシン1「こちらチーム・アサシン、地上施設の破壊を開始する」

カイゼルの部隊員が爆薬を施設に投げ込み、爆発させていく。そんな中、彼らはある者を発見した。

セイバー1『チーム・アサシン、爆破を一時中断しろ』

アサシン1「どうした、セイバー1。問題か？」

セイバー1『ああ：私からは確認しづらいが、アソコの入り口辺りに居るのは人じゃないか？近いのは：セイバー2か、確認してくれ』

セイバー2『了解、確認します』

燃え盛る炎：その中に、女性はいた。

セイバー2「こちらセイバー2、女性を1人確認。救助します」

セイバー1『了解した』

セイバー2は彼女に近づく。彼女は裸で多少目のやり場に困るが、今はそんな事を言ってる場合ではない。

セイバー2「大丈夫ですか？助けに来ました。さあ、早く此方に！」

セイバー2は彼女の手を掴み、誘導する。だが…

？〈敵ハ、排除スル〉

セイバー2「なに？ぐガ！？」

女性に引っ張れたセイバー2…その腹部からビームサーベルが突き出ていた。彼女を振りほどき、地面を転がる。

セイバー2「ガハッ！くそ…敵か…！緊急、信号！」

デバイス〈了解〉

セイバー2はデバイスに命令して緊急事態を全員に送信する。そして、なんとか離脱しようとして…

?
〈シネ〉

セイバー「ぐあっ!？」

胸をビームで撃ち抜かれ、その場に崩れた。

〈任務ヲ…開始する〉

女性の胸に埋め込まれた水晶が胎動し、黒い糸が現れ彼女を侵食していく。それが終わると、ソコには…

?
〈ガンダムベルフェゴール、敵の殲滅を最優先とする…ウオオオオオオオヲヲヲヲヲヲ!!〉

異形のガンダムが、咆哮をあげる姿があった

はやてside

はやて「よし…今のままなら後一時間で制圧可能やな」

被害は怪我人はおるけど死人はない。あまりにも上手く事が運ぶから不安になるなあ…。

はやて「よし、チーム・ランサー、チーム・アーチャーに指令。ランサーは敵を攪乱、アーチャーは足を止めた敵を撃て」

アーチャー1『アーチャー1、了解した』

ランサー1『こちらランサー1、行くぜ！』

それぞれのリーダーが部下に指示を出し、攻撃を開始する。

ランサー1『オラオラ！どうしたどうした！』

ランサー隊は敵のあいだを縫うように駆け進み、すれ違いざまに敵を貫く。

アーチャー1『まったく…あの男は少しは静かに動けないのか』

アーチャー隊はランサー隊に釣られて足を止めた敵を正確な射撃で撃ち抜いていく。

ランサー1『はっ！たく、穿つまでもねえな！』

アーチャー1『呆気ないモノだ』

すごい勢いで駆逐していく。…一時間もかからんかもしれへんな。

王「ん？……なんだ？」

はやて「どうしたんや、王」

ライルさんとハルフアスによってあらかた航空戦力を殲滅したとはいえ、まだ敵はいるのだから、砲撃を止め、遠くを見る王。視線の先は空と山が見えるだけだ。

王「……………なにか、来る？」

はやて「王？」

王の肩に手を置こうとした瞬間…

セイバー1『司令！こちらセイバー隊！セイバー2が殺られた、敵は…ガンダムタイプだ！』

王「こちらも来たぞ、デカイのが」

2つの報告。ソレは、最悪の事態を意味していた。

ハルファス side

また、敵が沢山きた。せっかく頑張ってるのに、全然終わらない。

ライル「ハルファス、まだいけるか？」

ハルファスへ…大丈夫

ハロがいるから、ファンネルの操作も楽チンだし…

ハルファスへ…頑張ろ、ハロ

ハロへリョウカイ！リョウカイ！

でも…ガンダムモードの方が効率よさそう…。

ハルフアス（…お姉ちゃんは、奥の手は最後に出すように、て言っ
てたし…）

まだ、最後じゃない。マスターも私も、まだ戦える。飛んできた敵
をまた落とす。

ハルフアスへ……？<

そんな時、敵の中心の陣形がひらいて、その先にいたのは白亜の戦
艦だった。

ライル「おいおい…マジか？」

ハルフアスへ…ホワイトベース…！<

馬が膝をついたような形をした白い戦艦…ホワイトベースはその主
砲をこちらに向けた。

ライル「まずい！！総員散開！敵戦艦の射線から回避しろ！！」

バシユウウウウ！！

マスターが指示をだした数秒後、ホワイトベースから主砲が放たれ、私達の横を抜けていく。

…ジェネレーション・システムはこんな戦艦まで作りだしたんだ…。

はやて『被…報告！全…：ザザ…ザー』

ライル「おい！八神さん！？…チツ、ジャミングか！」

ハルファスへ…来る！∨

さっきの数倍の敵が私達に押し寄せてくる。…ピンチ、かも。

雷刃 side

雷刃「よいしょお！」

地上でスケートをするように地面を滑り、バスターソードを振り回して敵をぶっ飛ばす。まったく、切っても斬っても全然減らない。

雷刃「うっざいなあ！とつとと消えろよ！！」

僕は星光ほどバトルマニアじゃないからさ、戦いばかりはつまないんだよ。

星光「心の声が駄々漏れですよ、雷刃」

雷刃「うげ！？ 星光！？」

いつの間にか背中あわせの状態で僕の後ろに星光がいた。

星光「うげ、とはなんです。まったく：私とて同じ相手ばかりは飽きますよ」

キャノンとビームピストルを連射して敵を撃ち抜く。相手はマシンガン：実弾兵器を使っていた。だけどバリアジャケットを貫く威力はないし、体のラインにそって全体に張っている魔力障壁が防いでくれる。

雷刃「つまり！今の僕は！」

ザクが斧みtainな武器：ヒートアックスを振り上げて向かってきたのを…

雷刃「無敵なのだ!!」

左手のみで持った幅広いバスターソードを盾にして防ぎ、右手に持ったロングソードで胸部を貫く。

星光「気楽ですね、貴女は」

雷刃「ん？なにか言った？」

星光「何も言ってますんよ」

バスターソードを肩にしまい、ロングソードとショートソードを逆手で構える。周りには敵がいなくなってるけど、構えた方がかっこいいからね！

「うあああああ!!」

ドン！ゴロゴロ…

そんなかっこいい僕の前に人が飛んできて転がった。…死んだかな？

星光
s i d e

「ぐう…ぐっ!？」

雷刃「あ、生きてた。大丈夫？」

雷刃の前に転がってきた人の服装…カイゼルの部隊の人ですか。傷だらけのところを見ると、どうやら強敵と遭遇したようですね。

星光「雷刃、その人を抱えて後退します。私が援護としんがり殿をするので早く」

今は敵がいらないとはいえ、こんな戦場の真っ只中では聞きたい話も聞けはしないですね。

雷刃「ええ〜！僕が殿したい！」

星光「そんな我が儘をいうんじゃないやありません。雷刃だから任せるんですよ？」

雷刃「僕だから？」

星光「そうです。貴女は頼りになりますからね」

雷刃「もー！そこまで言うなら仕方ないな！ほら、捕まってる！」

…ふ、ちよろいですね。

雷刃が転がっていた彼女を肩にかつぐ。随分と手酷くやられたのか、彼女は血だらけだった。

「…まだ、アイツを…」

星光「アイツ？誰です？」

雷刃「あ、なんか来た」

？
／＼…………／＼

ソコに居たのはガンダム。私たちを助け、私たちを窮地に立たせもした、良い意味でも悪い意味でも、慣れ親しんだモノ。

星光「ですが、こんなガンダムは初めて見ました」

体は全体的に紫色で腕は長く、手は鷹の爪のようで、ガンダムフェイスは威圧感に溢れている。

星光「…雷刃、その人を連れて離脱を」

雷刃「りょくかい。すぐに戻るから頑張ってね！」

タタン！、と一足で飛んで行く雷刃を見ずに、私は相手を見ていた。

ルシフェリオン〈電波障害の発生を確認。通信が不能になりました〉

その報告と共に陽射しが陰りを見せたので、視線を少しだけ上に向ける。

星光（増援ですか…。やれやれ、厄介なことですね）

空には白い巨大な戦艦が浮かんでいて、ソコから大量に黒いモノが出てきていた。

おそらくは敵の人間サイズのモビルスーツだろう。

ビュン！！

星光「…と。せっかちですねアナタは」

私の頭を潰そうとして振るわれたクローを一步だけ下がり、かわす。顔の目の前を通り過ぎたクローは相手の手元に戻る。

「殲滅…敵は！殲滅する！」

星光 「おや、アナタも殲滅者ですか。私と同じですね。ですが…」

ビームピストルを構え、相手に狙いをつける。相手も姿勢を下げて駆け出せるように構えた。

星光「殲滅者は、私1人でいいですよ」

ベルフエゴールへオオオオオヲヲヲヲヲ！！！！

お互いの自己主張と共に、戦いは始まった。

なのは side

私達が地上にいる敵を倒している最中に、ソレは現れた。

なのは「アレは…戦艦かな？」

フェイト「まずい：増援だよ、あれ」

奇抜な形をした戦艦が空にいるライルさん達に攻撃している。はやてちゃん、無事かな？

なのは「はやてちゃん、被害は？」

……………駄目だ。念話が通じない。

なのは「レイジングハート、通信は？」

R・H「ダメです、繋がりません。妨害されていますね」

通信系が全て断絶か：これはまずいかも。

なのは「フェイトちゃん、八神指揮官の方に援護に行ってくれる？」

フェイト「なのは？」

フェイトちゃんと背中合わせで話す。敵からの攻撃はプロテクションで防いでいる。

なのは「私は星光達に合流するから。まずい流れになる前に後退しよう」

フェイト「わかった。ゆりかごの時みたいに…無茶は駄目だからね？」

…？あ、ゆりかご戦のリボンズと戦った時か。

なのは「大丈夫だよ。それじゃ、行くね！」

フェイト「うん、気をつけて」

フェイトちゃんが飛んで行くのを見送り、私も飛んで行こうとした瞬間。

なのは「…！…プレッシャー？何か来る？」

押さえ付けるような違和感が体にのし掛かる。方角は…戦艦の方からだ。

なのは「…来る！」

ビシュン！ビシュン！ビシュン！

三発のビームが私に向けられて撃たれたけど私は横に動いて軽くかわし…

なのは「アクセル！」

R・Hへシューター！

お返しに六発のシューターを相手に撃ち返す。

?
へチィ！

ガガガガガキーン！

相手は赤いシールドを使って全てのシューターを防ぐ。防いでいる間にビームライフルを腰におし、相手はビームサーベルを背中から引き抜いた！

なのは「レイジングハート！」

R・Hへプロテクション

バチィィ！

プロテクション展開と同時にビームサーベルが当たり、お互いに拮抗して火花をあげる。

なのは「バースト！」

プロテクションを爆破して相手と距離を取る。相手も姿勢をたてなおす為に一度下がったみたい。

なのは「……」

爆発の煙が晴れていくと、そこには白、赤、青のトリコロールの機体があった。

なのは「やっぱり…ガンダム…」

ガンダム〈君が高町なのはだな〉

目の前のガンダムはビームサーベルの切っ先を私に向けて確認してきた。

なのは「そうだけど…君は？」

ガンダムへ僕か、僕の名はガンダム。型式番号RX78-2、ガンダムだ」

相手が律儀に答えてくれたのは意外かな。喋っているのはさほど驚くことじゃない。AIか、はたまたバリアジャケットなのかは、わからないけれど。

なのは「私に何か用事かな？」

私もレイジングハートを相手に向ける。

ガンダムへ君を倒しにきた。管理局の白い魔王と呼ばれる君を倒す為に」

………イマ、ナンテイッタ？

なのは「………ちょっと：O★H★A★N★A★S★I、しょうか……」

ガンダムへクツ……すごいプレッシャーだ。やはり、魔王の二つ名は伊達じゃないな！」

アア……マチガイハ、タダサナイトネ……

ガンダムへガンダム、行きまーす！>

ナノハ？「タカマチナノハ…モクヒョウヲ、ツブシマス」

サア…イクヨ…

星光 side

雷刃「せえい！！」

星光「ふっ！」

怪我人を置いてきた雷刃と合流し、二人でガンダムを攻撃する。

雷刃がバスターソードを構えて接近戦を仕掛け、私がビームピストルでソレを援護する。だが…

ベルフェゴールへオオオ！！！！>

相手は腕を振り回し、雷刃を近づけさせないし、ビームすら叩き落

としてしまい致命傷は今のところゼロ。

雷刃「ちえっ、結構やるね。こいつ」

星光「まったくです。おまけに…」

ベルフェゴールが腕をクロスさせ、開いた瞬間、

ベルフェゴールへオオオオ！！＜

バシユウウウウ！！

雷刃・星光「はっ！！」

ディバインバスター並の砲撃が撃たれる。ソレを飛んで空中に回避すると次はヤツの手からビームが放たれる。

雷刃「はっ！ふっ！てえい！！」

ガン！キイン！カン！

雷刃はバスターソードでビームを切り落とし、

星光「……ふん」

バチ！バチ！バチ！

私はビームピストルでビームを放ち、相殺する。

星光（二人がかりなのに、押しきれないとは…）

雷刃「どうする？ 星光。こんなんじゃ、そのうち僕らが力尽きちゃうよ？」

タン！、と地面に着地。相手を見据える。相手も私達を見据える。

星光「……雷刃、前と後ろを交代しますよ」

雷刃「……手はある？」

星光「…予想外の行動なら、相手の動きも鈍くなるでしょう？」

雷刃「ふう…わかったよ。じゃ、行こうか」

ヒュン！、とバスターソードを振り、肩に装着すると雷刃はソード・ロング、ソード・ショートに持ち替える。

星光「合わせて下さいよ」

雷刃「あはは！努力する！」

私を先頭にし、一気に相手に向かう！

ベルフェゴールへオオオヲヲ！！！

ベルフェゴールは右腕を振りかぶり、ストレートパンチを繰り出す！

星光「ぐうう！」

左手のビームピストルを犠牲に、パンチの軌道を反らしながら、私は前に進む！

ベルフェゴールへグオオオ！！

残った左腕で私を狙いをつける。ビームの砲口が光を放つが…

雷刃「させるか！」

私の後ろを追従していた雷刃がキャノンを足場にして飛び上がり、ソード・シヨートを投げつける！

ベルフェゴールへオオ！＜

左腕を湾曲させてソードを弾くベルフェゴール。

星光「隙だらけです」

狙いが逸れたその隙を逃さず、右肩のキャノンを展開してランチャーにし、ベルフェゴールまでのあと少しの距離をゼロにする。そして、ヤツの右肩に押し付けたランチャーが火を噴いた。

バグシャー！！

星光「バカな…！？」

火を噴くはずのランチャーは、ベルフェゴールが自身の頭で潰すという、奇策で破壊された。

雷刃「まだああああ！」

飛び上がっていた雷刃が振り上げたソード・ロングを両手で持ち、首筋に目掛けて振り下ろす！

ベルフェゴールへガアアア！！！

雷刃「うえ！？そりゃないんじゃない！？」

伸ばしていた右腕を無理矢理まげてソード・ロングを関節に挟み、ソードを止める。

星光「ですが！」

雷刃「これで！」

それぞれに残っていた武装…雷刃はバスターソードを、私は右手のビームピストルを。

雷刃・星光「終わり（だ）（です）！！！」

バスターソードを首筋に突き刺し、ビームピストルは脇腹に突きつけ連射する！

ベルフェゴールへガアアアアアアアア！！！！＜

攻撃を受けて、叫びをあげながら暴れるベルフェゴールから離れる。
ヤツはガクリ、とその場に膝をつくとかちかちと火花を散らし始めた。

星光「ふう…ふう…」

雷刃「はあ…はあ…」

ヤツがおとなしくなった事で、一息つける。
ヤツはもう動けないのか、ピクリもしない。

ベルフェゴールへい…だ…＜

星光「？、何を…」

ボソボソ、とベルフェゴールから言葉が聞こえてくる。初めの言葉
以来、叫んでばかりはだったヤツが何かを言葉にしている。

ベルフェゴールへ痛いよお…死にたく…ないよお…＜

女性のような声が聞こえて、死にたくない泣いているような声をだしていた。

パキン…

星光「バカな…貴女は…！」

雷刃「さっき、死んでた人じゃん！」

ベルフェゴールの頭の装甲が割れ、その下から出てきたのは…基地の中で、実験室のような場所で、無惨な姿をさらしていた女性だった。

女性「助け……て……」

雷刃「あ…」

星光「しっかり！」

ドサリ、と倒れた彼女に私達は駆け寄り、その場にしゃがんで彼女を抱き抱える。

女性「…わ…たし、あの人の……もとに…」

星光「しっかりして下さい。必ず救助がきますから」

女性「……帰り……たい……」

瞳から光が消え、一筋の涙を流しながら、女性は逝った。

…私達は…

雷刃「僕ら、何と戦っていたのかな…？」

星光「…彼女を連れて撤退します」

私の言いたかった事を口に出す雷刃に背を向け、彼女を抱き抱えて立ち上がる。

そして敵が集まらないうちに、私達はその場から離脱した。

ガンダムside

ガンダムへこの！<

ビシュン！ビシュン！ビシュン！

ビームライフルを連射して相手を牽制する。

NANOHA「ムダ」

ヒュン！バチ！！

ガンダムへチィ！！！

魔法弾の直撃を受けたビームライフルを手放し、シールドでビームライフルの爆発を防ぐ。

ガンダムへビームライフルまで……。コイツ、強い……！

NANOHA「ナメルナヨ、キカイガ……」

これまで、コチラの攻撃は悉く失敗に終わっていた。ビームは防御され、バズーカは破壊され、ビームサーベルの一本はプロテクションごと爆発した。

ガンダムへこのまま、僕が負けるのか？ 白い悪魔と言われた僕が……

馬鹿な……そんな馬鹿な！

NANOHA「アクマがマオウにカナウものか…サア…キサマはキエロ」

負けるものか、僕は…ガンダムだ！

ガンダムへうおおお！

シールドを投げ捨て、ビームサーベルを握りしめて突撃する！

NANOHA「アクセル」

R・Hへシューター！

相手の数多くの魔法弾が僕に迫る。だけど…

ガンダムへガンダムの名は！伊達じゃない！

致命傷だけを避けて前に進む。せめて、一撃だけでも！

ガンダムへいけえええ！

あと少しで届く…！

NANOHA「グッド…」

R・H「ナイト」

ザグン！

ガンダム「ああ…こんなことが…」

本当にあと少しだった。あと少しでビームサーベルが届きそうだった。だが…

NANOHA「アマイよ…スベテがね」

僕のビームサーベルは届かず、代わりとばかりに僕の胸を貫いたのは白い剣のような物体…

NANOHA「ブレードビット…砲撃戦特化のワタシが敵に近接に持ち込まれた時に使うモノだよ」

ガンダムへなるほどな…僕は…負けたか…

身体に電流が走り始める。…ここまでだ。

なのは「…言い残す事は？」

そう言われて彼女を見ると、その顔は先程までのような戦いの顔ではなく、悲しみと、慈愛に満ちた顔だった。

ガンダムへ今は引くけど…また、戦おう。高町なのは

なのは「そう…じゃあね…」

そして、僕は爆発した。

ライル side

ライル「さすがに、数が、多すぎ、だろ！」

フェイト「大丈夫!？」

爆発の中から現れたのはザンバーを携えて、俺の背中を守るように立つフェイトちゃん。

ライル「助かった。サンキューな」

フェイト「どういたしまして」

バシユウン!!

ビームの砲撃音と共に爆発が起こる。俺たちの真上に来ていた敵が爆散した。

王「まったく…油断大敵と言ったモノだな。手がかかる」

ハルフアスへ…ありがとう、おゝさま…

王「ふん…。貴様らに死なれたら寝覚めが悪いからな…」

王様はそのまま俺たちの近くに来るとそのまま戦い始めた。戦力は増えたが、どうしたものかね…。いくらコチラの質がよくても数の暴力に押されてちやいずれは…

ハルファスへ…マスター、ガンダムモードの起動を」

俺の肩にいるハルファスのホログラムがそうやってきた。

ライル「…大丈夫なのか？しばらく元の姿に戻れないんだろ？」

ハルファスへ…仕方ない。状況は、最悪だから…」

ハルファスの顔は覚悟を決めた表情になっていた。…しょうがない、やるか！

ライル「オーケーだ。フェイトちゃんと王様は離れていてくれ。いくぞ、ハルファス！」

ハルファスへ…了解、コードをロード。システム作動…ガンダムモード、起動」

目の前が真っ白になったと思ったら、俺はパイロットスーツを着てハルファスのコックピットの中にいた。

ライル「さあ…いくぜ！」

ハルファス「…了解、ハロ」

ハロへリヨウカイ！リヨウカイ！∨

グリップを握りしめ前に突き進む。全てが小さく見える中、俺は乱れ撃ちまくった。

ハルフアス「…敵影無し、全ての敵を破壊した模様」

ライル「敵の戦艦には…逃げられた、か」

全てを撃ち抜き終わったあと、レーダーで調べたがあの白い戦艦は跡形もなく消えていた。

ライル「……思っていた以上に、敵は手強いみたいだな」

破壊した敵の基地から煙が上がる。時刻は既に夕暮れで、俺はコックピットからその光景をただ、眺めていた。

?
side

? 「失敗したか…」

1人の男が遠くからでも見える基地から出る煙を眺める。

? 「まあ、いい。まだ始まってもないのだから」

そう呟いた男は踵を返し、そのままゲートの中に消えていった。

第14話 魔王降臨（後書き）

今回と前回に登場した作品と機体を載せます。

登場作品…機動戦士ガンダム

登場機体…ガンダム、ザク

パイロット…ガンダム：アムロ・レイ。ザク：ジオン一般兵

備考…ガンダムの方は皆さんご存じ、全てのガンダムの原点である初代ガンダムです。今作では魔王NANOHAに敗退しましたが再戦を約束してますのでまた出てくる可能性あり…？

ザクは今後も出てきます。主にやられ役ですが…。

登場作品…新機動世紀ガンダムX

登場機体…ガンダムベルフェゴール

パイロット…ニュータイプ

備考…今作では水晶を埋め込まれた女性がベルフェゴールになり、星光と雷刃を相手に互角の戦いを見せますが敗退。暴走気味にも関わらず奇抜な戦い方を繰り広げました。

登場作品…新機動戦士ガンダムW

登場機体…エアリーズ

パイロット…OZ一般兵、ルクレツァ・ノイン

備考…今作では敵航空戦力として登場。ザク同様にやられ役に…。
今後登場予定。

第15話 カウントダウン（前書き）

アレルヤとフェニックス、黒幕の話

第15話 カウントダウン

N O s i e d

閉じられた扉の奥深く、ジェネレーションシステム本体はある作業を実行していた。

システム《地球疑似コーティングシステムのデータを修復確認……：修復の終了を確認。続いて次元世界に現段階で存在するジェネレーションシステム端末を検索……：反応を確認。続いて現存しているモビルスーツデータを確認……：確認完了》

？「調子はどうだ？」

ソコに近づく男が1人。彼の身長は二メートルはあり髪は金髪の短髪、体は筋肉質、黒のインナーにズボン、黒革のロングコートにブーツと全身が黒づくめだった。おまけにサングラスまでかけているので表情がよくわからない。

システム《問題ありません》

？「そうか」

彼は数多くのモニターがあるデスクに備え付けてある椅子に腰掛け、背もたれに背を預け、肘掛けの片方に肘をかけ、その上に顎をおいてモニターを眺める。

？「……あの娘たちは何をしてる？」

システム《現在、フェニックスはハルファスに合流する為に行動中。ハルファスは時空管理局に接触しました》

男はその報告を黙して聞く。

？「ベルフェゴールはどうなった？」

システム《ガンダムベルフェゴールは素体No. 12846と共に管理局が回収した模様。ニューロシステムが破損しており、シグナルに対して反応しません》

？「ガンダムとホワイトベースは？」

システム《RX-78-2ガンダムは機体が大破。爆破する前にデータを別の機体に送信しており、現在はその機体との同期を実行中。ホワイトベースは現在待機中》

男は空いている手で机をコツ、コツ、と叩く。

？「アクセス、機密コード入力。番号#####」

システム《認証しました。何を実行、確認しますか？》

？「ワールド・ブレイク・システム（WBS）の進行状況を報告」

システム《WBS進行状況報告。現在99パーセントまで完了》

？「：残りの1パーセントは？」

システム《貴方の発動許可のみです》

男は報告を聞いて頷くと席を立ち上がり出口へと向かう。

システム《どちらへ？》

？「少し出てくる」

システム《お氣をつけて》

男は返事を返すこともなく部屋から出ていき、男を見送ったシステムはまた作業へと戻った。

アレルやside

アレルヤ「宇宙に？」

作業が終わり、テントを建て、焚き火のそばで夕食を食べていた僕にフェニックスは宇宙に上がると行ってきた。

フェニックス「はい。この世界について調べたのですが…地上ではゲートが発生させるのは困難だと判断したので宇宙に上がるべきだと判断しました」

フェニックスも食事をしながら説明してくれた。そうか…ソラに上がるか。

アレルヤ「でも、どうやってソラに上がるんだい？」

フェニックス「その為の装備を作りました。ソレを使ってソラに上がろうと思います」

フェニックスは食事を終わると立ち上がり、夜空を見上げる。

フェニックス「……………」

彼女が無言で星を眺める。少しの風で揺れる白い髪…焚き火の光が反射して、その姿はとても、とても綺麗だった。

アレルヤ「…フェニックス」

フェニックス「なんでしよう？ マスター」

フェニックスが星を見るのを止めて、僕の方に振り返る。…少しだけ、彼女から悲しげな雰囲気を感じる。

アレルヤ「いや…思ってたんだけど、もしかしてさ、その口調が本来の口調かい？」

フェニックス「え？ ……あ。いや、その…はい／＼」

少し戸惑い、頬を赤くしながらはにかんだ。

フェニックス「突っ張った言動だったのは…マスターの人柄をよく掴めていなかったものですから…。騙すような真似をして、すみませんでした」

ペコリ、と頭を下げるフェニックス。…素直な娘だよね、ほんと…。

アレルヤ「かまわないよ。…元の言動に戻ったのは僕の人柄がわかったからかい？」

フェニックス「はい。大まかにですが…マスターは優しい方だと、私の中で判断しました」

アレルヤ「僕は稀代の殺人者で、テロリストだよ？」

フェニックス「それはマスターの世界の判断です。いわば他人の評価であり、私の評価ではありませんから」

フェニックスは僕の隣に座り、僕の手を両手で包むと自分の胸にあてた。

フェニックス「この先、マスターには沢山の危機が降り注ぐと思います」

沢山の危機か…。30年前のソレスタルビーイングのミッションじゃ、それは日常茶飯事だったけど。

フェニックス「その時は…私が必ず守ります。私じゃ頼りないかもしれないけど…」

不安で潤む瞳で僕を見るフェニックス。…彼女も不安なのかもしれ

ない。異世界で妹と離ればなれになったんだから当然か…。

アレルヤ「…頼りにしてるよ、フェニックス。だけど…」

フェニックス「だけど？」

アレルヤ「僕のこと、頼ってほしい」

空いていた手で彼女の手を握り、目を合わせる。

アレルヤ「沢山の危機は、1人なら大変だけど2人なら乗り越えられるさ」

フェニックス「マスター…。わかりました。頼りにさせてもらいますね」

そう言って優しく微笑む彼女は、とても可愛かった。

アレルヤ「も、もう夜も遅いし、フェニックスは早く寝た方がいい」

フェニックス「わかりました。マスターはどうされますか？」

アレルヤ「念のためにもう少し起きてるよ。アストレイとセブンがいるとはいえ、何があるか分からないからね」

フェニックス「それだったら私が「いいから、明日は君が大変なんだから寝てくれないかな？」…ふう、わかりました。では、お言葉に甘えさせてもらいます」

僕が手を離すと彼女は立ち上がって…

フェニックス「おやすみなさい、マスター」

そう告げたあと、テントの中に入っていった。

彼女を見送った僕は立ち上がり、膝をついていたアストレイのコックピットからセブンを持ち出し、アストレイの背中に登って安定した場所に座って彼女が見ていた空を見上げる。

アレルヤ「……綺麗な夜空だ…」

セブン＜彼女を寝かせたのは照れ隠しかい？＞

セブンが表示する文章を見て、苦笑いしか出来なかった。

アレルヤ「あはは…。それもあるけどもうひとつ理由があるんだ。…出てきたら？ソコにいるのはわかってるよ？」

先程から感じていた気配に向かって話しかける。

…ヒュン！

奇妙な音と共に気配が消える。

ふう…消えてくれたか。フェニックスが気づかなかったから相手がどんなヤツかわからなかったけど…

アレルヤ「…：やっぱり、ただじゃいかないみたいだね」

セブン<…：そうみたいだな>

アストレイの側にある焚き火から立ち上る火の粉を見上げながら、夜空を見続けた。

フェニックス side

私が寝て数時間後、マスターにも休んでもらう為に見張りを交代した。

フェニックス「…ふう…おいしい…」

セブン＜むう：私も飲んでみたいものだ＞

簡易イスに座り、セブンを話し相手にコーヒーを飲む。

夜が明けるか、明けないか：そんな時間帯。穏やかな空気な中に嫌な気配を感じて私は立ち上がる。

フェニックス「まさか：ヤツが？」

セブン＜どうかしたかね？＞

フェニックス「嫌な感じがするの：」

セブンの質問に答えながら自分のセンサーで辺りを探る。近くにジャンク屋のテントが幾つかとモビルスーツ、それから：

フェニックス「：いた」

少し離れているけど、ヤツの反応に間違いない。：間違える訳がない。

フェニックス「セブン：マスターを頼みます」

セブン＜：訳ありか。了解した＞

セブンをアストレイのコックピットに戻すと、私は反応のある方角へと飛ぶ。

多少の距離はあったけれど、飛べばその距離は一瞬だった。

ヤツの姿を確認した私は少し離れた場所に着地する。ヤツは海を眺めていて、私に背を向けていた。

フェニックス「……なぜ…ここにいるの？」

？「……久しぶりの再会というのに、辛辣だな。フェニックス」

ヤツは黒いコートを翻し、振り返るとサングラスを外して呆れた表情で私を見る。

フェニックス「辛辣にもなります。私がアナタをどう思っているかは知っているでしょう？」

粒子変換していたビームライフルを手握りしめるとヤツに向けて引き金を引く。

ビシュン！ビシュン！

バチン！バチン！

撃ったビームがヤツのコートにはじかれて霧散する。

アンチビームコートを着込むなんて…私の行動は予測済みということ？

？「せっかちだぞ、フェニックス」

フェニックス「せっかちにもなります。アナタを倒せば全てが丸く収まりますから」

ライフルを向けたまま、私は会話を続ける。

？「ハルファスは元気かい？風邪をひいたりしてないかい？」

フェニックス「…ええ、元気ですよ。アナタが側にいませんから」

？「つれないなあ…。あの娘は昔から身体が弱い娘だったからね、心配なんだよ」

フェニックス「ご冗談を…。風邪なんかひかない…いや、ひけない身体にしたアナタが何を言うのか…」

？「それでも心配なのだよ。ハルファスはもちろん、君もだよ、フェニックス」

フェニックス「…ご冗談を…。ゲート内で私を撃っておきながらよく言えたものですね？」

？「おや、ばれていたか。かなり遠距離から撃ったのだがね」

ヤツは肩をすくめながらやれやれ…と首を振る。

フェニックス「言い残す事はそれだけですか？」

次はビームサーベルを握りしめる。直接切り裂けばアンチビームコートでも何とかなるはず…

？「いや、実は言いたい事はまだあってね…ダブリュービーエスWBSが完成したよ」

フェニックス「排除します！」

WBS：その言葉が耳に入った瞬間、私は一瞬の隙もなくヤツを切り裂いたはずだったがビームサーベルは空を斬った。

？「やれやれ…話は最後まで聞くものだ」

フェニックス「アナタは！」

後ろに移動したヤツに向き直り、ビームサーベルを突きつける。

フェニックス「アナタはわかっているの！？WBSは世界と、次元

と、時間の有り様を根底から崩すモノ！そんな事をすれば、またあの大戦が起きる！」

？「それこそが私の望むモノだ……。世界は幾つもない。争いを好む人類もいない。過ぎ去る時間もいない。私が欲しいのは……永久にして永遠の楽園だ。その為には、人類を一掃するにも、あの大戦は必要なのだよ」

フェニックス「黙れ！！」

その場からヤツに駆けてビームサーベルを振るう。上から下へ、下から右上、右上から左へ……何度も何度も振るうが、ヤツはヒラリヒラリとかわしていく。

？「激情に任せた剣は当たらないよ？」

フェニックス「うるさい！アナタは、アナタだけは！！」

ブン！、と思い切り振り下ろしたビームサーベルはヤツを切らずに地面を切った。

フェニックス「はあ、はあ、はあ……」

？「少しは落ち着いたかな？」

ヤツは息を乱してもいなかった。…コレが、スペックの差なの？

？「今の“その状態”の身体では私はおろか、ハルファスにもかなわないだろうに」

フェニックス「はあ、はあ…うるさい！ファンネル！！」

パパパシュ！

ビームサーベルを振り回していた間に密かにばらまいておいたファンネルで攻撃する。

？「ふむ、いい手段だ。私には無意味だが」

フェニックス（…ファンネルもかわすなんて）

ランダムに射撃するファンネルのビームは見事に避けられる。

…駄目だ…かなわない…！

？「とりあえず、伝えるべき事は伝えた。ちなみにWBSは数日後には発動させる。日々を気をつけて生きてまえ。また会った時は、ハルファスと一緒に私のもとに戻って来てくれる事を祈るよ……さ

ようなら」

フェニックス「待ちなさい！！！」

ヤツはそれだけ告げるとゲートを展開、その中に消えていった。

フェニックス「くっ…！…はあ…」

夜が明けて、太陽の光が見え始めた。私は武装を全てしまい、海からの風をただ受け止める。

フェニックス「…今は無理でも、手段はあるはず。諦めない…絶対に」

揺るがぬ決意を言葉にして、私はその場から飛び立ちマスターの元へ帰った。

レントside

レント「……………ふう…やはり、といったところか」

フェニックスが飛び立つのを確認して私は物陰から出る。

実はフェニックスが飛び立つのを偶然にもレントの隙間から見かけた私はこっそり彼女を尾行、彼女と謎の男との会話を途切れ途切れだが聞いていた。

レント「どうやら敵の大將はあの男とみて間違いないが…」

フェニックスとの関係はどうなんだ？それにフェニックスはヤツを攻撃していたがヤツはよけるだけ。そして一番気になるのが…

レント「WBS…次元、世界、時間の根底を破壊するモノか…」

随分と物騒なものだ。しかも数日中に発動させると言っていたな。

レント「…聞くべきか？彼女に…」

だが、聞いてどうなる？あと数日しかないのに今さら足掻いてもどうしようもない。

…幸いにも兄弟二人は眠っていて話を聞いていない。ならば…

レント「兄弟二人にも黙っておくか。必要なら彼女が話すだろうし、

何か策があるから男が去った後でも落ち着いていたのだろうか……」

…長居してもしょうがない。とりあえず帰るとしよう。

レント「はあ…しばらくは様子見だな」

水平線から覗く太陽を浴びながら、転移魔法を発動。その場から去った。

第15話 カウントダウン（後書き）

さて、今回の紹介。

登場作品…機動戦士ガンダムSEED

登場機体…M1アストレイ

パイロット…オーブ国防軍一般パイロット

備考…オーブが開発した量産型モビルスーツ。これの前身はアストレイ・レッドフレームや地球連合のXナンバー（ストライク等）でそれらを簡易化、量産を重視したのがM1アストレイである。

本作品では中破していたアストレイをM1アストレイの派生機であるレイスタのパーツを使い動かせるようにしてある。

OSに関してはコンピュータのセブンがアレルや用に組み直したので従来よりスムーズに動かせる。

***番外* FG研究開発室（前書き）**

やっちゃまった感がありありとある番外編です。

番外 FG研究開発室

ハル―トSide

ハル―ト「こんにちは―」

今日、私はFG研究開発室に呼ばれて開発室に赴いた。

? 「ハロー、ハル―ト」

ハル―ト「あ、紅莉須さん。ハロー」

私を出迎えてくれたのは牧瀬紅莉須^{まきせ くりす}さん。この開発室で1番の頭腦の持ち主で赤みがかった長い髪が綺麗な女性だ。

? 「トゥットウルー! こんにちは、ハルちゃん!」

ハル―ト「まゆりさん。トゥットウルー!」

彼女は椎名まゆり(しいな まゆり)さん。ぽわぽわとした人だけど、よく周りを観察していて、ときどき鋭い事を言う人だ。

ハルート「あれ？室長とダルさんは？」

室内は紅莉須さんとまゆりさんの二人しかいなかった。いつもは室長とダルさん、他にも開発スタッフの人がいるのに：

紅莉須「ああ：みんなはアイツと一緒に新しい実験だとか言ってるかに行っちゃったわよ」

呆れ顔で椅子に座ってコーヒーを飲む紅莉須さん。疲れているのか、眠そうだ。

ハルート「え、まだですか？」

まゆり「オカリンは実験好きだからねえ。あ、ハルちゃんはココアでよかったかなあ？」

ハルート「あ、ありがとうございます」

私とまゆりさんもソファに座ってココアを飲む。ちなみに、まゆりさんは私の事をハルちゃんと呼ぶ。マルートの事は：いや、言わないでおこう。

ハルート「そういえば、今日はどんな用件で私は呼ばれたんですか？」

紅莉須「それなんだけど…実はGNデバイスのテストをやって貰いたかったのよ。けどあのバカがそのGNデバイスを実験する!…とか言って持ってたのよ」

ハルート「あはは…室長らしいですね」

紅莉須「まったく…帰ってきたら説教しなきゃ…」

その後も談笑をする私達。いつもだけど、ゆっくりとした空間だね、この開発室は…。

？「あつっ…ただいま戻ったお」

まゆり「ダルくんお帰り」

汗をタオルで拭きながら入って来たのはダルさん。名前は橋田^{はしだ}至^{いたる}さんで室長の右腕にしてスーパーハカーだ。

ダル「ハカーじゃなくてハッカーな」

まゆり「?、ダルくん、オカリンは？」

ダル「オカリン? オカリンなら直ぐに「ラボメン諸君!! 室長のお

帰りだぞ!!」…帰ってきたお」

ぶわあさ!!、と白衣をたなびかせて決めポーズをつけながら部屋に入って来た男性がここの室長で、名前を…

ハルト「あ、岡部さん。おじゃましてます」

岡部「ちっつがああう!!俺の名前は鳳凰院凶真だ!!」
ほうおういん きょうま

紅莉須「はいはい、厨二病乙」

鳳凰院凶真と言っていたけれど、彼の本当の名前は岡部倫太郎おかべ りんたろうというって、この開発室の室長なのだ。仲間思いで優しい人だけど…少し変な人でもある。

紅莉須「それで?持ち出したGNデバイスの出来栄は?」

倫太郎「フツ…さすがは我が助手。言うまでもなく、最高の出来だ!!」

紅莉須「そう。ハルト、ごめんなさいね。用事が無くなってしまったわ」

ハルト「いえ、お気になさらず」

倫太郎「ん?そこにいるのはダブル・フェイスこと、ハルトでは

ないか!どうしているのだ?」

ダブル・フェイスとは…岡部さんが私とマルートの二重人格を知った時につけた二つ名だ。…アレルヤ達だったらトリプル・フェイスになるのかな?

紅莉須「あんたがテストしたそのGNデバイス…本当は彼女にやつてもらった予定だったから呼んでたのよ。けどあんたが話も聞かずに終わらせたから彼女にむだ足をさせてしまったわけ。オーケー?」

倫太郎「む?そうだったのか。すまないな、ハルート」

ハルート「いえ、無事に終わったならなによりです」

倫太郎「ふむ……。お、そういえばダル、アレが完成していたはずだよな?」

ダル「アレ?……おお!アレか!」

ダルさんが自分のデスクでカタカタとキーボードを叩く。…アレとは、なんだろう?

ダル「じゃじゃ〜ん!完成しました!GNシザービットの改良型、その名もシザービット、バージョン1・25!」

ハルート「え!?完成したんだ!」

壁の一部がスライドして開発室があらわになる。この部屋は奥に開発室、手前が事務所みたいになっていて開発室は普段は閉じられたままなのだ。

ハルート「これが、改良型シザービット…」

ダル「違う違う、シザービットバージョン1・25ね」

ダルさんの意見が耳に入らないほど、私はそれに見入っていた。

シザービットは本来の機能を阻害することなく、サーベルファングの機能を付け足すことで挟み切る他に突き刺す、切り裂くが出来るようになったのだ。

ダル「ほんじゃ、ハルワタートとアムルタートに組み込むから貸してちょ」

ハルート「はい、お願いします！」

ダルさんにデバイスを預けると彼はソレをケースに入れてパソコンで作業を始めた。

倫太郎「なあ、ダル…。毎回思うのだが、そのネーミングはどうかと思うぞ」

ダル「オカリンは人の事を言えないと思うけど？」

紅莉須「はいはい、名前は使う人が決めるから、あんた達はさっさと次の開発を進めなさい」

まゆり「よかったね、ハルちゃん」

ハルート「はい！みなさん、ありがとうございます！」

私がみんなにお礼を言うと、みんなは微笑んでいました。

倫太郎「なに：この俺、狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真にかかれば造作もないことよ！フウーツハハハハハ！！」

ダル「作ったのは僕なのにオカリンがえらそうな件について」

紅莉須「岡部がえらそうにしているのは何時もの事だろうが」

ダル「さすがオカリン、そこにシビれる「憧れないけどね」：牧瀬氏、容赦ないお」

ここの人達は本当、いつも賑やかだ。見ているこっちまで楽しくなってくる。

紅莉須「ほら、さっさと次の開発と実験をするわよ」

倫太郎「ええい！助手！勝手に仕切るな！」

紅莉須「はいはい、さっさとしましょ」

？「おっつゝ！相変わらず夫婦漫才してるね、二人とも」

倫太郎・紅莉須「誰が夫婦か！！！」

？「……息、ピッタリ……」

新たに部屋に入ってきた二人の女性、名前は…

ハルト「お疲れ様です。鈴さん、萌郁さん」

鈴羽「ハルトじゃん！おっつゝ！」

まず一人目、あまね すずは天間音鈴羽さん。横髪を三つ編みにした元気な人で運動神経抜群の人だ。

萌郁「……………お疲れ」

こっちはきりゆう もえか桐生萌郁さん。ウェーブのきいた長い髪に女性にしては高い身長、そしてナイスバディの人だ。ただし…あまり喋らない人で基本は無口だ。

鈴羽「あ、室長。さっき連絡があったんだけどディランデイさんが連絡よこせだって」

倫太郎「ニールが？わかった、連絡してみよう」

萌郁「……………牧瀬さん、コレ、頼まれてたモノ…合ってる？」

紅莉須「ありがとう、萌郁さん。……………大丈夫、合ってるわ」

ダルさんが調整しているハルワタートとマルートのアムルタートが出来上がるまで、忙しく働き始めた彼らを見続ける。
活気あって明るい職場はそうそうないから私は此处が好きだ。

ダル「ハルートちゃん。はい、出来たお」

ハルート「ありがとう、ダルさん」

席を立ててダルさんからハルワタートを受け取り、空間モニターでデータを見る。見た目は変わってないけど、中身はしっかり変わっていた。

ハルート「それじゃ、私はこれで失礼しますね」

岡部「ん？そうか、暇が出来たらまた来るといい」

ハルート「はい。では、失礼します」

一礼して部屋を出る。

ハルート「さあて…今日はこれからどうしようかな」

そんな事を考えながら廊下を歩いていると、ピーピーと通信を知らせる音になった。

ハルート「はい、ハルートです…どちら様です？」

その通信は、これから始まる戦いの合図だったのを後の私は知った。

***番外* F G 研究開発室（後書き）**

コレの元ネタわかる人はいると思いたい。

ちなみにF G 研究開発室は本編にも出す予定です。

第16話 抗う為に（前書き）

今回はライル・ハルファスのお話

第16話 抗う為に

ライルside

敵の基地を破壊した後、俺はハルファスと一緒に八神さん達が乗ってきたプトレマイオス級一番艦“アリエス”に乗り込み、今は次元空間を管理局本局に向けて移動中だ。

本局につくまでに今回の事件の情報整理も兼ねてみんなでブリーフイングルームに集合、話し合いを開始した。

ライル「そんじゃなにか？死人が生き返って、ガンダムになって、攻撃してきて、倒したらまた死んだのか？」

フェイト「星光と雷刃の話聞く限り、大まかに言えばそうかな」

なのは「ただ、医務官の話だとその女性は今は仮死状態で完全に死んではないみたい」

はやて「それと、女性は身体は人間そのものや。ただ一部：胸に水晶があること以外はな」

会議室でモニターを見ながら説明を受ける。この場には俺、八神さん、高町さん、フェイトちゃん、カイゼルの部隊員のチームリーダーの四人だ。

キャスター1「それにしても…今回の敵は新たなガンダム、しかもGNドライブも積んでないのに稼働するモノとはね…」

アーチャー1「ソレと直接戦闘をしたセイバーチームがほぼ全滅したのは痛いな」

アサシン1「セイバー1は重体、セイバー2は殉職、残りのセイバー達も暫くは動けない」

ランサー1「ま…いねえなら、いねえなりの対処はすっけどな」

一通りの意見が終わり、室内がシン…と静かになる。

はやて「さて…現状の確認は終わった。次はライルさんから説明してもらおうか？」

フェイト「どうしてこの世界に戻ってきたのか。そしてあの女の子…ハルファスはいったい…?」

やっぱり聞かれるか。デバイスモードだけならなんとも言えただ、モビルスーツ形態になっちゃったからな。

ライル「カイゼルと合流したらすぐに説明する方が楽なんだが…」

カイゼル『心配ない、私との通信なら繋がっている』

モニターの脇にカイゼルの顔が映る。その顔は、ELSと人類との大戦で散ったソル・グレイヴ隊の隊長さんと同じ顔だ。

違いは顔の傷が無いくらいだし、こっちじゃ三年、俺等は三十年だ。そりゃ変わんないよな。

ライル「…オーライ。わかった、話すよ。…ただ、俺も全部を知る訳じゃないからな、その辺よろしく」

そして、俺はここまでの経緯とハルファスから聞いた話を話す。

ジェネレーションシステムの存在、その目的。ハルファスとお姉さんの力…二人が打倒ジェネレーションシステムの目的も話す。

はやて「…なるほどな。理解したわ」

なのは「相変わらず何かと巻き込まれやすいよね、アレルヤとライルさんは…」

ライル「その意見には賛成だ」

肩をすくめて高町さんの意見に同意する。

カイゼル『…既に被害が出ている以上、事態は深刻だな』

ライル「ああ：早く対策をとらないと、ただでさえ後手にまわってるんだ。さらに遅れたら目もあてられないぞ」

カイゼル『わかっている。既に今回のように管理局の監視システムが通用していない世界が無いか調べている』

ニール『それについてはだいぶ絞れてるぜ、カイゼル』

ライル「お、兄さん。元気そうだな」

ニール『お前もな、ライル』

別のモニターに映るのは右目に眼帯をしたニール・ディランディ：兄さんだった。

：二度と会えないと思っていた者同士にしては軽い挨拶だが、双子のせいかお互い何か通じるから別に言葉にしなくてもいいんだよな。

ライル（あ、そういえば今じゃ俺の方が歳上なんだよな…）

なんか複雑な心境だな。兄さんより弟の俺が歳上なもの。

カイゼル『仕事が早かったな。助かる』

ニール『それはドゥーエとウーノに言ってやってくれ。急ピッチでやってくれたんだからな。それじゃ、見てくれ』

そして表示される文字の羅列。：俺が見てもよく分からないな。

ライル「これは？」

ニール『今現在、管理局が掌握している世界だ。ただカイゼルの改革のおかげで無人世界とか、無害な管理外世界は省かれているがな』
フェイト「それでもこれだけあるんだよ」

はやて「そりゃ管理局が万年人手不足にもなるわ」

ニール『んで、今から赤く表示するヤツが今回の事件と同じで管理局の管理システムがうまく作動していない世界だ。これに関しては管理システムがハッキングを受けていたことが判明している』

画面いっぱい文字の羅列の三分の一が赤くなる。

アーチャー「チッ：既にかなりやられているのか」

キャスター「何時からこうなっていたかは分からないけれど、流石に侵功されすぎね」

ランサー「で、隊長はどうお考えで？」

カイゼル『…F G 研究開発室や各生産ラインにはG N・Dの開発と

ジnkクス・フイアの量産を命令した。現在は急ピッチで作業中だ』

ジnkクス・フイア？ GN・D？…所々で聞き覚えがある言葉が耳に入る。

カイゼル『だがその為には君たちの戦闘データが必要になる。君たちはこのまま本局に帰還、事後の指示は追って通達する。…質問は？』

全員が沈黙する。つまりは質問は無しだ。

カイゼル『では、本局で帰りを待っている。あと、ライル』

ライル「ん？なんだ？」

カイゼル『リターナーさんには知らせておくか？どうする？』

そうやって聞いてくる、ということは…まだアニューには知らせていないんだな。

ライル「……直接会いにくさ」

カイゼル『わかった。彼女は今は本局で働いているから、君らが帰還したらソコに案内させよう』

ライル「サンキュー、助かるぜ」

そして会議が終わり、俺はハルファスがいる場所…格納庫に向かう事にした。

ハルファス side

<…ひま…>

マスターの仲間の艦に乗った私は格納庫にいた。
私は一度ガンダムモードになると1日は経たないと人間モードに戻れない。

ハルファス（…お姉ちゃんは数時間で戻れるのにな…）

…私があんまり慣れてないからだけど。
格納庫には人がいなくて、とても静かで、つまらなかった。

ライル「ハルファス、調子はどうだ？」

静かな格納庫にマスターの声が響く。顔を向けるとマスターは少し驚いて、すぐに笑顔になった。

ライル「二回目とはいえ、その姿もハルファスなんだと思うと驚くな」

ガンダムモードの私の胸の辺りにある可動橋から私に飛び乗ると顔の横に来てその場に座った。

ハルファス<…この姿は、あんまり好きじゃない…>

ライル「そうか？まあハルファスも女の子だし、格好いいよりは可愛い方がいいか」

ハルファス<…うん…それもある>

ライル「他にもあるのか？」

マスターが興味深く私を見てくる。…この姿じゃ、マスターの近くにいけない、と言いたいけど…

ハルファス<…ないしょ…>

恥ずかしいから秘密にしておく事にした。

ライル「そうか…、そうだな。秘密が一つ二つあったほうが魅力的な女に見えるしな」

ハルフアス<…魅力的…?>

ライル「いい女、てことさ」

いい女…大人の女性、て意味かな?

ハルフアス<…私は、いい女…?>

ライル「今は子供だけど、あと何年かしたら美人は間違いないな。俺の勘がそういってる」

ハルフアス<…マスターは…>

ライル「ん?」

ハルフアス<…マスターは、私が大人になっても一緒にいてくれる…?>

ライル「…ああ、いるさ。ハルフアスは俺にとっては自分の娘みたいな存在なんだからな」

自分の娘…ならマスターはお父様、になるのかな？

ハルフアス<…マスターは、私のお父様になるの？>

ライル「ん…そうなるな。ハルフアスが俺が父親でもいいと言ってくれるならだけど」

私のお父様なら、お姉ちゃんのお父様にもなるから…お姉ちゃんに聞かなくちゃ。

ハルフアス<…お姉ちゃんに聞いてからでも、いい？>

ライル「ああ、いいぜ」

その後は私が休むまでマスターと話をした。

…お姉ちゃんがお父様の事をダメ、て言わないように説得しなくちゃ…

カイゼル side

通信を終え、執務机から離れてソファに座る。

カイゼル「……………ジュネレーション・システムか」

世界に破滅をもたらすシステム。その脅威は既に一般人にまで及んでいる。

カイゼル「全てが上手くいくとは思っていなかったが…」

管理局改革を始めてから約三年、やっと管理局内部が円滑に稼働し始めた矢先に問題発生とは、ついてない。

カイゼル「嘆いていても仕方ない。打てる対策を打たないと…」

どうする？ 対策部隊…三年前の機動六課のような部隊を立ち上げるべきか？

カイゼル「いや、戦力が一ヶ所に集まれば別々の場所で攻撃を受けた場合に対処が遅れるか」

：いや、待てよ？エースクラスの高町なのは、八神はやて、フェイト・T・ハラオウンの三人は星光の殲滅者、闇統べる王、雷刃の襲撃者という同等の三人がいる。

カイゼル「二つ部隊を作れるな」

片方は元の機動六課メンバー、もう片方は闇の三人を主軸としたメンバーでいくか。

カイゼル「だとすれば…メンバーを決めないとな。最高責任者をニールとヨハンに頼んで、後は部隊長は八神と王にして…」

こうして数時間後、提案だけが機動六課と機動七課の設立案が組み上がった。

第16話 抗う為に（後書き）

機動六課の再編、機動七課の設立フラグ。

機動七課のメンバーは…まあ、お楽しみに。

ライルに父親フラグ。まあ、ハルファスに恋愛はちと早いかな。

今回は登場機体無し。次回は…おそらくアレルヤの話かな。

第17話 振り切れない思い（前書き）

今回はアレルヤ、フェニックス、？のお話。

ある人のファンには少しショックな内容有りなので注意

第17話 振り切れない思い

アレルヤside

アレルヤ「はっ！ふっ！せいっ！」

この世界に来てからの数回目の朝、目が覚めた僕はレントに頼んで魔法剣を二振りほど出してもらい、訓練をしていた。

アレルヤ「はああ！！」

最後の一撃を振り下ろし、僕はその場に止まる。

アレルヤ「……………ふう、こんなものか」

構えを解いて剣を地面に刺すと剣が霧散していく。

この訓練は30年前から繰り返してきた。レントが剣を使うから鍛えておきたいと言ってきたのがきっかけで、今じゃ日課になってる。

アレルヤ「もうこんな時間か」

水平線の向こうから見えていた半分の太陽は既に登りきっていた。

アレルヤ「……………」

どの世界でも変わらない。昨日があり、今日がある。明日は…明日があるか無いかはその人次第だ。

彼女には…明日が訪れなかったけれど

アレルヤ「ふう…いい加減、振り切らないとね…」

自分が未練がましい男なのはずっと前からだけど…本当に、割り切らないと。

アレルヤ「…」

崩れている建物を見ると、今でも思い出す。あの日の光景を

崩れ落ち、燃え盛る建物

混乱して逃げ回る人々

倒れた彼女

彼女を抱き抱える僕

その日は、僕にとって最悪の日となった。

〈回想〉

アレルヤ「マリー！マリーー！ー！！」

僕は人混みの流れに逆らって進む。

アレルヤ「なんでこんな時に…！！」

買い物の為にマリーと別れて、そろそろ合流する時間になったので待ち合わせ場所に向かう途中、爆発音と地鳴りが辺りに広がった。

しかも、それはマリーが向かった方向からだ。

アレルヤ「すみません！通して下さい！！」

人混みを掻き分け、やっと現場の近くに来た時には初動が早かったレスキューや消防、警察や救急が必死に現場を走り回っていた。

おい！その人はもう…！コッチに来てくれ！

コッチに人が埋まってる！手伝ってくれ！

重症だ！意識もない、病院へ早く！

痛い！痛いいいい！

お願いよ！！うちの子を助けて！

お、俺の腕が……！！

阿鼻叫喚、地獄絵図、とは今みたいな状況なんだろう。

アレルヤ「マリー！マリーいいー！！」

僕はただ叫ぶ。彼女の返事を、声を、姿を求めて叫ぶ。

アレルヤ「っ！脳量子波……！？……そっちか！！」

変革が広がる世界だけど、その中にマリーの脳量子波を感じ、僕は走った。

アレルヤ「そんな……！」

そこにたどり着いた僕は、愕然とした。

救急隊員「脈が弱い！ストレッチャー急いで！」

マリー「……」

そこには、救急隊員に抱えられたマリーが力無く腕をブラリ、と垂らしていた。

アレルヤ「マリー……！！」

僕は無我夢中で彼女に駆け寄る。

救急隊員「身内の方ですか！？今は…「……話をさせて」！？…意識が！」

マリー「私は…いいから…他の方の…所へ…」

アレルヤ「駄目だ！治療を受けないと！！」

マリー「私は…軍人でも、あつたのよ…？自分の体は…よく分かるの…」

救急隊員「くそっ！私がストレッチャーを持って来ます！その間、貴方が彼女を見ていて下さい！すぐに戻りますから！！」

そう告げて、救急隊員の人は僕にマリーを預けると走って車の方へ向かっていった。

マリー「アレルヤ…コホッ！ゴホッ！！」

アレルヤ「マリー！喋っちゃ駄目だ！！」

マリーの口から血が流れる。彼女は血を吐き捨て、弱々しく微笑む。

マリー「いいの…。私は、ここまで…みたい…」

アレルヤ「そんな事…!!」

そんな事ないと、言えたら良かった。でも、今までの経験が僕の言葉を止めてしまった。

マリ―「アレルヤ…初めて、貴方と会えたあの日から今日まで、沢山の事があつたわね…」

アレルヤ「…ああ、そうだね…」

マリ―は自分の死を悟って、死にかけの身体で言葉を紡ぐ。

マリ―「敵として戦って…」

アレルヤ「そして、味方になってくれた」

マリ―「貴方は、私を戦わせないように、一生懸命だった…」

アレルヤ「けど結局、戦おうとするソーマに僕が折れて、共に戦って…」

手を握りあい、懐かしい日々を語り合う。
…別れを、惜しむように。

マリー「……アレルヤ……」

アレルヤ「なんだい？マリー」

マリー「…ありがとう。私に、生き甲斐を、くれて…」

アレルヤ「だったら、僕もありがとうだよ。君は僕に名前と存在する意味を与えてくれた」

マリーの手の力が弱くなっていく。周囲の喧騒は、聞こえなかった。

マリー「…アレルヤ…大好きよ………」

アレルヤ「僕も、大好き、だよ…」

マリー「…さ…よ…な……ら……」

別れの言葉。それと同時に、マリーの手の力が完全に抜け、僕の手をすり抜けて地面に落ちた。

アレルヤ「マリー！？目を開けて！！マリー！マリー…！っう、くっ、うあああああああああ！！！！」

必死に呼び掛けたけど、マリーが起きる事は無かった。
その日、マリー・ハプティズムはその人生に幕を下ろした。

後日、マリーを巻き込んだテロ事件は変革した人類“イノベーター”をよしとしない集団による自爆テロと判明した。

（回想終了）

…あの後の事はよく覚えていない。

ライルに聞いた話では、僕たちを心配して駆けつけたソレスタルビーイングのメンバーに保護されて、秘密拠点まで運ばれたらしい。マリーの墓碑と埋葬は、スミルノフ大佐の隣にさせて貰った。

その方が、マリーが喜ぶと思ったから。

それから数ヶ月後…僕は、なのは達の世界へ行く手段を探し始めた。…マリーのいない世界から、逃げ出したかったから。マリーのいない世界と、僕は向き合う事が、出来ないから。

アレルヤ「……………はぁ…」

…最低な男だ、僕は。

マリーが死んで、納得出来ないからと言って別世界へ逃げ出す道を選んだのだから。

フェニックス「マスター？」

後ろから声をかけられ、振り返るとフェニックスが不思議そうに僕を見ていた。

アレルヤ「どうかしたのかい？」

フェニックス「ソラへ上がる為の準備が出来たのですけど…」

アレルヤ「わかった。ならギルドの人達にお礼とお別れを言うてるよ」

フェニックス「わかりました。お待ちしますね」

フェニックスをその場に残して僕はその場を離れた。

フェニックス side

フェニックス「……………」

ギルドに向かうマスターの背中を、私は黙って見届ける。

フェニックス「…貴方は、いえ、貴方も、大切な何かを失った事があるんですね…」

さっきマスターは、何処か上の空で、私は声をかけるのを躊躇った。そして彼の悲しげな顔を思い出すと、私の胸を締め付ける。これが友情か、良心か、愛情か…。

私には分らない。

フェニックス「……こんな考え、持っていてもしょうがないのに…」

マスター、アレルヤは優しい人だと思う。

今までハルファスと二人だけで、私はハルファスを守る為に自分は強いと、そういう態度を振る舞った。

アイツから逃げる決意をした時も本当は怖かった。

けど、ハルファスの前で泣き言を言う訳にはいかなかった。

だけど今は…その妹が、ハルファスがいらない。

フェニックス「…気が緩んでるせいね」

強がる必要がないからだろう……そう思う事にした。
そう思わなければ、私は、彼に……。

フェニックス「…はあ!!」

バガアン!!!

近くにあった瓦礫に拳を打ち付け、コンクリートを粉砕する。

フェニックス「ソレが! 気の迷いだというのよ!!!」

思い浮かんだ言葉を振り切るように、私は声を張り上げる。

この身体は、既に人ではない!!

その証拠にコンクリートを素手で粉砕しても手に傷の一つもつかないじゃないか!!

ならば、余計な感情は捨てろ!!

自身の望みの為に己の心を殺せ!!

他者を利用し、障害を、敵を葬れ!!

そう! 全ては!!

フェニックス「ヤツを殺して、ハルファスを幸せにする為に………
！！」

揺るぎそうになる自分の心と思考を憎み、それを空の彼方に追いや
るように顔を天に向け、自分に言い聞かせた。

? side

? 「なに? 離反するヤツがいるだろ?」

フェニックスと再開した後、ジェネレーション・システムの元に帰
ってきた私はシステムからの報告に耳を疑う。

システム<YES。ザクなどの量産機は問題ないのですがガンダム
タイプの機体の幾つかがジェネレーション・システムの管理下を外
れました>

コートを椅子にかけ、私は幾つかの空間モニターを展開しキーボー
ドを打つ。

？「原因は？」

システム＜考えられる原因は二つあります。一つはガンダムタイプは様々な世界の中でエースがその機体を操り、敗ける事は少なく、数多くの勝利を経験してきた…いわゆる『曰く付き』の機体のせいかと＞

？「機械なのに曰く付きか。可能性は無いと思うが…」

システム＜もう一つはガンダムタイプは実験段階、実戦配備も含めてほとんどが人間を素体にしています。それ等は全てニューロ・クリスタルにより全て私が制御していますが、何らかのショックで人間としての理性を取り戻した可能性もあります＞

？「そちらの方が可能性としては高いな」

キーボードを打ち終えると離反したと思われるガンダムの一覧が出てくる。

？「…：曰く付き、か」

確かに、離反した機体を見ればそう思えるのも仕方ないのかもしれない。

特に私の強いパイロットが操っていた機体ばかりだからだ。

？「離反した機体の行動は追跡できるか？」

システム＜NO。ニューロ・クリスタルからの信号を探知できません。無論、こちらからの干渉にも反応はありません＞

？「つまり、ガンダムの力を持った人間になったというわけか」

システム＜YES。対応はどうされますか？＞

：入念に事は進めてきたが、やはり上手くいかないのは世の常か。

？「離反した機体に関しては搜索はしない。ただし発見次第、確実に破壊しろ。戦力の出し惜しみはなくていい」

システム＜YES。了解しました＞

全てのモニターを消し、私は椅子に座り足を組み、これからどうするか考える。：ハルファスに会いに行こうか、とも思ったがフェニックスがハルファスの記憶に干渉しているせいで私に会っても私の事が分からないだろう。

？「…儘ならないものだ…」

ハルファスと会えば最悪の印象しか残らんか。
なら、今は計画をより良くするために時間を使うとしよう。数日後

に世界がひっくり返るのだから。

その後の未来を想像しながら私は再びキーボードを打つ事にした。

第17話 振り切れない思い（後書き）

今回も登場機体はなし。

次回はスバル達の話の予定。

第18話 出会う者たち（前書き）

今回はスバル、エリオ、シグナムが登場

第18話 出会う者たち

スバル side

スバル 「んゝ…！はあ、今日も疲れたゝ！！」

救助隊の訓練を終えて、私は荷物を持って隊舎を出る。

明日はシフトに入っていない、つまり休みだから家に帰れるのだ。

スバル 「それにしても…最近は何騒な事件が多いなあ…」

ティアは変なガンダムに襲われたし、ミッドではストリートファイ
トで覇王を名乗る人がいるみたいだし。

スバル 「どうして平和にならないかなあ…」

カイゼルさんを筆頭に、沢山の人が平和な暮らしが出来るようにみ
んな頑張ってるのに…。

？< どうして平和にならないか…知りたいか？>

スバル「誰!？」

すぐにファイティングポーズをとり、辺りを警戒する。
此処は住宅街だけど、ティアも同じ住宅街で襲われた。

?<何処を見ておる!! 貴様の目は節穴かああ!!>
バツーン!!

スバル「~~~~っ?!?!？」

強烈な音と痛みが背中から伝わり、その場で転げ回る。

スバル「いっつ~~~~!いきなり何するの!？」

私の背中をぶっ叩いたヤツの顔を見てやろうと睨み付けようとして…

スバル「……………は？」

そのまま固まってしまった。

?<たわけ!>

バチン！！

スバル「いっくっくっ！？」

次はデコピンを食らわされた。尋常じゃない痛みと威力のせいで頭がクラクラする。

？＜敵を前にして呆けるとは何事か！！まったく…こんな小娘がワシの相手とは、ワシの運も落ちたものよ＞

スバル「痛たた…な、なんでガンダムが…！」

膝をついたまま、相手を見上げる。その顔はまさしくガンダム。だけれど…

スバル「…アナタみたいなガンダム、私は知らない…！」

ティアと同じ、ガンダムの襲撃と判断した私はマッハキャリバーを起動しようとして…

？＜止めておけ＞

その場で動きを止めた…いや、止めざるえなかった。相手の手刀が

私の首に寸止めされたから。

？<フン、案外と冷静か>

スバル「……っは！はあっはあっ……！」

ゆっくりと手刀が離れ、私はいつの間にか止めていた呼吸をする。

スバル（み、見えなかった……相手の動きが……）

……圧倒されていた。力の違いをまざまざと見せつけられ、私は挫けそうになった。

私の敗けは免れない。

スバル「……だけどおおおおお……！」

？<ホォ……。立ちおるか>

頭に一撃を食らってるから、脚がガクガクと震えるし、力もまともに入らない。けど……！！

スバル「なんにもせず……！なんにも出来ずに……！敗けるのは嫌だ！

!!
」

何とか立ち上がり、腕を上げて構えをとる。

私のIS《震動破砕》はリミッターがついていて今は使えない。

スバル「ううおおお!!」

?<…………>

相手に通じないとか、死ぬかもしれないとか、大事な事すら私の頭から抜けて、私は今の状態で拳を繰り出す!

ペチン…

その力のない拳は相手の胸に当たった。そして、私はそのまま膝を折って崩れ落ちる。

スバル「くっ…うつ…くそう…!」

もう、立てない。私の命は、此処で終わりなの?
地面に涙が零れ落ちて、斑点をつくる。

？＜………フン。久々に気持ちのいいヤツを見つけたわい。ワシの運も落ちたものと思うたが、逆であったか＞

スバル「…？」

殺されない事を不思議に思っ、私は頭をあげる。

相手のガンダムは相変わらず私の前にいて、腕を組んで仁王立ちしていた。

？＜小娘、名を名乗れ＞

スバル「…スバルです」

？＜声が小さあい！！小娘！名を名乗れええい！！＞

スバル「私は…！私は…！スバル・ナカジマです…！！」

相手に言われるまま、私は声を張り上げて名前を叫ぶ…！

？＜よおおし！！スバル！貴様は強くなりたいか！！＞

スバル「なりたいです！」

？＜声を張り上げんかああああ！！＞

スバル「なりたいです…！！」

?<そうか!ならば、今から貴様はワシの弟子だ!!>

スバル「……は?」

?<返事は!?!>

スバル「は、はいいいい!!」

?<ウム!それでよい!!ワシの事は師匠と呼べ!!>

何だか訳も分からない状態で、私は謎のガンダムに弟子入りする事になった。

?<ちなみに、ワシの名は…クーロンガンダムという。どうでもいいことなので頭の片隅に置いておけい!!>

師匠、ソレは大切な事だと思いますよ?

エリオside

カイゼルさんの召集を受けて、僕は管理局の本局に向かう為に時空

ステーション行きの列車に乗っていた。

エリオ「なあ、ストラダー」

ストラダー「なんだ？ マスター」

エリオ「みんなは元気かな？」

ストラダー「会えばわかるさ」

席から外の景色を眺めながら自分の相棒と会話する。外はいい天気だ。

こんな日はピクニックなんかいいんじゃないかな？

ストラダー「マスター、現実逃避はやめた方がいい。なにより、その頬の紅葉がアレを現実と認めさせてるだろう」

エリオ「…やれやれだよね」

数時間前、僕はキャロと一緒に列車に乗る予定だった。

けど、駅に向かう途中で困っていた女性陣がいて親切心から声をかけた。

聞けば女性達は道に迷って困っていた事がわかった。

でも時間もないし、直接案内は出来なかったので地図で目的地までの道を教えてあげた。

すると女性達はえらく僕に興味を示した。恐らく子供の割にしか

り教えた事が興味を引いたらしい。

しばらく話していると女性達が一緒に来てくれと言い始めた。

しかし、僕には時間が無いと説明したら彼女達の一人がメモを渡してきた。

それを受け取り、視線を落として内容を確認すると電話番号が書かれていた。

どういう事か聞こうとして顔を上げると、メモを渡してきた女性が僕のおでこにキスをしてきた。

それに慌てた僕は慌てるが女性は落ち着いてて、後で連絡をちょうだい、その一言を残して彼女達は去っていった。

後は想像に容易い。女性達の元から帰ってきた僕にキャラは、だらし無い、と一言。

妬いてるの？と聞いたらひっぱたかれ、置いていかれた。

ストラーダくアレは流石に10対0でマスターが悪い>

エリオ「…あんまり、聞きたくないなあ」

ストラーダくそうも言ってられないな。マスターの不出来はデバイスの私が正さねばならない>

また始まった。3年前、アレルヤさんが帰っていった後、ストラーダは僕のミスや失敗を正論を持って注意するようになった。どうやらリリースさんの影響を受けているらしい。

ジリリリリリ！！

ストラーダくむ？>

エリオ「いくよ、ストラーダ！」

非常ベルの音と同時に席を立つ。よし！これで説教はチャラだ！

車掌「お客様、急いで前の車両にお移り下さい！後部貨物列車から火の手が上がりました！後部貨物列車を切り離しますが万が一の為にこの車両も切り離します！お急ぎ下さい！」

車掌さんが他のお客様を誘導し始めた。

…えらく慌ててるな。

車掌「君も早く移動して、ほら」

エリオ「……後部貨物列車に何がいるんですか？」

お客さんを移動させていた車掌さんが最後まで残っていた僕に話かけてきた。

車掌「……君は？」

エリオ「管理局の者です。何があったんですか？」

車掌「……実は、後部貨物列車に密輸入されたと思われる人間サイズのガンダムが……」

車掌さんは少し驚いた後、小さな声で事情を話してくれた。

エリオ「ガンダム？…機体があるんですか？」

車掌「ええ、私自身が見た訳ではないのですが…稼働はしていません。とはいえ危険なモノです。既に管理局に連絡してますし、万が一の場合も考えて列車を切り離す事になりました」

エリオ「わかりました。だったらくマスター、カイゼル・デュナス元帥から通信だぞ>すみません、失礼します。カイゼルさん、どうしたんですか？」

通信画面に写るのは元帥の制服を着たカイゼルさんだった。

カイゼル『突然の連絡、すまない。君は今、どこにいる？』

エリオ「リニアレールに乗っています。ただ問題が……」

カイゼル『まさか、ガンダムが見つかった列車に乗っているのか？』

エリオ「あ、事情はもう知ってるんですね。それで提案なんです、こちらで事情を聞く限りでは列車を切り離すそうなので、切り離れた列車の調査と監視も兼ねて応援が来るまで現場に残りたいんですけど、いいでしょうか？」

カイゼル『…助かる。危険があれば現場を放棄しても構わないからな』

エリオ「わかりました」

カイゼル『では、応援が来るまで頼んだ』

通信を切り、車掌さんに向き直ると車掌さんも通信をしていたらしく、彼も通信を切って僕を見る。

エリオ「あの、そういう事なんで…」

車掌「わかりました。では、ご無事で」

エリオ「コレが…密輸入されたガンダムか」

バリアジャケットとストラーダを装備して切り離された貨物列車に入り、長方形のコンテナに近づく。

コンテナの蓋にはGUNDAMと書かれた文字。

エリオ「中は見えないか。ストラーダ、何か反応は？」

ストラーダ<…不思議な事に、コンテナから生体反応があるのだが>

エリオ「…嫌な予感しかない」

ストラーダ<同感だな>

ガタン！！

エリオ「！！」

コンテナから何かが動く音がしてストラーダを構える。

ガタガタ…ガタン！

エリオ「蓋が…動いてる？」

蓋がガタガタと震えながら横にずれていく。

ああ、運がないなあ…撤退しようかな？
ゆっくりと出口へ後退しようとして…

？「……誰か……いるの？」

足が、止まった。

エリオ「…いるよ」

その場に止まったまま、返事をする。声はコンテナの中から聞こえてきた。

しかも、女性の声だ。

？「助けて…動けないの…」

声はか細く、弱々しい。助けたいのは山々なんだけど、開けた瞬間に襲いかかってくるかもしれない…。

エリオ「いや。やっぱり、助けよう」

ごちゃごちゃ考えるより、行動しよう。

エリオ「ストラーダ、周りの警戒を頼む。警戒は厳にね」

ストラーダくわかった。注意しろ、マスター>

ゆっくりと蓋に近づいて蓋を押してずらすと…

？「貴方は…誰？」

白い服…病人が着るような服をきた細身の、僕と同一年くらいの少女が横になっていた。

エリオ「僕は…エリオ。エリオ・モンデュアル。管理局の人間だよ」

？「かんり…きよく…？」

エリオ「え、と…君を助ける組織、かな」

？「助けて、くれるの？」

僕が頷くと彼女は安心したようで柔らかく微笑んだ。…あ、この娘、可愛いな。

エリオ「君の名前は？」

？「…ラプラス」

エリオ「ラプラス…可愛い名前だね」

ラプラス「そうかな…ありがとう／＼」

頬を赤く染めるラプラスに手を差し出すと彼女はゆっくりと僕の手を握った。

エリオ「それじゃ起こすよ」

ラプラス「うん…」

ラプラスの手を引いて彼女を起こす。彼女がちゃんと立ち上がってコンテナから出ようとした瞬間…

バゴオオオン！！

ラプラス「きゃっ…」

エリオ「うわ！」

突然の爆発音と震動が列車を襲い、ラプラスがコンテナに足をひっ

かけて倒れそうになったのでとっさに引き寄せる！

ラプラス「あ…」

エリオ「大丈夫？」

ラプラス「うん／＼／」

結果、僕は彼女を抱きしめる体勢になった。

さらに顔が赤くなった彼女は…なんというか、可愛い。その一言に尽きた。

ストラーダ＜マスター＞

エリオ「ストラーダ、今のは？」

ストラーダ＜べつの車両が爆発したらしい。レーダー、センサーには何の反応もない＞

エリオ「爆発物が仕掛けられていたのかな？」

ストラーダ＜可能性がない訳ではない。だが、ソレは楽観的過ぎるな＞

だよね。恐らく敵襲…しかもアウトレンジからの攻撃かもしれない。僕は接近戦タイプだから非常に不味い。

エリオ「ストラーダ、ラプラスの保護を最優先で考えた場合の選択肢は？」

ストラーダ「選択肢は二つ。一つ、この場で応援を待つ。二つ、敵の射撃してくる方向を予測して回避しながら撤退する」

エリオ「…たぶん応援を待ってたら殺られそうだね。仕方ない、車両を盾にしながらか撤退しよう。ラプラス、ちょっと恥ずかしいけど我慢してね」

ラプラス「え？きやつ！？」

自分の左手をラプラスの背中から反対の脇の下に手を通してお腹の辺りを抱く。

ラプラス「あ…うんと…ちょっと恥ずかしい／＼／」

エリオ「ごめん。だけどこの方が君を守りやすいんだ」

出口から辺りを見回す。こちらの出口から見える景色は草原。反対の出口から見える景色はうっそうとした森林になっていた。

エリオ「ストラーダ、敵の反応は？」

ストラーダく先の爆発以外は何もないな>

なら身を隠しながらいける森の方が敵を撒くのに丁度いいか。
そう考えて、僕は彼女を抱えたまま列車から飛び降り、森の中へと
走った。

シグナム side

シグナム「：では、エリオが現場にいるのですね？」

カイゼル『そうだ。ただし、緊急時や現場での不慮の事態が発生した場合は撤退するように言っている』

シグナム「わかりました。ただちに向かいます」

カイゼル『頼む。艦の手配も済んでいるから急行してくれ』

シグナム「了解しました」

私が返事をした後、通信が切れる。

私は椅子から立ち上がり、首を軽く振り、コキツ、と骨を鳴らす。

キャロ「エリオくん、何かあったんですか？」

隣に座っていたルシエが不安げに見上げてくる。

シグナム「厄介事に巻き込まれたらしい。ルシエはこの場いて後から来る者の案内を頼む」

キャロ「私も行きたいです！」

シグナム「エリオを救いたい気持ちは分かる。だが、今回は早さを要求される任務だ。すまんが、堪えてくれ」

キャロ「……………わかりました。あの、頑張ってください、シグナムさん！」

シグナム「ああ。わかった」

そして、ルシエをその場に残して指定された艦へと駆ける。

シグナム「まったく…世話の焼ける」

今回、デュナス元帥からの提案と指示により機動六課再編をデュナス元帥本人から聞かされた私は元・六課メンバーを迎えに時空ステーションに来ていたのだが…。

シグナム「やって来たのはルシエのみ。その理由を聞けばなんというか…」

いわゆる痴話喧嘩。しかもエリオにはあまり非がないようだが…

シグナム「まあいい。急ぐとしよう」

艦の出入口に到着。警備員に身分証を見せて直ぐに中に入り、ブリッジに向かう。

ブリッジに到着して艦長に確認をとるとカイゼル元帥から既に話が通っていたので直ぐに出発となった。

第18話 出会う者たち（後書き）

機体紹介

登場作品……機動武闘記Gガンダム

登場機体……クーロンガンダム

原作でのパイロット……東方不敗マスターアジア

備考……東方不敗の乗るガンダム。後にこのガンダムはマスターガンダムへと変貌する。

余談ではあるが、クーロンガンダムはシャフルハートという機体の残骸から作られたらしい。

今作ではスバルの心意気に感心し、自分の弟子にしたガンダム。言動が搭乗者のマスターアジアの性格とかなり類似している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4409u/>

魔法戦記リリカル00 - ジェネレーション・ワールド -

2011年12月5日20時54分発行